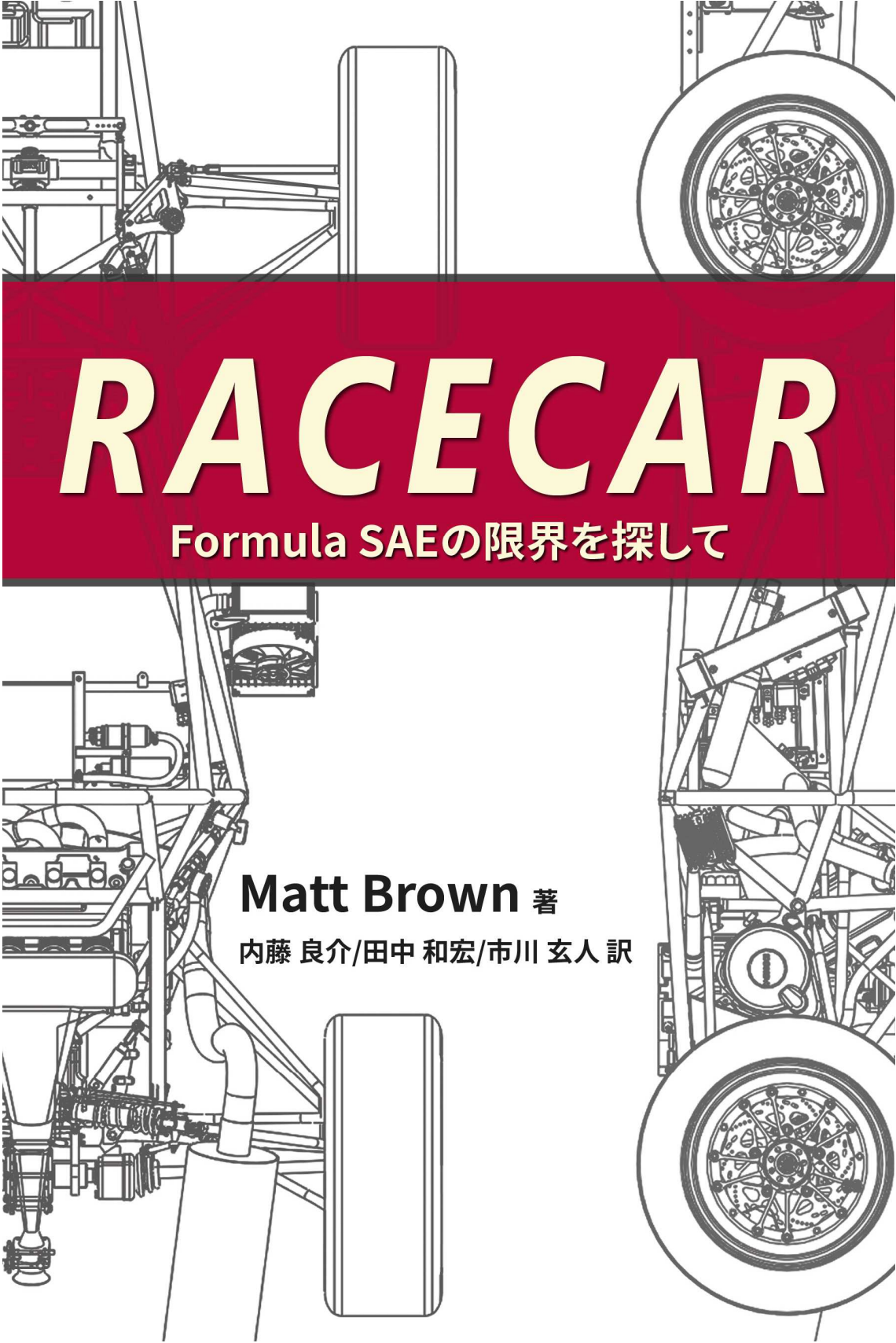




RACECAR

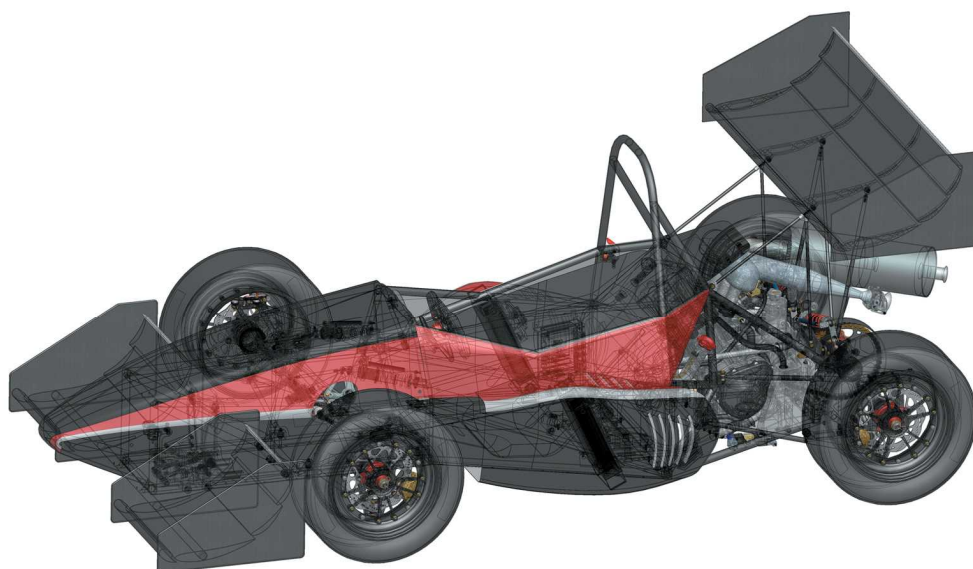
Formula SAEの限界を探して

Matt Brown 著

内藤 良介/田中 和宏/市川 玄人 訳

RACECAR

Formula SAEの限界を探して
SEARCHING FOR THE LIMIT IN FORMULA SAE



Matt Brown 著

内藤 良介/田中 和宏/市川 玄人 訳



目次

前書き

スーパーファスト

シーズン最初のミーティング

予定の変更

予定を守る

レースのビジネス

予定からの遅れ

時折の衝突

サッカー・フォースクエア

ハワイ標準時

最終調整

デトロイト

レース

さらなる最終調整

カリフォルニア

パノラマ

限界で踊る

ファイナル

エピローグ

写真

著者について

奥付

ミッチとグローリア、リーとミッシェル、そして僕らが
レースカーで遊べるように時間とお金を使ってくれた
全てのママとパパに捧ぐ

前書き

僕は途中で何かをやめるタイプの人間ではない。一度始めたことは最後までやり遂げることが大切だと思っている。また、何かを始める前に座ってゆっくりと考えるタイプでもない。つまり、最終的にどれだけの時間と金がかかるか気にしない人間だ。

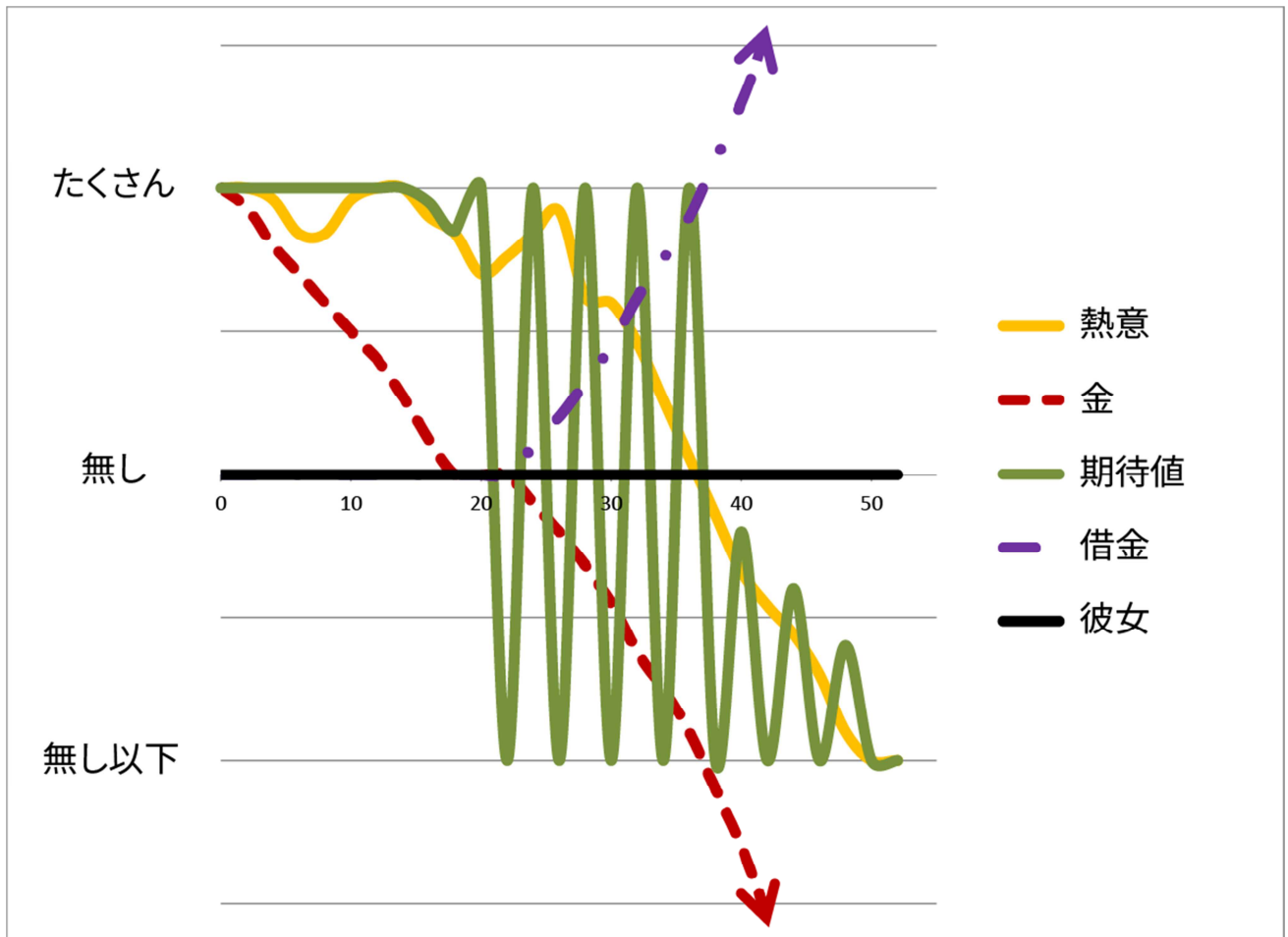
ただこれには少し語弊がある。僕はいつも 15 秒ほど座っていくつかの数字をはじき出す。しかし、そこに Pi の法則を組み込むことを忘れてしまう。Pi の法則とは次のようなものだ。もし机を作るのに 1 週間かかると考えたら、実際には 3.14 週間かかる。そして机の予算が 100 ドルであれば、全てが終わるころには 314 ドルが費やされる。

自動車レースの世界は机を作るのとは少し異なる。レースに費やされる時間と金額の方程式は次のようになる。

$$Cost_{Actual} = Cost_0 + \sum_{n=1}^{\infty} \frac{n\pi^4}{5.67 \times 10^{-8}} + nM_{oney}^n + \text{ForGoddamnEver} - G_f$$

ここで、 M_{oney} は今後 10 年間に稼ぐ金全てであり、 G_f は維持できると期待しているうわべの関係を表す。(注: G_f を W_{ife} で置き換える場合は、 $\text{Lawyer}_{Divorce}$ を追加する必要がある、 M_{oney} はベルギーの国内総生産にほぼ等しい漸近線に近づく)

Formula SAE も同じようなものだ。マシンを作るための資金のほとんどは学校とスポンサーから出ているが、どういうわけか常に金はない。いずれにしても、図で示すと次のようになる。



X 軸は何週間がプロジェクトに費やされたかを表す。もちろん、最初は 30 週目くらいには完成すると予想していた。だが実際に 30 週目になっても完成に近づいていない場合は、プロジェクトを完遂させるために必死に金と時間を使い始める。期待値は、「史上最高のフォーミュラカー」と、「マジでこいつに火をつけて海に放り込んでやる」の間を大きく揺れ動く。40 週目頃には、激しい気分の変動がコカイン中毒のせいではないかとルームメイトが疑い始める。借金はコカイン中毒になったかのように増え続け、こんなことなら時間と金をずっと中毒性が低く、健康や社会生活に害の少ない何かに費やしていたらよかったと思うようになる。例えば、コカインのように。

8 カ月前、昨シーズンのマシンの製作が予定より遅れていたとき、週に 20 時間をさらに余分に費やさなければならなくなったためバイトを辞めた。家で自炊すれば節約できるだろう。しかし料理する時間はなく、調理方法も分から

ない。その上、カーボンファイバーのステアリングホイールを焼くために使って以来、オープンからは疑わしい匂いがしている。学校の成績はフラットパーティーのパンティーのように落ちていった（そんなパーティーに行ったことはないが）。そして学校は前学期に落第したクラスに 1200 ドルを要求している。どういうわけか、不可をとると学資援助は機能しなくなるらしい。

50 週目が近づく。期待値はゼロで、どの授業に出席する予定だったか思い出せず、自分の純資産と国家の債務時計を混同し始め、フォーミュラカーを炎上させてメキシコ湾へと転がり落とせる崖上の土地がないか本当にテキサス州を探し始める。

新入部員たちが何か手伝うことはないかと尋ねてきた。「さっさと出ていけ！ こっちのことなんか心配しなくていい、もう手遅れだ！ 君はレースのない世界で生き続けるんだ！」

そう叫び、頭を強く揺さぶって、顔に平手打ちしたくなる衝動を抑え、その代わりにレンチを渡して彼らを働かせる。レース前の 2 週間は全ての時間をマシンへ費やす。目を覚まし、マシンで作業し、授業へ行き、昼食とマシンの作業のため 1 時間戻り、5 時間授業へ行ってから、マシンに戻って午前 3 時まで作業をした後、ようやくシャワーを浴びて眠りにつくことができる。今日はジョギングするはずだったのにマシンに付きっきりで行けなかった。トイレ掃除？ そんな時間はない。消毒用のスプレー缶に爆弾を括り付けてドアを閉めるだけだ。

全てが予定より遅れている。最終仕上げ、梱包、洗濯物、出発。「絶対やること」リストの中途半端さは新たなレベルに達している。そして「多分やるべき」リストの内容は、「ユニコーンを捕まえる」だとか「虹の尻をこく」だとか書いてあるようなものだ。つまり、書いてあろうがなかろうが一緒だ。

出発予定時刻の 6 時間後、急いで積み込んだトレーラーで出発した。タスマニアデビルに襲われたような状態の部室を学校が気にしないことを願いつつ、

何か忘れ物をしていないかと思い返す。

借りたバンで砂漠の中を突き進み、ラジオの「No Sleep till Brooklyn」をかき鳴らし、まぶたを開け続けるためにレッドブルを3本空ける。他は全員意識を失った。そして助手席の男は疲労で本当に死んでいる可能性が少なからずあることに気付く。部員たちはエイリアンの襲撃を受けた後の死体のようにキャビンの中に散らばっている。後部座席でエミューに乗った小人がジョージアドームを超えていくのが見えたかと思うと、路肩のランブルストリップが眠気を引き裂いた。エネルギーはもう使い果たした。人生の最後の1年間は自分が持てる全てをつぎ込んだ。お金を使い果たし、正気をなくし、共感を失い、レッドブルも尽きた。

そして大会はまだ始まってもない。

一つの活動に全ての時間を費やすと、その活動は世界の何よりも重要になる。冒険のために自分自身の多くを諦めるならば、自身の一部はその冒険の興奮の中で生き、またその冒険の失敗の中で死ぬだろう。それは幸福だが不幸でもあり、恐ろしく興奮的であり、果てしなく冒険的である。

僕らの冒険はレースカーの開発であり、Formula SAE チームに加わったことのある人なら誰もが経験する物語だ。みんな中毒になる。どうしようもない。これはエンジニアリングに対する僕らの愛の形であり、最高を目指したいという意識の表れである。人々はなぜ僕らが強迫観念に取りつかれるのか不思議がり、逆に僕らはなぜ取りつかれないと人々が思うのか不思議がる。誰かがなぜレースカーを組み立てるのに週70時間も掛けるのかと尋ねてきた。僕らはパントマイムを見る犬のようにただ彼らを眺める。

なぜ？ なぜかって？

レースカーだから。

それが理由だ。

スーパーファスト

「私はいかなるときでも全力で運転する」——ジル・ヴィルヌーヴ

ダークグリーンのマツダがコースへと走り出し、空いたスペースを埋めるために僕はマシンをゆっくりと前へと進めた。スタート係（がっしりとした年配の女性で、黄色いベストを着て、手にクリップボードを持っていた）が、スタートラインへと近づく僕のマシンのフロントタイヤを見下ろしていた。スタートラインへ着くと彼女は手を挙げ、僕はブレーキペダルを軽く踏んだ。深呼吸をして、頭の中でコースの最初の部分を駆け抜ける。鋭い左コーナー、それを抜けるとすぐ、徐々に膨らむ右コーナー、そしてストレートに続いて現れる左のヘアピン。

スタート係はコース内を走行する車をじっと見つめ、そのゴールを辛抱強く待っていた。コースが設置された駐車場はほぼ真っ平らだったが、僕らのマシンの車高が非常に低かったせいでマツダはオレンジコーンの背後に広がる地平線の向こうへ姿を消したようだった。

エンジンの重低音越しにスピーカーから声が聞こえた。

「そして次に続くオクラホマ大学の車を運転するのは……、スーパーファスト・マット・マッコイ」

僕はヘルメットの中で静かに笑うと、再びコースへ意識を向けた。鋭い左コーナー、それを抜けるとすぐ、徐々に膨らむ右コーナー、そしてストレートに続いて現れる左のヘアピン。

マツダがフィニッシュラインを通過するとすぐに、スタート係の彼女は僕を

指さした。こちらがうなずくと彼女はグリーンフラッグを振った。僕は深呼吸し、エンジンの回転数を上げ、クラッチをつなげた。

発進の瞬間、わずかにリヤタイヤがスリップした。ぎこちなくゆっくりと最初の二つのコーナーを通り抜けた後、すぐにスロットルを開けストレートを加速し、変速のタイミングを逃さないようにエンジン音に集中した。2 速、3 速、4 速。オレンジコーンの海は振動でぼやけ、まるでミレニアムファルコンのデッキ上に輝く小さなオレンジの星のようだった。

僕らの 2006 年度マシンは、25 万ドルのスーパーカーを超えるような加速とコーナリング性能を持っていた。まるでジェットコースター上へカタパルト射出されるようなものだった。加えてエンジンは毎分 12,000 回転で絶叫し、振動で眼球はガタガタと回り、サスペンションは路面のあらゆる亀裂を直接脊髄へと伝える。レースカーを運転することはコントロールの限界で踊るのと同じだ。タイヤのトラクションを限界まで押し上げ、マシンからのフィードバックを感じ取り、そしてそれに即座に反応し、全てのコーナーを慎重に駆け抜けていく。暴動中の刑務所でチェスをするようなものだ。

僕らはこれを愛していた。好んでいた、ではない。愛していたのだ。タイヤとハイオクガソリンの匂い、高回転エンジンの耳を突き刺すような叫び、歯が抜け落ちそうになるような加速。4 年間のほとんどをこの活動にささげた。マシンに費やしたのは自由な時間だけではない。授業中や睡眠時間の大部分を、設計、製作、修理、改造、テスト、修理、レース、酒に費やした。それと、修理。

そして、酒。

8 月上旬。秋学期が始まる 3 週間前。僕らは数週間前に 2006 年のシーズンを終えた。ストレスと眠れぬ夜に満ちた 1 年は 8 位という結果に終わった。これは僕らにとって大きな一歩だった。それまでの成績はせいぜい「トップ 60」というところに過ぎなかったからだ。130 のライバルチームが参加していたと

はいえ、あまり印象的な結果とは言えない。

「僕らトップ 60 に入ったんだぜ！」

「8000 チームが参加してたの？」

していなかった。

この日のレースはオートクロスだった。駐車場に並べられたオレンジコーンがコースの代わりだ。この駐車場は巨大で、競馬場に向かって傾斜した緩やかな丘に建てられており、いくつかの区画に仕切られていた。そしてありがたいことに、毎月どこかの日曜日に使わせてもらうことができた。僕らが使っていたのはその区画の内の一つだけで、競馬場から遠く離れた丘の頂上の区画だった。

オートクロスはタイムトライアルだ。お互いが直接競い合うレースではない。つまり、コースには同時に 1 台ずつしか出走せず、参加者はラップタイムの記録を競い合うのだ。そこに従業員やスチュワードはいない。ドライバーは半日の間運転し、残りの半日は車に撥ねられたコーンを拾うために走り回る。

周りのほとんどは普通の自家用車だった。ホンダ・シビックや、マツダ・ミアタなんかだ。中には僕らのように、本命のレースに出る前の練習として走る人もいた。Formula SAE チームとしてこのイベントに参加したのは僕らだけだった。世界には 300 以上の FSAE チームがあるが、オクラホマで残っていたのは僕らだけだった。オクラホマ州立大にもタルサ大にも過去にチームが存在した。しかし教員からのサポートが得られなかったために、彼らは記憶のみに留まる存在となってしまった。

イベントが始まる前に、「仕事を割り振りますので、ドライバーはトレーラーへ来てください」とアナウンスがあった。僕はいつも最初に駆けつけて、こう持ち掛けた。「簡単な仕事はないかな、何かこう、日陰でできるようなやつ」。彼らはいつも笑ってくれた。そして嬉しいことに、いつも簡単な仕事をくれた。このトリックはカイルから教えてもらった。彼はゴーカートのペダルに足が届

くようになって以来ずっとレースに関わっていたため、こういうコツを知っていたのだ。

今日、カイルは新しいレーシングネームで出走した。スピーディナッツ・カイル。レースカーの準備と修理で徹夜した後にエントリーフォームに正しい情報を記入しようとするのは賢明でなかったようだ。今日、僕らそれぞれの名前は、スピーディナッツ・カイル、ファスター・ザン・ユー・クリス、ボビー・リッキー・ボビー、そしてスーパーファスト・マット・マッコイだった。

ウイングの追加など 2006 年度マシンにいくつか改良を加えており、今日はそのテストをするためにここに来たのだ。また、こういうことも楽しかった。運転するためのあらゆる口実作り。理論的にはウイングによってタイヤのグリップ力が向上し、コーナーを速く走れるようになるはずだ。ただそれを証明するデータが得られるまでは、来年度のマシンに載せるかどうかは決められなかった。

エンジニアリングとはデータに基づいた意思決定を行うということだ。賢いエンジニアはうまく機能するものを直感的に設計できるが、優れたエンジニアは常に分析とテストで自らの設計を裏付ける。これがクラスで最も賢いわけではない人がより優れたエンジニアになれる理由だ。賢いエンジニアはほとんどの場合、検証無しで設計できるほど十分な知識がある。好調な滑り出した。設計の初期段階では効率的に時間を使えるだろう。だがそれはエンジニアリングではない。優秀なエンジニアは全てを知っているわけではないことを知っているくらいには賢い。だからデータに基づいて決定を下す。

僕らは優れたエンジニアだった。少なくとも僕ら自身はそう思っていた。いずれにせよ、僕らは全てを知っているわけではないことを知っているのでテストしたのだ。

ウイングの設計は完了しており、大部分は昨年製作済みだった。僕は他のチームメンバーの助けも借りながら完成させて、そして今日、実際に試してみる

ことにしたのだ。僕らはウイングの効果に懐疑的だった。というのも、僕らのマシンのコーナリングスピードがおよそ時速 30 マイルであったためだ。近くの空港に行ってみれば時速 30 マイルではウイングがあまり機能しないことが分かるだろう。本来であれば、テストのために 2、3 回使用してお蔵入りにする予定だった。

ただ幸いなことに僕らの予測は驚くほど間違っていた。だから僕らは時間を掛けてウイングを完成させてマシンに搭載した。コーナーが大きければ大きいほどマシンが安定していく。速く走れば走るほどタイヤがグリップしていくのを感じられた。減速するときはまるで壁にぶつかるようだった。マシンが時速 60 マイルを超えると僕は基本的に全力でブレーキを踏んだ。シートベルトは胸にめり込み、ヘルメットは後ろから大砲に撃たれたように前へ押し出された。

フィニッシュラインを駆け抜けると、そのまま惰性走行で仮設のピットエリアへと向かった。

マシンから降りるときにカイルに向かって言った。「このウイングはマジですごい！ 速く走れば走るほどグリップしていくのが分かるんだ！」

「まあ、今日のファステスト (Fastest Time of the Day) だったからな。スーパーファストさんよ」とカイルは笑いながら言った。

「それにリヤが滑っても、止めることもできるしドリフトすることもできる」僕は気付かずに続けたが、喋るのを止めて尋ねた。「今 FTD って言った？」

彼はうなずいた。

僕は笑った。初めての FTD。もちろん、カイルがマシンに乗ればすぐに僕のタイムを超すことは知っていた。でも、その数分間はそこにいた他の誰よりも僕が一番速かったのだ。僕はクーラーボックスから水を取り、一息つこうと腰を掛けた。

「マジですごかった」と僕は静かに呟いて、マシンの方を振り返った。

ウイングもマシンによく似合っている。初めてマシンに取り付けたときは、

まるで新しい髪型が完璧に似合っている友人を見かけた時のようだった。それまでは想像もできなかったような姿がそこに存在していたのだ。決まった。完璧だ。今なら女の子が話しかけてくるかもしれない。

このマシンは小型で、長さは約 6 フィートしかない。フレームの幅は狭く、小さな三角形のサスペンションアームでつながったホイールが、左右両側に約 2 フィートずつ突き出していた。マシンに足りなかったものをウイングはきれいに補ってくれた。視覚的にもゴーカートとは全くの別物になり、本物のレースカーの領域に達していた。これまでも本物のレースカーではあったが、今では形もそっくりだ。

カイルが尋ねてきた。「速そうに見えたが、実際はどうだ？」

僕はうなずいて、ウォーターボトルのキャップを置いた。「ブレーキングのときに良く分かる。減速するとダウンフォースが減ってタイヤがロックし始めるんだ。ただ、かなり滑ってたからなんとも言えないけど」

リッキーが会話に入ってきた。「後半の高速コーナーなんてほとんど横向きだったぞ」

カイルが付け加えた。「ああ、『まだコースアウトしてないのか』って感じだった」

「それは、うーん……。だんだんコーナーが急になっていくし、スピードも出しすぎていたからドリフトしちゃったんだ。2005 年度マシンはどうだった？」僕は注意をそらしながら尋ねた。

ボビーがインテークを外して、懐中電灯を使って中をのぞき込んでいるのに気付いた。

「え？」とカイルは言った後すぐ答えた。「ああ、エンジンがかからない」

「ボビーはまだ走ってないの？」と僕は尋ねた。

リッキーが答えた。「1 回だけエンジンがかかった。いったん始動するとずっと回り続けるけど、再始動はできない。ボビーには吸気漏れだと伝えたよ。こ

のトラブルは前にもあったな」

リッキーは問題の原因を特定して修理するのが得意だった。彼は頭が良く、傲慢でもなかったが、時には対立する考えを前にして意固地になることもあった。彼はいいアイデアもたくさん持っていたので、彼のことを「グッド・アイデア・リッキー」と呼んでいた。僕らが実際にそんな名前と呼んだことはないが、彼はいいアイデアを出すたびにこう言った。「だからいつも『グッド・アイデア・リッキー』って呼ばれるんだよな」。彼はこの日運転する予定がなかったもので、2005 年度マシンの修理に関するいいアイデアも提案止まりであった。

クリスはどこかへ行ってしまった。参加費に 30 ドルを支払い、さらに土曜日を費やしたにも関わらずマシンに乗れなかったことに腹を立てたのだろう。彼の不満も理解できる。僕らはあまりにも多くの時間をこのマシンに費やしていたため、運転のチャンスを逃すわけにはいかなかった。しかも僕らのように、より多くの時間をマシンにささげるためにバイトを辞めた人間にとって 30 ドルは大金だった。インスタントラーメンだってたくさん買える。

カイルと僕は 2006 年度マシンを運転し、ボビーとクリスは 2005 年度マシンを運転することになっていた。僕らの 2004 年度マシンは、分解され、朽ち果てて久しい。新しいマシンの完成が迫り製作が正念場を迎えると、古いマシンから部品取りをするのは良くあることだ。最終的に古いマシンは古いフレームとなり、修理するのが不可能になるほど朽ちていく。2004 年度マシンは決して速いとは言えなかったが、とても楽しい車だった。

僕が初めてこのレースカーを運転したのは 2004 年の夏だった。レースカーと呼ばれるものを僕が運転したのはそれが初めてのことだった。僕はどうやって運転すればいいのか分からなかった。右側のペダルが発進、左側のペダルが停止ということは知っていたが、それ以上のことは分からなかった。コーンに当ててはいけない、だろ？ 変速はいつすればいい？ アークティック・ラッ

シュ味のゲータレードの爽涼さについてテレビカメラにコメントする必要は？

そして、僕は右側のペダルにただ足を置き、車を盗むかのように運転し始めた。僕はオーバースピードでコーナーに突っ込んだので、リヤタイヤが流れた。カウンターを当てるとドリフトし過ぎ、何カ所かはそのまま次のコーナーに向かって行った。一見異常なほど速い3週の走行を終えると、マシンを持ち帰りカイルに尋ねた。「速すぎたかな？」

彼はただ笑って言った。「いや、特に」

レースカーを始めて最初に学ぶことの一つは、コースを最も速く走る方法は、コースを最も速く走る方法には見えない、ということだ。速く走っていると感じたら、普通はただ横滑りを起こしてスピードが落ちるだけだ。これは2004年のあの日からかなり時間がたって学んだ教訓だ。その日、僕は狂ったようにただ運転していた。僕は自分が速いドライバーになれると知っていた。他に負けないドライバーに。僕が知らなかったことは、自分がバカのように運転していたということだった。実に楽しいことではあったが。

これがこの活動にハマったきっかけだ。まるで中毒寸前だった。たった一度だけで夢中になるには十分だ。運転だけではなく、徹夜で車を速くすることにもハマっていった。速く、もっと速くと考えながら、チタン製のインテークバルブを買うために自分の母親のテレビを質に入れようとする耐え難い衝動に抵抗した。

それ以降、僕はチャンスさえあればいつでもマシンを運転した。チームがマシンの走行を予定している日は、いつもピザ屋の配達のスフトを誰かに代わってもらうようにしていた。時々は早めに仕事を切り上げて、チームが片付けてしまう直前に1、2周だけでも運転しようとした。あるときは配達の途中で立ち寄って数周だけ運転したこともあった。

セックスよりもいいものだと思っていた。ただそれはレースカーにずっと乗

っていて実際にセックスをしたことがなかったせいかもしれない。僕は機会があるごとに運転の仕方を学ぼうとした。本を読んだり、ウェブページを探したり、他のドライバーにアドバイスを求めたりした。だが得られる情報は驚くほど少なかった。カイルは僕が尋ねるたびに一般的なアドバイスをしてくれたが、僕はマシンで何が起きているのか、どのように感じているのかを言葉でうまく説明することができなかった。

「スラロームのときは常にコーンとの距離を最小にするんだ。みんな距離を取りすぎてる。そして、コーンに近づいたら早めにターンインする。コーンを過ぎた後じゃない」

これは、運転に関してカイルから得た最高のアドバイスだった。それは本当だった。スラロームでは、みんなコーンを恐れているかのように距離を取って運転していた。僕は常にスラロームに焦点を当て、コーンを倒さない限界地点を見つけようとした。完璧なスラロームは、コーンのベースの上を走行するものだ。コーンを少しぐらつかせるが、倒さない。リッキーはこれを「バターゾーン」と呼んでいた。

2007年の初め、僕はカイルを除けばチームで一番速いドライバーとなった。ボビー、リッキー、そしてクリスを数十分の一秒差で追い抜くことはできたが、カイルには一度も勝てなかった。僕がレースを始めたころ、彼は既にいくつかの異なるレースシリーズで数年の経験があった。この3年間で僕はどんどん成長したが、それは彼もまた同じだった。僕は最初のマシンを運転し始めたとき、ラップタイムを見てこう言っていた。「ああ、カイルの3秒遅れか」。最終的にそれはこうなった。「ああ、カイルの0.3秒遅れか」。どちらの場合にしても、彼がどこでタイムに差をつけていたのか結局分からなかった。彼には決してかなわないと思った。2005年後半のある週末、カイルが参加できなかった地元のオートクロスレースがあった。誰か行きたいかとクリスが尋ねたとき、僕は真っ先に飛びついた。僕が1位になれる唯一のチャンスだと思ったのだ。結果

はクリスに次ぐ2位。僕はがっくりと肩を落とし、トロフィー無しで帰宅した。

「次はあなたよ。レッツゴー！」スタート係の女性が僕に向かって叫んだ。

僕はマシンに急いで戻ると運転の準備を始めた。それは運転というよりも飛行機のフライトの準備のような長い手順だった。まずシートの前の方に座り、後ろに手を伸ばして2本のラップベルトを取り、その後肩越しにショルダーベルトを手に取る。そしてシートの後ろの方に座り直し、両脚の間から「サブマリンベルト」を手に取り、ベルトの金具を全てバックルに取り付ける。そしてヘルメットをかぶり、ベルトを締め、ステアリングホイールを戻し、シートベルトのストラップを締め、メインスイッチを押し、クラッチを引き、エンジンを始動し、ギヤを1速へ入れる。全てを終えたころ、スタート係の彼女はイライラしながら僕をスタート地点に誘導し、そこへ着くやいなやグリーンフラッグを振った。

2周目を走る間、僕はより慎重に、そしてさらに速く走った。最後のコーナーへの脱出を完璧に決めると、ペダルをいっぱい踏み込んだ。フィニッシュラインが僕に向かって加速してくるのが見える。2速、3速、4速。「アアーハハアアアアー！」僕はヘルメットの中で叫んだ。それから、フィニッシュラインからわずか数フィートのところで、マシンの前方で黒色のプラスチックが爆発するのが見えた。フロントウイングが空気抵抗によって崩壊し、半ダースの破片となって碎けていったのだ。ラップタイムは今までの最速だったが、フロントウイングはなくなってしまった。

ウイングが壊れるとすぐコースマーシャルの全員がレッドフラッグを振り、イベントが中断されたことを示した。僕はリッキーとカイルの隣にマシンを止め、マシンから降りた。コースの作業員の一人がコース外に集めたウイングの破片を踏んでいったとき、僕らは失望しながらマシンを見つめて立ち尽くした。

「あれは壮観だったな」あるコース作業員が笑いながら言った。「フィニッシュのところで弾け飛んだんだ」

「できれば、ウイングを付けて運転したかったんだがな」とカイルは静かに呟き、リヤウイングを取り外し始めた。

ボビーは 2005 年度マシンの修理を諦めて、リヤウイングを取り外そうとするカイルを手伝い、そしてその間に僕はフロントウイングを取り外した。僕はマシンに戻り、いら立ちと、興奮と、そして疲労を抱えて次の走行を待っていた。僕には残り 1 本走行が残っていて、カイルは僕の後に 3 本残っていた。

ウイング無しで走行した僕の最後のラップは 2 秒以上遅くなっていた。僕はマシンから降りて日陰に座り、マシンが壊れてしまったことと、ラップタイムを改善する機会が失われてしまったことに腹を立てた。

「そして次に続くオクラホマ大学の車を運転するのは……スピーディナッツ・カイル」

しかめっ面だった僕も笑ってしまった。

カイルはグリーンフラッグを見ると発進した。最初のコーナーでは少しコントロールを失っていたが、三つ目のコーナーからはコーンの間をスロットカーのように走り抜けていった。彼はチームで一番背が高かったが、痩せてもいたためラップタイムへの影響はほとんどなかった。レースカーは常に可能な限り軽くする必要があり、また重心も可能な限り低くする必要がある。それらを最も手っ取り早く変更する方法の一つがドライバーだ。ただ全員がアマチュアの場合、ドライバーの運転技術が重量よりも重要となるのは良くあることだ。

彼がフィニッシュラインを通過すると、タイミングマーキーが点灯して彼のタイムを示した。彼は僕の最速ラップよりもほぼ 2 秒遅かった。

「低速コーナーの所でアンダーな感じがしたか？」と彼はマシンに座ったまま尋ねた。

「いや、僕は……分からないな」と僕は言った。

カイルはわずかな変化にも気付く。例えそれがマシンの片隅だったとしても。僕がバランスの変化に気付くのは太った男がノーズに座ったときくらいだ。

ろう。僕はマシンのバランス変化に反応することはできたが、説明することはできなかった。

僕が先に走ると彼はいつも、「マシンはどんな感じだ？」と尋ねてきた。まるで僕が、「ああ、4番コーナーに入るとコーナー半径の減少が始まるエイペックス地点でアンダーを出す傾向があるな」というように答えるのを期待しているかのようだった。しかし僕の回答は大体、「マジで速かったぜ」くらいのものであったが、それでもなぜだか彼はいつもコメントを求めてきた。

彼は2周目を走り、僕と2.5秒差のタイムでフィニッシュした。

彼の3周目はそれより少し速かったが、僕の最速タイムに勝つほど速くはなかった。僕は初めてカイルを破った。確かに、これは彼が走行する前にウイングが大破したからであり、まあ、彼のウイング無しのラップタイムは僕のウイング無しのタイムより速かったけれど、そんなことは誰も気にしないだろう？その日はどの車も僕のタイムを破ることはできなかった。スーパーファスト・マット・マッコイは無敗だった。また、おそらくもっと重要なことに、ウイングが効果的であることを知ることができた。Formula SAE 大会は、オクラホマシティの駐車場でマツダ・ミアータを打ち負かすよりもはるかに大きな挑戦であり、勝つためにはあらゆる優位性を重ねる必要があった。

僕らはトロフィーを受け取るためにぶらついた後、自分のFTDトロフィーを拾い上げた。その「トロフィー」はただの冷蔵庫用マグネットで、「1位」とか「FTD」とか書いてあった。しかしコレクションするくらいにはキレイだったし、それにFTDは一度のレースに一人しか獲れない。

「誰か晩飯に行きたいやつはいるか？」とカイルが尋ねた。

「俺は家に帰らないと。1時間前に家に帰るって彼女に言ったから」とクリスは言った。

「ああ、家に帰って宿題をやらなきゃ」とボビーは答えた。

「宿題をやるために帰るんじゃない、どうせ宿題なんてやらないだろ」と僕

は言った。

「そう、それこそが問題だ」とボビーは言った。「やらなければならない、さもなければ俺は永遠に大学に居続けることになるだろう」

「おっと、それは違うぞ」とクリスは皮肉めいた声で言った。「最終的には追い出されるからな」

「ええっと、僕は夕食を食べに行けるよ」と僕は言った。

どのみち会場までカイルと同じ車で来ていたので、一緒にいる方がいいと思ったのだ。その朝はバイクを運転するには寒すぎたし、自分のトラックは5マイル以上の旅をするには心許ない車だった。

「ウイングを付けて走るチャンスがあれば良かったんだが。本当に速そうだった」車に向かう途中、カイルは静かにそう呟いた。そして彼は笑って、「あれは爆発みたいだった。破片がいろんな所へ飛んでいったんだ」と付け加えた。

「ああ、僕らで全部拾ったけどね。1日か2日で元の状態にするよ。グラスファイバーで補強してまた壊れないようにする」

駐車場を出て行くときカイルが言った。「FTD おめでとう」

「分かってると思うけど、自分がFTDを獲ったなんて全く思っていない」と僕は言って、ピカピカの新しい冷蔵庫用マグネットを見下ろした。「多分次はマシンを壊さずにできるはずさ」僕は笑顔で付け加えた。

シーズン最初のミーティング

「問題をよく認識できれば、半分解決したも同然である」

——チャールズ・ケタリング

僕らの 2006 年度マシンには 2416 個の部品があった。この中には、エンジンの内部部品やダンパー内の細かい構成部品、自作していないサブコンポーネントは含まれていない。つまり僕らが選定し、設計した部品だけの数字である。そのうちいくつかは自作し、いくつかは購入し、いくつかは改造したが、マシンに搭載される部品の全てには明確な理由があった。

フロントのアップーコントロールアームとフレームを保持しているボルトは直径 1/4 インチで、ネジのピッチは 1/28 インチ、呼び長さは 1-5/32 インチ、AN 規格のボルトで、ロックナットと共に使われる。僕らはこれらの数字を変更し、ボルト締結の継手効率や有効性を変えることができた。締結方法だけでなく、フロントサスペンションのサブシステムやマシン全体のシステムに関してもそうである。もっと小さくて軽い 10-32 ボルトや、同じサイズのチタンボルトを使うこともできたろう。低コストだが強度の低いボルトを使用することもできたし、ボルトの代わりにピンを圧入してボルトを全く使わないようにもできたし、ピンの代わりにドライバーを穴に突っ込んで仕事を切り上げることもできたろう。

マシンを構成する部品には全てトレードオフがあり、どんな部品でも他の部品に何らかの影響を与える。そのため、機能設計における組み合わせは無限に

存在する。ただ、ほとんどの選択肢は常識によって排除することができる。ルールによって設計の範囲は少し狭まり、レースカーの経験によってある程度の方向性を決めることができるだろう。基本的なエンジニアリング手法によってより洗練された設計方針を決定し、最終的には各部品の設計案を管理可能な数にまで絞ることができる。ある部品の妥当な設計方針を決定したら、それらの設計が他のシステムにどのように影響するか、設計が予算内にあるかどうか、メンテナンス性や生産性はどうかを確認する必要がある。そして、時々誰かがこう言い出すのだ。「おい、スフェリカルベアリングとアルミ削り出しのピックアップとシム式のキャンバー調整機構を採用しようぜ!」。そしてあなたはプロセス全体を最初からやり直さなければならなくなる。最終的に、その部品にとって最適な設計と思われるものに絞り込んだら、後はそのプロセスを2415回以上繰り返すだけだ。

公平を期すために言うと、多くの場合、チームが前年にやったことや他のチームがやったことをそのままコピーすることもできる。しかし僕らは、マシンをより軽く、より強く、より良く、そしてより速くする挑戦のためにこのチームへ加わったのだ。レースは勝利こそが全てだ。これくらいで十分と考えることは全く十分ではない。僕らはマシンをさらに良くしなければならない。さもないと速くなることはないし、勝利もあり得ない。そして、あのときもう少しだけ頑張ってさえいればどんなことができただろう何て考えながら、残りの人生をトースター設計に費やすことになるだろう。

また、もし先ほど言ったフロントのアップーコントロールアームのボルトが折れてしまった場合、このマシンは学校の駐車場を時速 75 マイルで走る、アマチュアドライバーが運転するコントロールを失った三輪車になってしまう点も指摘しておかなければならない。しかも大多数の学生は、キャンパス内にレースカーがあり、アップーコントロールアームを失った車が教室の壁を突き破る可能性があるという事実を全く知らないのだ。

そのため、2416 個の部品を選択し、製造し、レースカーらしいものへと組み立てることは難しいことであり、普通の人が要領のいい大学生グループに期待するよりも多くの時間と労力を必要とする。それが分かっていた僕は、2005 年に初めて大会に出場したとき、他のチームもマシンを完成させてきていたことに驚いた。人生の 1 年をこの活動に費やし、全ての時間とエネルギーを大会出場に注げば、同じ境遇に置かれた 1000 人のライバルと戦っていたことに気付くだろう。中には多くのチームメンバーに恵まれ、学部や大学からの手厚いサポートを受けている人もいる。僕が聞いたこともない詳細な設計検討を行ったチームもあった。そういうチームは、潤沢なリソースと何十人もの良く働くチームメンバーを有する上位校だった。

コーネル大はここ数年間トップのチームだった。彼らはアイビーリーグの一員で、チームに深く関わっているファカルティアドバイザーがいた。教員と学校を巻き込むことはチームの競争力を上げるために最も重要なことの一つである。専任のファカルティアドバイザーがいることでチームに継続性と方向性が与えられ、4 年ごとに同じ愚かな間違いを犯すことがなくなる。ペンシルバニア州立大もまたトップチームだった。彼らは優れた設計と豊富なマグネシウムとチタンで、車重を 350 ポンド（160 キログラム）まで軽量化していた。これはエンジンを取り外したバイクの重量より約 100 ポンド（45 キログラム）も軽い重量だ。それは小さなマシンだったが、四つのホイールとエンジンと燃料タンク、そしてレースカーが必要とする全ての部品を備えていた。西オーストラリア大にはレースカーの部品に関する博士論文を書いた学生がいた。

ウィスコンシン大学マディソン校は常にいい成績を収めていた。彼らは比較的シンプルな設計だったが、彼らは自分たちの設計を良く理解し、うまくまとめていた。2006 年の大会で、僕はエンジンデザイン賞を取るために数週間にわたってレポートとプレゼンの改善に取り組んだ。しかし、結果はウィスコンシン大に次ぐ 2 位だった。それ以来、彼らは僕らの宿敵となった。彼らの名前

を聞くたびに、僕らのチームの誰かが「ファッキン・ウィスコンシン」と呟いた。大体は僕だったが。向こうは僕らがライバル意識を持っていることなんて知らなかっただろうし、おそらく彼らもオクラホマ大なんて意識したことはなかったと思うが、僕らにとっては激しい競争相手だった。

今名前を挙げたチームと、他の数チームは本当に印象的だった。彼らは大学生のレベルを超えていた。まるでプロのレーシングチームが学生の大会に来ているようだった。僕らのマシンと僕ら自身がこのチームでやったことは注目すべきものだったが、最初に参戦した大会でデザインファイナルのマシンを見たとき、僕らよりも数年先を進んでいると感じたことを覚えている。彼らは世界に通用する大学であり、僕らはカンザスかどこかにある中流大学に過ぎなかった。

ほとんどの人はこのプロジェクトの範囲を理解するのに数週間かかる。これはおそらくいいことだった。もしこのチームで何をするのか誰もがすぐに理解できるなら、このチームに入る人はいなくなってしまうだろう。

いずれにせよ新しいメンバーはいつもキラキラした眼でやってきて、この魅力的なカマロを改造したがるのだ。そして、専用のレースカーを一から設計し、組み立て、テストし、改良し、レースすることについて毎年丁寧に説明するのが僕らの仕事だった。自らの人生全てを費やすことになる点は説明しなかった。そのことはすぐに理解するだろう。

「これは、学生としてできる最も刺激的なことのひとつだと僕は思う」

その年の最初の公式チームミーティングで、僕はチーフエンジニアとして簡単なイントロスピーチをしていた。ミーティングは工学部棟の中で最も新しい会議室の一つで開催していた。椅子を丁寧に使うのならば部屋の使用を許可すると言われていた。この椅子はある理由でとても重要なものだった。

広報チームの通称リッキーは、より多くの人々がミーティングに来てくれるように、キャンパスの周りにポスターを貼り、工学部の授業でプレゼンを行った。

それはうまくいったようだ。部屋は満員以上となった。リッキーは名ばかりの電気工学専攻だったが、2007 年度の活動では電気配線とハーネステープを手放し、代わりにチラシの配布とスポンサー獲得のためのプレゼンを選択した。僕を含むほとんどのコアチームメンバーは今年で卒業するため、チームが将来成功するように、できるだけ多くの新しいメンバーを募集しようとした。

「今は大体.....50 人がここにいるけど、次の週には 30 人になって、そして 10 人になって、1 年後には 4 人になる」僕は淡々とした口調で述べた。他の連中は自由な時間があるとマリオカートで遊び、マリファナを吹かし、大学がどれほど難しいかについて不満を言うのだ。

「もし君らが自動車業界やレース業界に入りたいのなら、その 4 人のうちの 1 人になる必要がある。この活動は大変だけど、僕が今まで経験した中で一番楽しいものだと思う。2007 年度マシンの設計はほとんど完了しているけど、まだやるべきことは多く残っている。君たちがチームの一員となるために必要なプロジェクトのリストを印刷してきた。みんな基本的なものばかりだけど、自分自身がプロジェクトを遂行できるってことを僕らに示さないといけない。もしそれができれば工房やコンピューターラボを使えるようになるし、他のチームメンバーも巻き込むことができる」

僕は新しいメンバーが参加しやすくなるように心掛けていたし、それにそれぞれの人が自分のスキルややる気を発揮できるようなプロジェクトがあれば、もっとやりやすくなるだろうと考えていた。僕が初めて活動に参加したときはチームのメンバーとなるのに苦労した。1 年以上もミーティングに出席し続けて、その後にプロジェクトが与えられた。僕は確かに全体的に静かでシャイだったが、優秀なチームメンバーの多くがそうだった。僕はチームの一部になりたかった。そして工学部棟の横の芝生で初めてマシンを見たあの日から、ずっとチーフエンジニアになりたいと思っていた。僕は 1 年以上グライnderや切断作業、床の掃除を毎週続けた。しかし、僕は何も設計させてもらえなかった。

だから、先輩がひどい設計をしているのを1年間半目で見っていた。ジェイムズ・ジョイスはかつてこう言った。失敗は発見の入口であると。これは間違いを犯した人と同じようにそれを眺めていた人にも当てはまるだろう。

僕はそこから学び最善を尽くそうとしたが、チームリーダーが僕より知識もやる気もないチームメンバーを選んで大会に連れて行くのを見るのは癪に障った。僕は卒業したチームリーダーの多くに対して敵意を持っており、彼らが卒業後にチームを訪ねてきても避けてしまっていた。僕の態度はおそらく未熟で不適切だったかもしれないが、いずれにしても今年は新しいメンバーにそんなことが起こらないようにするつもりだった。

僕はボビーに目を向けると、「僕からは以上だ」と付け加えた。

ボビーはチームのキャプテンであり、そのポジションにしては比較的若いチームメンバーだった。彼はカリフォルニアのベイカーズフィールドからオクラホマに引っ越してきて、祖父母のゲストハウスに住んでいた。ボビーの短い黒髪には既にいくつかの白髪が混ざっていた。彼は陸軍の予備役将校訓練課程だったが、このレースチームに時間を割くため途中で行くのを止めた。チームメンバーのほとんどは成績が悪く単位もいくつか落としていたが、ボビーは抜きんできていた。彼が卒業するのかどうかは分からなかった。あいつは太陽が超新星になるまでチームにいるだろうな、とみんなは冗談を言っていた。

「オーケー、じゃあ俺たちがここで何をしているのか理解してもらうために基本的なことを教える。俺たちは Sooner Racing Team だ。俺はボビー、最高責任者だ。さっき話をしてくれたマットはチーフエンジニアだ。アンディはシャシー担当だ」ボビーは指し示した手をアンディからクリスに向けて話を続けた。「そしてクリスがエンジン担当だ。俺たちには二人のファカルティアドバイザーがいる。ソマー博士とミッチ・バリスだ。二人とも後ろのあそこにいる。俺たちは Formula SAE に出場する。FSAE は国際的な大学対抗の大会だ。この大会は Society of Automotive Engineers によって開催されている。SAE

というのはここから来ている。直径 20 ミリメートルの吸気制限機構を備えた 600cc のバイク用エンジンを搭載した、小型のフォーミュラスタイルのレースカーを製作する。競技ルールはレースとしてはかなり寛容で、俺たちは多くのことができる。FSAE は世界中で約 300 のチームが存在する。デトロイトで 130 チームと競い、カリフォルニアで 80 チームと競い合う。参戦チームは世界中からやって来る。イングランド、オーストラリア、フィンランド、日本.....」

みんな既に興味を失っているのが分かった。僕は周りを見回し、まだ注意深く聞いている人を覚えておいた。僕らのミーティングはマイケル・ベイの映画ではなかったが、レースカーに関するものではあった。もしそれを眠らずに聞けないのなら、そいつはおそらく間違ったミーティングに来ていたのだろう。

ボビーは続けた。「大会には、オートクロス、エンデュランス、アクセラレーション、スキッドパッドなど、数種類のイベントがある。また、デザイン審査のような静的イベントもあり、プロのレースカーエンジニアが多くの難しい質問をして採点を行う。マシンを運転するのはチームのメンバーで、経験を積みばドライバーになるチャンスが得られる」彼は喋るのを止め、言うべきことを全て言ったかどうかを思い出そうとした。「マットが言った通り、たくさんの楽しみと、ええっと.....ああそうだ、みんな新入部員用の用紙に記入してサインしてもらわないといけない。サイン用紙は誰が持ってる？」僕らは辺りを見回した。新入生の一人が用紙を拾い上げ、空中で振った。「オーケー、彼が持っている。帰る前にサインするのを忘れないように。じゃあ、クリスとアンディからそれぞれのシステムについて説明してもらおう」

レースカーのようなものを設計するときはシステムズアプローチをすべきだ。つまり、システム全体を俯瞰する必要がある。どんなに設計が優れていても、部品を製作して、ただボルトで固定するだけでは機能しない。キッチンに立つコック全員がお互いに話し合わなければならない。さもないとニンジン入りマンゴーラザニアのアイシング掛けを食べる羽目になる。優れた技術と、

考え抜かれて設計された部品全ての相互作用によって優れた車は作られるのだ。これが、15 台の完全に異なる設計のマシンの性能が同じレベルになる理由である。どんな部品でも他の全ての部品に影響を及ぼす。そして、それらは全て互いに機能しなければならない。これはマシンにおいても、マシンを作るチームにおいても同様だ。

二つの主要パートとなるシャシーとパワートレインの二人の責任者が、それぞれのパート間の調整を担当する。チーフエンジニアはその他の領域を担当し、また、その二つの主要システムの統括を担当する。つまりこれは、クリスとアンディとは多くのコミュニケーションを取る必要があることを意味した。

アンディは簡単にコミュニケーションが取れた。彼は率直で几帳面で、時々防衛的だったが、攻撃的になることは決してなかった。彼は弱々しく柔らかな口調で話し、いかにも「いい青年」という振舞いをしていて、それが問題になることはほとんどなかったが、時々、一見でたらめなことについて怒りに満ちた冒涇をすることもあった。彼らは僕らの誰にも指示することはなく、いつも陽気に楽しんでいた。

クリスはあまり一貫性がなかった。彼は社交的な場にいるときは楽しそうだった。話していたり、飲んでいたり、活動が忙しくないとき、彼は本当に幸せそうだった。チームのミーティング中や製作中は、彼は真剣かつ直接的で、そして失礼に近いものがあった。時々、彼は設計アイデアに固執することがあった。彼のアイデアは大体他のものより優れていて問題になることは稀だった。いずれにせよ、彼抜きではやり遂げられなかった。このことは去年の終わりに彼がチームを離れようとしたとき彼にも伝えた。彼はとても良く働き、多くの時間を活動に費やしていた。そして製作スキルも優れていた。例年、およそ 5 人が活動に多大な時間を費やしたが、彼はそのうちの一人だった。

クリスとボビーは両方ともずんぐりした黒の短髪だった。きっとあなたは彼らを兄弟と見間違えるだろう。彼らは二人とも無精髭を生やしていたが、チー

ムのほとんどがそうだった。髭剃りなんてクソだし、それに時間もかかる。ツーストライク。やらない理由には十分だ。

「誰から行く？」ボビーが尋ねた。

クリスが前に立った。「俺からいこう。ええと、俺は今年パワートレインを担当する。パワートレインはエンジンとドライブトレインから構成されている。ただしエンジンは改造しない。吸気系と排気系を自分たちで製作し、燃料噴射コンピューターを接続しダイナモでチューニングを行う。そして.....リヤエンドや車軸など、エンジンの出力軸からリヤタイヤの間にあるものは全て基本的にドライブトレインの範囲だ。あとボビーが言ったように、使うのは600ccのバイク用エンジンだ」

クリスが話を終えると、短い沈黙の後、誰かが手を挙げた。

「じゃあ、君」クリスは挙げた手の方を指し示した。

「シリンダヘッドのポート加工をしたりとか、カムシャフトを変えたりしてエンジンを改良しないんですか？」

クリスは目を細めて後ろの壁を見た。これは彼の「今から説明してやるぞ」のポーズだった。

「リストラクターを使用すると、純正バイクよりも空気の流れが少なくなる。だからシリンダヘッドのポート加工は意味がない」とクリスは答えた。

——いい回答だ。——と僕は思った。

クリスは尋ねた。「他に何かあるか？」

返事はなかった。

「オーケー、じゃあ次はアンディだ」ボビーが言った。

「僕がアンディだ。今年はシャシーを担当する。シャシーとは——」

「もっと大きな声で！」カイルが後ろから叫んだ。

「え？」

「もっと大きな声で。全然聞こえない」

「あー、分かった」アンディは静かにそう言うと声を大きくして続けた。「僕はアンディだ。今年はシャシーを担当する。シャシーとは基本的に全てだ……、パワートレインではないもの全てが担当部品になる。つまり、サスペンション、フレーム、ボディ、エアロダイナミクスなんかがそうだ。まあ、実際にエアロダイナミクスを担当しているのはマットだが」アンディの声はゆっくりと元の大きさに戻っていった。「まあ、こんな感じだ。何か質問は？」

アンディは観客を魅了させ続けることの達人ではなかった。そして繰り返しになるが、ここは放送部ではない。

ボビーは演台に戻りこう言った。「フィルは工房の責任者で、全てのパーツが揃っているか、そして全ての機器が整備されているかを確認する」ボビーはフィルを見て、静かにこう尋ねた。「何か言いたいことはあるか？」

フィルは大男で、いつも同じ格好をしていた。無地の白いTシャツに、黒い帽子、青いジーンズ、そして度付きのサングラス、といった具合だ。彼は漫画のキャラクターのようで、僕は彼のクローゼットの中がコミカルに並んだ白いTシャツと青いジーンズで一杯になっているものと想像していた。

フィルは立っている場所から動くことなくこう続けた。「俺が要求することはただ一つ、自分が汚した場所を清掃し、道具をきちんと片付けることだ。俺は用務員じゃない、だからお前たちが汚したところをきれいにするのは俺の仕事じゃあない。あと物は大切にしろ。もしお前たちがここの機器やジグテーブルを壊してみろ……そうだな、もしジグテーブルを壊したら俺は感心するだろうが、そんなやつはここから出て行ってもらうからな」。フィルは話の所々に特徴的な笑いを挟んだ。彼はいつもこのような笑みを浮かべていた。それは言いたいことを伝えた後に相手からの敵対心を和らげようとしていたかのようだった。それは少し間抜けに見えた。でも僕は幸せそうな人は好きだし、それにフィルはいつも間抜けで幸せそうで、そしてそれを示すかのように笑っていた。

設計担当者のほとんどはチームに加わってからかなりの時間が経っていた。カイルはブレーキを設計していて、チームに加わって既に4年が経っていた。クリスも同じく約4年チームにいて、ボビーは3年ほどだった。加えて前年に何人か設計担当として連れてきたメンバーがいた。というのも、当時は人手不足だったのと、学期が始まる前にシステムの設計に着手する必要があったためだった。大学院生のラルフは僕らの活動にいくらかの関心を示していたので、サスペンション部品をいくつか設計させることにした。誰もラルフを知らなかったが、本人は自分の担当について興味を持っていたし、僕らも人手を必要としていた。僕らは彼のことをパズルの比較的重要なピースの一つとして扱った。そのため彼に対しては時間を掛けて丁寧に説明した。

ジョシュは昨年から何回かミーティングに顔を出していて、何回か手助けもしてくれた。いくつかの点でジョシュは僕がチームに入ったときのことを思い起こさせてくれた。彼は安い車を持っていて、それにカーボンファイバーの部品を取り付けたり、スロットルボディに穴を開けたりと、いつもいじり倒していた。僕も自分の車に似たようなことをしていたが、しかしそれは車が速くなるのを期待してのことではなく、単に車をいじるのが好きだったからだ。彼はミーティングにはいつも顔を出してはいたが、しばしば他のことに夢中になってしまうようで、社交面では少々不器用だった。僕にとってもそれは同じで、いつもマシンの設計に夢中になっていた。人付き合いの苦手な人がチームの一員となるのは難しいことは分かっていた。ジョシュが車の開発に加わるきっかけを与えて彼を試してみた。僕らは電装系の担当者を必要としていたため、彼が電気工学に長けていたことも後押しした。だから僕らは彼を電装系の責任者としたのだ。

「もう言いたいことはないか？」ボビーが尋ねた。

「もうひとつ」僕は演壇に登りこう言った。「これはここにいる設計担当者のために、新しいメンバーは関係ないかもしれないけれど.....、もし良かった

らみんなも参加してみて欲しい。チーフエンジニアというのは嫌なヤツだってことは分かっているけどね」僕は喋るのを止めみんなの意見を待ったが、何もなかった。「それで、もっとモチベーションを高めるいい方法を見つけたので取り入れることにした。この『マッコイさんの星と車の壁』をね」。僕はみんなの名前が載っている紙を掲げ、小さな金色の星のステッカーをそれぞれの名前の隣に置いた。「まあ、幼稚園でやるみたいなことなんだけどね。君たちがいい仕事をしたとき、例えばスケジュール通りにタスクをこなしたときは、この金星をもらえる。そして、何か本当にすごいことをやってのけたとき、例えば予定より前倒しで仕事を完了させたり、目標を超えることができたりしたら、星5個に相当する車のステッカーをもらえる。そして、年の終わりまでに一番多くのシールをゲットした人は、なんとクッキーがもらえる。よくスーパーで見かける、でかいピザと同じくらいのクッキーだ」。みんな楽しそうな顔をしていた。僕は親指を立てながら、できる限りの作り笑いでプレゼンを締めくくった。「みんなここに来てくれて、それぞれの役割を引き受けてくれたから、全員に金星を一つあげよう。ここからが始まりだ」

僕のルームメイトはビジネスを専攻していて、授業のことや、そこで学んだ従業員のモチベーションアップのテクニックなんかを聞かせてくれた。見返りが大したものでもなくとも、参加者たちに友好的な競争をさせることは多くの好ましい結果をもたらすのだそうだ。僕らはみんなレースに携わっていて、それは本質的に競争なのだから、競争させることに関しては問題ないだろう。問題なのは、このアイデアをどうやってこのひねくれた大学生の連中に、ビジネスの授業で習うダサいモチベーションアップテクニックなどと切り捨てられることなく発表するかだった。これを納得してもらうには、ビジネスの授業で習うダサいモチベーションアップテクニックとしてそのまま発表するという、最も子供っぽい方法が最善であると僕は判断した。

これが僕のマネジメントテクニックだった。初めてチームに加わったときか

ら僕はチーフエンジニアを目指すことを決めて、選出されるほぼ一年前にはそのことを周知していた。僕はチームキャプテンではなくチーフエンジニアを選んだが、それはマネジメントよりも技術的なことに集中したかったからだった。しかしここ数カ月で、チーフエンジニアというものは「エンジニア」というよりも「チーフ」の面がより大きいことが明らかになり、僕がやりたいかそうでないか、また僕が得意かどうかに関係なく、マネジメントのようなことをしていた。そのため、僕はちょっと調べたり、何人かに相談して、そしてこのアイデアにたどり着いた。僕は他にもいいテクニックをいくつか採用した、例えば、他のチームメンバーの前でチームメイトを批判しないことや、批判するときは必ず一言褒め言葉を添える、というようなものだ。他人の自尊心を守るためのものとか、自分が周りから嫌われているとできないことなんかも山ほどある。

ボビーは演壇に登って言った。「よし、今度の土曜日の 12 時ごろから 2006 年度マシンを動かすぞ。見学に来たり、コーンを並べるのを手伝ってくれたりする人はみんな歓迎だ」

僕はそれを聞くなり、こう付け加えた。「手伝いに来てくれた人はみんな金星をあげるよ！」

ボビーは続けて言った。「北の工房に正午に集合だ。地図は僕らのウェブサイトにある。それじゃあ、ミーティングはこれで終わりだ」

人々が散り散りになるになっていく中、僕は新メンバーのサインを用紙からピックアップし、「興味があるシステム（シャシー・パワートレイン）」の列を追った。何人かのバカは「ドライバー」と書いていた。

毎年、チームメンバー志願者の中にはこういう性格のやつが出てくる。いつも違う顔をしていたが、みんな同一人物だったかもしれない。なぜかこういうバカは一人はいた。僕らはそういうやつを基本無視したし、向こうも 2 週間以内にはどこかに行ってしまった。こういうやつとは正反対に、最初のミーティングの時点でチームの活動に興味を持ちすぎて、やりたいことを全部話してく

る人も何人かいた。熱意は歓迎したが、そんな奴らはいつも3週目までには興味を失っていた。僕はいつも彼らをチームに引き入れようと努力し、留まってくれることを望んだが、それはかなわなかった。それは単に彼らの性格だった。ただこれはいいことであつたのかもしれない。こういう人は大抵難解で複雑すぎる設計をしたがつたし、それに僕らはいつもこういった「枠の外」の思考を排除していたからだ。常識という枠の中で考えうる全ての可能性を探り尽くす前に、このような「枠の外」を考えることは軽率であり、賢明とは言えない。僕らはまだその巨大な枠の中にいたのだ。

ミーティングに出席して、必要なことは何でも手伝ってくれて、本を読んで、知的な質問をして、大会や車のことについて学んでくれる人は数人だった。そういう人間がチームに加わり、来学期の間ずっと一緒に過ごすことになる連中を見ることになる3回目のミーティングを僕は辛抱強く待っていた。そのメンバーが誰であるかを理解するまでに、僕はその名前を覚えては忘れてを既に3回繰り返していた。最初の数週間はそういう人の名前を覚える努力をさほどしなかった。なぜなら、彼らのほとんどはその後二度と現れないことを知っていたからだ。

僕らは親密なチームだったが、誰でも歓迎するように努めた。ただしバカは除いて、だが。

大学の方針で、どのクラブも生徒は週10時間以上の活動をしてはならないことになっていた。ただ実際のところ、僕がマシンやチームについて何らかの形で関わった時間は週30時間を下らなかったと思う。毎週数時間は、「やることリスト」に決して載らないようなこと、つまり床の掃除や道具の整理みたいなことに費やしていた。これは他の熱心なメンバーもほとんど同じだったと思う。他のメンバーが実際どれだけやっているか誰も理解していなかったし、マシンの驚くような複雑さも完全に理解していなかったと思う。なぜならマシンに使われる部品は数千にも上り、しかも部品の多くが調整可能な作りになって

いるためそのセッティングパターンは数え切れないものになるためだ。

そのほぼ全てを知り得ていたのは、僕らが「スーパーデイズ」と呼んでいた男だ。僕らがそう呼んだのは、僕らが恥ずかしくなってしまうほどの時間を彼がマシンの開発に費やしていたからだった。彼は極めて慎重に部品の選定や設計を行い、何百時間も費やしてコンピューターモデルを作り上げていた。そのモデルは極めて詳細に作られていて、エンジン内のオイルやラジエータ内の水までもが再現されていた。彼は昼間や夜にふらっとやってきては、何時間もぶっ続けで作業していた。寝てすらいなかったと思う。デイズは優れたチームプレーヤーとは言えず、ミーティングにはめったに現れなかったし、決めた役割も全て拒んでいたが、他の誰よりもマシンをいじっていた。また彼は授業にもほとんど行っていなかった。それが大学7年目で彼がいまだに学士号を取れていない理由だった。彼は作業と睡眠との合間のどこかでジムへ行っていた。確かに彼はチームの誰よりも健康的だった。彼はめったに喋らず、大体はいつもヘッドホンをつけ、下を向いて、コーヒーを片手に歩いていた。彼はいつもコーヒーを飲んでいて。彼が口を開くと、静かに、そしていつも技術的なことを話した。あの男は単なる機械、感情を持たないレースカー開発ロボットで、マシンを改良するあらゆる設計変更ができる先天的な才能を持っていた。

「おい、誰かミーティングでデイズを見かけたか？」ボビーが尋ねた。

「あいつなら、ミーティングの初めの方で出て行ったよ」僕は続けて言った。

「コンピューターラボにいるんじゃないか？」

ボビーは肩をすくめて言った。「まあ、マシンに打ち込んでるならいいか」

僕はコンピューターラボに向かい、彼が何をしているかを確認しようとしたが、既に彼は出て行った後だった。

ラボは無人で、待機状態の高性能コンピューターが僕を手招きしていた。僕は自分に、ミーティングの後にマシンの仕事をしようとしているわけじゃなく、頭の中にアイデアが溜まっているからコンピューターを使いたいのだ、と言い

聞かせた。それにもし家に帰っても、宿題を始めて 10 分かそこらでレースカーのアイデアを考え始めて横道に逸れるだろうことは分かっていた。微分 (Differential) 方程式は僕にとっては単に LSD (Limited Slip Differential) を思い出すものでしかなく、そのため宿題の紙は本来の計算式が半分と残りはスタブシャフトの断面図といった具合になり、結局宿題を全て書き直す羽目になっていただろう。

そうだ、ラボにいる方がよっぽど有効な時間の使い方だ。コンピューターにアイデアを打ち込んで、11 時までには家に帰ろう。

マシンのクラッチレバーは 2 年前に僕が設計したもので、いくつか改良が必要だった。自分で言うのもなんだが、デザイン自体は完璧だった。そのクラッチレバーはステアリングに取り付けられていて、ドライバーがどちらの手でも、どんなステアリングの角度でもレバーを引くことができるようになっていた。必要のないときはドライバーの邪魔にならず、いざ必要なときにはちょうどいい位置にあってくれる。マシンのレバー類はアルミニウムの削り出しで作られており、製作は簡単だった一方で、僕らが求める剛性は持っていなかった。僕は重量増加に甘んじて単に断面の肉厚を増すことはしたくなかったので、別の材料を探していた。マグネシウムは適した材料だったかもしれないが、僕らには機械加工の能力も、この材料についての経験も持ち合わせていなかった。それでも、僕はいくつかの異なる設計について分析を行い、もしそれが大きな利点だったならば、金を払ってでも誰かに作らせただろう。

時計は 11 時を静かに過ぎてゆくところだったが、僕はまだアイデアを出しきっていなかったし、その内容を忘れてしまうのも嫌だった。マグネシウムは有望とは思えなかったし、まだ鋼鉄製の中空断面構造には目をつけていなかった。鋼鉄はアルミニウムと同等の比剛性率を持ち、機械加工は難しい一方で、必要としていたサイズに近い既製品のパイプが手に入り、それらを溶接することで容易に望みの形にすることができた。加えて分厚い中空断面を用いること

ではるかに高い剛性を期待できた。何回か解析を繰り返した結果、これが有望な設計のように思えてきた。僕はこの設計をマシンの 3D モデルに取り込み、他のパーツと干渉せず、かつ使いやすい位置にあることを運動解析により確認した。モックアップ上でこの部品の使い勝手と干渉確認をするべきだっただろうが、僕の設計は十分に単純で製作も容易であり、実際のハンドルでテストすればいいだろうと考えた。

だいぶ夜は更けてきたが、設計は良くなり続けていた。僕は満足がいくまで、3D モデルの修正、強度・剛性解析、そして運動解析の一連のループを繰り返した。午前 3 時になっても微分方程式の宿題は一向に片付いていなかったが、レースカーのデザインは少々ましになった。確かにそれだけの価値はあったが、11 時はとっくの前に過ぎて、焦点はもうぼやけて来ていた。チームに見せるためにスクリーンショットを何枚か撮り、コンピューターをシャットダウンした。

冷たい朝霧の中を壊れかけたバイクに乗って家まで帰るのはいささか不快だったが、寒さのおかげで居眠りをせずに済んだと考えれば逆に良かったのかもしれない。僕は再びコンピューターラボの中にどうやったらベッドを置けるかを考えた。ソマー博士は決して許さないだろうが、もし置くことができれば僕らの生産性を著しく向上させたであろう。何しろあと 45 分は余分に働けて、さらには授業の前まで十分な睡眠が取れるのだ。僕にはまだまだアイデアがあった。マシンをもっともっと良くするアイデアだ。ただ時には、何時に帰るべきかを覚えておかなければならないし、それに今日の帰るべき時間はもう 4 時間も過ぎてしまっていた。

予定の変更

「人々はクラッシュのことを記憶するが、ドライバーはニアミスを記憶する」

——マリオ・アンドレッティ

僕は速度計から目の前の高速道路へと視線を移し、前方に車がないことを確認するとまた速度計へと視線を戻して、針が112を超えるのを待った。僕はまるでシュリンク包装されたようにしっかりとバイクにしがみついていた。肘を体の近くに引き寄せ、頭を押し込み、目で計器類を追っていた。ほとんどの新しいバイク、特にスポーツバイクにとって112という数字はもっと心躍る数字への小さな一歩だった。しかし努力にもかかわらず、これが僕のバイクの限界だった。30年落ちのマットブラックのヤマハ。よりいい圧縮を得るためにエンジnbrックを機械加工して、シリンダヘッドも交換し、吸入量を増やすためにサージタンクとマフラーを取り換え、空気抵抗を減らすためにウィンカーと片方のミラーを取り外したが、得られたのは112だけだった。

違う天候だったら速くなるかどうかを確認するのが好きだった。寒い日は空気の密度が高くなり、空気抵抗が大きくなってバイクの速度は低下する。しかし、吸気量は増えるため馬力は増加する。僕はどちらが勝るのかを見てみたかった。それは一種のゲリラ実験だった。しかし悲しいことに、いつも112だった。

僕はミラーを覗き、警官や保安官の興味を引いてないことを確認すると、上体を起こして普通速度まで落とし、高速を降りて工房へ向かった。

僕らの工房はキャンパスから 10 マイルほど離れた場所で、空っぽの畑に囲まれた商業ビル地区の一画にあった。この地域の情報を一つ言っておくと、最も近い隣人の一人は歌手のトビーキースと彼の 160 エーカーの牧場だった。とても孤立しているため、通勤通学の時間帯を過ぎればあらゆるものから離れることができた。工房は配管業者や石工会社と共有する大きな白いメタルビルディングの一部だった。これはオーソドックスなプレハブのメタルビルディングで、小さなオフィスにソファ（主に寝る用）と、ホームレスの男とほとんどが壊れたバイクが戦う金網のリングのようなトイレが置かれていた。

アンディとデイブはほとんど一日中そこにいた。カイルとリッキーは僕の直前に到着し、ボビーとクリスは既に到着していた。チームのコアメンバーが集まった。少なくとも重大な決定を下すのに十分な人数だ。いいことだ。というのも今日はアンディが悪い知らせを持ってきていたからだ。

「600RR は受け入れられない」溶接台に座った彼は、先制攻撃的な表情で言った。「他の全てを捨てないと組み込めないんだ」

600RR は過去 5 年間使用していたエンジンの新しいバージョンだ。いくつかの利点もあった。少し軽量で、排気バルブも大型化している。そして最も重要なことに、ホンダから無料で 2 台入手できていた。

ただ残念なことに、このエンジンはバイク用としては優れた設計であったが、レースカーにはあまり向いていなかった。トランスミッションが垂直に積み上げられているため、上部が重くなるだけでなく、フレームとエンジン周りのサスペンション設計もかなり難しくなってしまう。アンディとデイブは数週間にわたってエンジン周辺的设计を進めてきたが、どうも無駄になってしまったようだ。

アンディは続けた。「これだと望むサスペンションジオメトリは得られない。それにエンジン回りにフレームを配置するにはパイプを横に出さないといけない」

「予定だとデザインフリーズまで2週間じゃなかったか？」と僕は言った。

デザインフリーズとは、マシンの設計に変更を加えるのを止め、製作を開始するフェーズのことだ。これにはいくつか重要な理由があるが、最も大きな理由は、全員が次のステップ進むよう強制できることだ。エンジニアに締め切りを与えなければ無限に反復を繰り返し、永久にほんのわずかずつの改善をし続けるだろう。そこでプロジェクト管理の出番となる。

「デザインフリーズしたところでデザインが悪ければ意味がない」とカイルは言った。

僕は身構えるように言った。「それは分かっているけど、スケジュールを遅らせるわけにはいかない」

「つまり、F4iに戻せるかどうか聞きたいってこと？」ボビーはアンディに尋ねた。

「そうしなきゃいけないと思う。競争力の低いマシンで戦いたいなら別だけど」彼は答えた。

ボビーは二つのエンジンを比較し始めた。「つまり600RRのメリットは、既に二つ確保していることと、あと.....少し軽いくらいか？」

「あと排気バルブが少しだけ大型化してるけど、吸気を絞ってるからおそらく問題にならないと思う」と僕は付け加えた。

「さらに、F4iのことは良く知っている」とボビーは続けた。

クリスは割って入ってこう言った。「しかも去年マットが手に入れたエンジンダイナモのデータも引き続き使える」

「まあ、正直なところ、おそらく600RRでも同じだろうね。この二つのエンジンはそっくりだし」と僕は考えていることをそのまま口に出した。「性能とチューニングに関してはほぼ同じだと思う。つまりところサスペンションとシャシーの問題に帰すべきだろうね。この辺に関してはどれくらい性能が落ちることになるんだ？」

「デИБ！」アンディは工房に響き渡る声で叫んだ。「600RR 用のフレームにするとどれくらい悪くなる？」

デИБは歩き回って静かにこう言った。「ねじり剛性は約 20%減って、重量は約 10 ポンド（4.5 キログラム）増加する」

これはスーパーデИБの最も優れた点の一つだ。彼は全てを定量化できる。

「10 ポンド！？」カイルは前のめりになり、顎を開いた。

10 ポンド増。これが 600RR の終焉だった。僕らにとって車重は、すごく、ものすごく、とてつもなく重要だった。サラ・ジェシカ・パーカーに 10 ポンド太るよう説得する方がもっと簡単だろう。部品によっては、数分の一ポンドの重量を減らすために数百ドルを費やすこともある。

僕はアンディに尋ねた。「それで新しいフレームを設計しなおすのは大丈夫？」彼は答え始めたが、僕はそれを遮って重要な修飾語を付け加えた。「比較的短期間で？」

彼はうなずいて言った。「やるよ」

マシンの設計はほとんど完了していたのだろう。嬉しいことではないが、ただこれが正しいことであることも分かっていた。これは誰のせいでもない。アンディはフレームで一生懸命作業してくれたが、避けられない結論に達してしまった。フレームとサスペンションの設計は決して簡単なことではない。どんな小さな変更でも他の 20 の事柄に影響してしまう。

アンディは 600RR を中心とした設計に何百時間も費やしていたが、今度は F4i を使ってやり直すことになった。確かに、設計の基にできるセットアップデータがあるため、多少は楽になるだろう。また、F4i は比較的飼いならすのが簡単であり、そういう意味では、僕らはよく訓練されたエンジンを持っていたと言える。

「それじゃあホンダには何て伝える？」僕は尋ねた。「つまり、F4i を使うべきということに僕は賛成するし、今ここにいる人は誰も反対しないと思う」僕

は反対意見がないか見回し、さらに続けた。「でも、彼らはスポンサーとして二つのエンジンを提供してくれたわけだから、僕らも何か負うところがあるだろう」

カイルは答えた。「彼らには、F4i を使う方がより速く、より良くなるだろうと伝えてくれ。彼らにしても速いマシンに名前が載ることを望んでるだろう」

ボビーは付け加えた。「ああ、別にヤマハのエンジン使おうってわけじゃない。ホンダの別のエンジンを使うんだ」

「よし。だけど、何て言うか、可能ならもらったエンジンを売ってもいいか聞いた方がいいかな？」と僕は尋ねた。

「それはそうだろう」とボビーは答えた。

僕は肩をすくめて、「分かった。それじゃあ聞いといてくれるか？」とボビーにお願いした。チームで何かをすると決めたら必ず誰かに責任を持たせなければいけないということは、僕が FSAE で学んだことのひとつだ。

「分かった」彼は確かに言った。

「よし、じゃあ彼らの言うことをまた伝えて欲しい。大丈夫と分かればすぐに eBay に掲載するよ」

このような大きい設計変更に対して、僕らの議論は比較的スムーズに進んだ。それはおそらく僕ら全員がこれに期待していたからだろう。僕らは 600RR を 2 年間持ち続け、マシンへ載せる設計を 2 年間先延ばしにしてきた。今回はほぼ強制のような状況だったが、それでもうまくいかなかった。それに僕らはみんな、コンピューターラボでアンディを見て、彼が抱えている問題に耳を傾けていた。僕らはおそらく 1 カ月前に決断を下すべきだっただろう。しかし、未開封の真新しい二つのエンジンを諦めるのは難しかった。

道路上の小さいスピードバンプみたいなものだ。

次にアンディを見かけたときには、彼はコンピューターラボへと戻って新しい設計を着々と進めていた。デイズはいなかった。図書館の地下墓地か K-Mart

の駐車場で短い昼寝でもしているのだろう。彼はアンディを手伝うために必ずすぐ戻ってくるだろう。予告なく、神出鬼没に。

「デイズは12月で卒業だったよね？」僕は誰に尋ねるでもなく聞いた。

「そうだよ」ボビーは言った。彼の調子は、僕が持っていたのと同じ心配を持っていたことをはっきりと伝えていた。数カ月後、スーパーデイズはいなくなってしまうと。

「万が一にも彼が大会中に周りをブラブラしてるってことはないかな？」僕は尋ねた。

返事はなかった。

「彼をイエスかノーかの答えに縛り付けることはできないだろうけどね」と僕は付け加えた。

トレイが答える。「彼は就職しない限りもうしばらくいると思うけど」

心配する点はないように思われた。デイズは素晴らしいデザイナーで、設計はほとんど終わっていた。彼が居なくても僕らはマシンを製作して戦うことはできる。僕の最大の懸念は、彼が大会のデザインイベントに参加しないことだった。レースカーと設計に対する彼の知識は、このイベントにおける大きなアドバンテージだった。

僕らの元チームキャプテンであり、表向きは大学院生だったトレイは、1年前にやっていたようなアプローチからは離れて、全く肩をすくめているような状態だった。過去3年間、彼はチームの活動に週50時間を費やす5人かそこらの一人だったが、2007年度マシンにおける彼の役割はそれほど深く関わるものではなく、またチームとして彼に何かをさせようという雰囲気もなかった。何万時間もストレスに耐え、終わりのない困難な障害に対処した後、人はリラックスするか、完全に正気を失ってしまうのかどちらかなんだらうと推測した。

これを心配しまいとする意味も込めて僕は話題を変えた。「みんな機械製図の宿題はやった？」

「俺は宿題よりもやるべきことがある」とクリスは怒ってぶっきらぼうに答えた。

僕は静かに笑って言った。「みんなやるべきことはあるんだ。ただ残念なことに、フォーミュラ活動に単位をくれないだけだ」

「この活動には単位を出すべきだ」とカイルは言った。「俺はここで授業以上のことを学んだ」

これは疑いなく真実だった。メジャーリーガーのヨギ・ベラはかつてこう言った。「理論的には理論と実践は同じだ。実践的には、異なる」。学校は理論を教えてくれる。FSAE は全ての理論がいかに間違っているかを示してくれる実践だ。

理論の範囲内でさえ、僕らは授業の何年も先を行っていた。問題の宿題は有限要素解析への入門で、コンピュータープログラム上で単純な梁を描き、荷重を加え、方程式からの推定値と結果を比較するものだった。僕らがその授業に座っていたとき、クリスをはるかに複雑な有限要素解析ソフトウェアスイートを使用して、サスペンションアセンブリ全体の応力と歪みを計算していた。

それにもかかわらず、クリスはこの授業で A を取れなかった。

宿題はかなり簡単そうに見えたので、僕はそれを翌朝の授業の前に片付けようと考えた。

「明日までにソマーのレポートをやり直さないといけない」とカイルは言った。

クリスは噛みつくように言った。「俺は絶対にやらない。完全に時間の無駄だ。俺が書いた元の報告書を受け取ればそれで十分だ」

僕らのファカルティアドバイザーのソマー博士はチームのコアメンバー全員に対して、担当の各システムについてのプレゼンを作成するよう依頼をしていた。その内容を具体的にいうと、目標は何なのか、そしてそれを達成するためにどういう計画を立てたのか、というものだった。締め切りを過ぎてもプレ

ゼンは半分も提出されず、ソマーは腹を立て始めた。僕はメンバーそれぞれから意見を聞き、みんなとても忙しいようだと言った。ソマーのレポートと、メンバーの思いやりのなさとの間にある種の橋渡しをしようとしたのだ。

ソマーがどういう考えの基、何をしようとしているのかが分かった。時間をもって何かを発表することでデザインイベントの準備になり、また他のメンバーにとっては僕らが今何を重点的にやっているのかより理解できるようになる。またその一方で、なぜ他のメンバーがこの課題に多くの時間を掛けたがらなかったかも分かった。みんな自由な時間があまりなかったのも、勝利に必要なもっと重要な物事に時間を集中させたかったのだ。数日後、全員がプレゼンを提出した。そのほとんどは、ソマーと僕から離れようとする付け焼刃の試みだった。クリスはこの課題自体が全くの無意味だと思っていたようで、自分自身の感情を隠そうとはしなかった。

「これが俺らの役に立つって言うソマーの空想に付き合っている暇はない」と彼は言った。

クリスに、ソマーの観点から物事を見てもらうためにそれなりの努力をした。

「まあ、彼は僕らが下している決定について考えさせて、何らかの洞察を……」

「自分で自分の決定について考える必要なんてない。俺が決めたんだし、その理由も知ってる。もし知りたいなら、年末になれば俺の報告書が読めるだろうさ」

そして、それは続いた。ソマー博士はプレゼンに目を通した後、資料の内容に失望したという内容のメールをボビーと僕に送ってきた。

僕はその問題に対処し続けなければならないことに対して、驚きもしなかったし、喜ぶこともなかった。

僕は不本意ながらメンバー全員に対して、それぞれのスライドについて話合っただけだと思ったものを追加してほしいと個別の電子メールを送った。

僕はアドバイザーを喜ばせ続けることと、プレゼンのことでみんなをいら立たせて怒らせないことのバランスを取ろうとしていた。数日後、ソマー博士は、スライドについて議論するため全員との面談を求めるという内容のメールを送った。理由は「見せられたものが不満」だったから、だろう。彼はボビーと僕に対し、ミーティングに同席するように頼んできた。最初の数回の議論はうまくいったが、その後ラルフが現れ、全てがだんだんと悪くなり始めた。ラルフはプレゼン無しで入ってきて、袋入りのポテトチップを食べながら、まるで興味がなさそうに振舞った。

「スライドを作る時間がありませんでした。他の授業で忙しくて」と彼は言った。

「いつになったらできるんだ？」ソマーは聞いた。彼の口調から察するに、僕が期待していたのと同じ反応を彼もまた期待していたのだと思う。

ラルフはこう答えた。「チームを辞めなきゃいけないと考えてます。今学期にやるが多すぎて、全部の締め切りに間に合うかどうか分かりません。チームの足を引っ張るようなことはしたくありません」

言い換えれば、彼は僕らが言うほどの時間が本当にかかるとは思っていなかったようだ。ソマー博士はこういう状況に適した社会通念上の形式的な言葉を述べた。「まあ、残念ではあるが、分かった」。僕らの時間を無駄にしないよう、彼がチームから去ってくれるのを待ちわびた。僕らにはやることがあった。

彼が出て行ってドアを閉めた後、僕は静かにボビーに言った。「これがラルフという名前の人間を頼って得られたものだ」。ボビーは笑うことなく肩をすくめた。彼が考えていたことが僕の考えていたことと同じということは分かっていた。驚きもしないし、動揺もしない。ラルフはたった数回のミーティングにしか来ず、走行試験に来たことは1回もなかった。正直に言って、彼がいなくてもチームがこれ以上悪くなることもないし、良くなることもない。彼には設計の比較的重要な部分を任せていたので、僕らでそれをカバーする必要はあ

ったが、ただ振り出しに戻っただけとも言える。やらなければならない作業は膨大で、十分な時間もない。

その日の遅くにクリスとのミーティングが開かれた。ミーティングの開始予定時刻の5分後、ソマー博士はコンピューターラボに入り、クリスに対してミーティングに来るよう言った。クリスは画面から目線を上げることなく、忙しいので、と言って断った。二人は言い争いを始め、僕はただ部屋から出た。クリスが来ないこと、ソマーが怒ること、そして僕らは次の行動に出ないといけなだろうことは分かっていた。ボビーと僕はソマーのオフィスへ向かい、彼が現れるのを待った。約5分後、ソマーは狼狽し挫折した様子で入ってきた。

彼はこう言った。「クリスは手に負えない。彼は私が依頼したことを何もしていない。自分の仕事をせず、コミュニケーションも取れないシステムリーダーと私は仕事をすることはできない」

彼は少し沈黙してこう付け加えた。「彼はシステムリーダーになるべきではないと思う」

ソマーは自分自身へのあてつけだと捉えていたため、僕は状況を打開しようとした。「クリスは時々あんな風になってしまうんです。でもこれは我慢するしかないんです」ソマーは話を遮ろうとしたが僕はしゃべり続けた。「いいですか、クリス抜きで活動続けるのは無理です。彼は他の誰も持っていない技術的な専門知識を持っていますし、代わりを務められる人間もいません」

ソマーはこう答えた。「彼の技術が優れていることは知っている。技術的に非常に有能であることも分かっている。だがチームプレーヤーではない」

僕らは数分間、クリスについて結論の出ない話し合いをした。ソマーが何を求めているかは明白であり、そして僕らがそれを譲ることはできなかった。クリスを解任するのは論外だと僕はきっぱり言った。

「いいえ、できません。彼抜きじゃどうにもなりません。既に設計は完了しています。しかも彼のシステムです。僕らはみんな自分の時間を全部このマシ

ンに費やしているんです。彼も同じです。チームをこれ以上引き伸ばすようなことはできません」

そしてソマーは爆弾を投下した。「努力もしないし、こちらの課題や要望に対しては無礼な対応をする、そんなチームと一緒に仕事をすることは不可能だ。申し訳ないが、私はもうこのチームのファカルティアドバイザーを続けることはできない」

——嘘だろ。嘘だと言ってくれ。——ボビーと僕は一瞬あぜんとして固まった。

「月曜日に僕とボビーだけがあなたと会うようにして、それで僕らがチームの管理をするのはどうでしょう。あなたは僕らと話すことができますし、僕らはチームのことについて話せます」と僕は提案した。

ボビーが付け加える。「そうです、軍隊的な指揮系統を作るんです」

ソマーは首を横に振った。

ソマーとクリスの両方がチームに残れるような方向修正を模索しながらさらにいくつか提案をしたが、勝ち目がないことは明らかだった。ボビーはミーティング中ほとんど何も言わなかった。ソマーは去っていき、僕らにはどうすることもできなかった。ボビーと僕は他の6人と一緒に3年間の大半をチーム作りに費やした。そして最高の年となった今、僕らのアドバイザー、そして僕らと大学とのつながりが失われようとしていた。ミーティングが終わると、僕らは直接バーへと向かった。僕らは2、3日このことについて議論しないことに決め、ソマーに自身の決定について発表させた。

導火線に火をつけた張本人のクリスはその日の夜遅くに尋ねてきた。「で、判決は何だって？」

「数日中に話す」と僕は答えた。

「話の要点は何？」彼は尋ねた。

「数日中に話す」とボビーが答えた。

僕は生きる上での絶対的なルールというものを、決して多くはないが持っている。途中で何かを投げ出したりしないというのはそのうちの一つで、特に他人が自分を頼っているようなときはもっての外だ。その日が来る前まで、ソマー博士のことをすごく尊敬していた。僕は彼のために働き、彼の授業もいくつか履修した。そして、彼が要求するプレゼンや課題はいつでも喜んで完了させた。しかし、他の教授以上に抱いていた彼への敬意は急速に失われていった。最高のチームには教員の非常に強力な関わりがあり、そして今の僕らには全く関わりがない。彼が勝利のチャンスを打ち碎いたのかどうかは分からない。ただ遠ざかったのは確かだ。

工業材料の特性は極限状態でどんな反応を示すかで決まる。最大引張強度、硬度、融点など。人の特徴も限界に追い込まれたときの反応で決まると思う。FSAE のチームでは、いろんな人の本当の姿を見る機会がたくさんある。多くの時間をストレス、疲れ、金欠で過ごすことになるためだ。ボビーは怒りっぽく、リッキーはよそよそしく、僕はけちくさく、クリスはバカ野郎になった。でも、僕らは途中で辞めるような人間ではなかった。

予定を守る

「負けたときに辞めたいと思う人などいないし、

勝ったときに辞めたいと思う人もいない」

——リチャード・ペティ

2週間が経ったが、ファカルティアドバイザーは不在のままだった。ミッチ・バリスは僕らのアドバイザーの一人だったが、非常勤講師であり、パートタイマーの教員だった。彼はいつでも僕らを助けてくれたが、フルタイムの教授ではなかったため学校や大会の要件を満たしていなかった。航空宇宙機械工学部長はソマー博士の辞任を正式に承認していなかったが、これはもう既に終わったことだ。二人の間でちょっとした言い争いが起きていて、僕のところにも何度も CC でメールが届いていた。

学部長は、チームを辞めるというソマーの「独断的な」判断に不満であり、一方のソマーは、自分のコンピューターラボの利用を許可する形で関与が続いていると主張した。

ファカルティアドバイザーの不在に起因する問題が明らかになり始めた。僕らにはオフィスが必要だったが、コンピューターラボはあと1カ月ほどで使えなくなる心配があった。また、他のリソースを確保するために、学部に対してある程度の影響力を持つアドバイザーも必要だった。

2004 年、ある教授が研究のためにスペースを必要としたため、僕らは工房から追い出されたことがある。活動を支援してくれる教授がいなければ誰かの

親のガレージでマシンを作ることになるかもしれない。もし他の教授が犬の糞の構造的完全性をテストするためのスペースが必要だと言えば、僕らはまた工房を失う可能性があるのだ。

プロジェクトの進捗、もしくは少なくとも僕らの生存を保証する教職員がいなければチームは長くは続かないだろう。資金調達、管理、設計、製作、テストに加えて、この問題に対処しなければならなかったことに動揺させられた。僕はマシンにもっと集中し、そしてボビーには今後のチームの課題について対処してもらいたかったのだが、現在のマシンにも将来のチームにも新しいアドバイザーが必要だということは分かっていた。クリスはソマーがいなくなったことを喜んでチームに残ったが、自分たちの置かれた状況を明らかに心配していた。

僕らのミーティングはいつものように続けられ、僕はマシンの設計に焦点を当てようとした。そしておそらくもっと重要なことに、一体どうやって期限内にマシンを製作し、テストを行うかを考えなければならなかった。クリスは、辞めさせられないほど一生懸命に働いているという僕の考えを証明してくれた。しかし、それでも彼には活動に費やせる時間以上の仕事があった。

「クリス、ホイールセンターの加工はいつやるんだ？」僕は、部屋を歩き回って、スケジュールを更新するために尋ねた。

「そんな時間はない」彼は反抗的に返す。

「お前.....、コーディングする時間がないのか、それともただマシニングの子守が必要なのかどっちだ？」僕は外交的になろうと答えた。

「コーディングは完了している。加工している間、一晩中 CNC の前に座る時間が無いってだけだ」

「ミーティングが終わった後に一緒に行って、どれか一つを加工し始めればあとは僕がやってくよ」

クリスは肩をすくめた。僕はこれを YES として受け取り、その日の日付を

ホイールの完成日としてスプレッドシートに記入した。元の日付より2日遅れだが、十分だ。

CNC加工は、うまくやれば恐ろしいほど退屈な作業だった。プログラミングは難しい工程だが、クリスは優秀なプログラマーだった。実際の機械加工には時間がかかった。マシンの前に座って、マシンが金属を加工するのを見て、意図しないことが起きないかを確認する。もちろんクランプを間違った場所に置くと、ツールはクランプに叩きつけられ、千の鉄片として飛散する。機械は警報を発し、警告ランプが灯り、「マシンをぶっ壊したヤツは一体誰だ」モードへ移行する。とてもドキドキする。そしてその代償は高い。そんなことが起きるなんて考えたくもない。

「インテークの設計は完了してる？」僕は尋ねた。

クリスは静かに答える。「いや、フレームの後ろ側を超えてインテークを伸ばせるかどうか知る必要がある」

「分かった」彼が話し終わるのを待って言った。

「言い換えれば、君はルールを明確化するために問い合わせないといけない」と彼は答えた。

「問い合わせないといけない理由が理解できない。ルールには、インテークはロール構造内に配置する必要があると書かれている。もしそれに——」

カイルが遮った。「だが、フレームの後ろ側がロール構造内にあたるかどうかは不明だ」

「ルールではロール平面はメインフープの上端とリヤタイヤを結ぶ面で定義されている。リヤタイヤより前側に存在している限り、合法でない理由が分からない」僕は少し自信をなくして答えた。

クリスは言う。「ルールの解釈を明確化するのはお前の仕事だ」

「いや、設計がルールに適合していないと思うなら自分で問い合わせてよ。当たり前だと思うルールを全て明確化するつもりはない」

ボビーは、「これは明確じゃない」と付け加えた。

他人の設計についてルール委員会へ問い合わせるのが僕の仕事なのか少し戸惑った。僕にとって効率的でも合理的でもない。しかし僕はチームのほぼ半分から攻撃されているように感じたので、受けに回って話題を変えた。

「僕は何のメリットもないと思う問い合わせを送るつもりはない。もし送りたいなら、どうぞご自由に」 フィルの方を向いて続ける。「フィル、燃料システムはどんな感じ？」

「燃料タンクのサイズを確定するためにシートの位置が決まるのを待てるよ」と彼は答えた。

カイルが割り込む。「シートの位置は決まってる。1週間前に終わったよ」

「本当に？」 フィルが尋ねた。

「ああ」僕は言った。「僕らはすぐにでも CAD モデルが必要だ。電装系の部品は燃料タンクの位置に依存する」

「分かった。取り掛かるよ」

「今週中？」僕は尋ねた。

「多分来週までかかる。たくさんやることが——」

僕は言葉を遮る。「本当に今週必要なんだ。締め切りは1週間前だった」

「やってみる」と彼は言った。

やってみる。嫌な言葉だ。FSAE においては「やらない」と同義であり、まだ起こっていない失敗に対する言い訳だ。

「タンクをモデリングして、干渉を回避する作業に手を付けてもいいか？」僕は尋ねた。

彼は肩をすくめた。これは締め切りと、チームメイトの個人的なスケジュールと、それぞれの役割に対する感情のバランスを取るのにいいタイミングだった。しかし、僕は締め切りに遅れるのが嫌だった。

「とにかく、コストレポートは完成させなければならないし、コストレポー

トに『やってみる』なんて言葉はない。絶対に完成させなければならないし、少なくとも1週間前には、完成させなければならない」僕はきっぱりと言った。

「分かったよ。2週間前倒しで完成させよう」フィルはいつもの楽観的な見方で言った。

「じゃあ、燃料タンクのモデルが完成したら送るよ。それで取り掛かれる。製作を待つ理由はない。製作について言えば、新入生も全員……」この時点ではまだほんの一握りが残っていたが、僕らはすぐに彼らをふるい落とした。「…マシンで作業をする必要がある」。僕は見慣れた顔の一つを見て言った。「君はクリスと一緒に作業をしていたね。実際にはどういう作業をしている？」

「ええと、エンジン関係のテストをしたり——」

クリスが遮る。「ウェズは一生懸命やっている。彼にはやるべきことがある」頭に思い浮かぶ。——彼がウェズか。覚えておこう。——

ウェズが何に取り組んでいるのか知りたかったが、クリスは自らの体制について防衛的だった。何が起きているのか僕に知らせないという形での防衛。

僕は肩をすくめて続けた。「……まあいい。ブレット、今は何に取り組んでいる？」

「うーん、ボビーがフレームの部品を作ってるからそれを手伝ってます」

ブレットは残った新入生の内の一人だ。彼は静かな男だったが、自信を持って話をした。僕は彼をよく見かけたが、あまり話をしたことはなかった。彼は多くの時間をボビーと一緒にフレームの製作に費やしていた。数日間剃っていない髭、油まみれのシャツ、これは彼が既にかなり本格的なチームメンバーになっていたことを意味していた。彼には彼女がいた。いいことだ。FSAEでは、既存の関係を維持することは難しい。しかし、新しく関係を始めることは不可能だ。

「いいね」と僕は言った。「リッキーは何をしている？」

「PR スタッフだ」彼は答えた。

「何の PR？」僕は尋ねた。

「資金集めだ。ご存知の通り、金さえあればあらゆる費用を支払うことができるからな」

僕は調達管理ではなく製作側の人間だったので、マシンを作って大会に参加するのに必要な 4 万ドルの調達を忘れていたことは許されるだろう。

「ローレンと俺で、新聞か、可能であればローカルテレビのニュースで放送してもらえるようにいろいろやってる。かなり期待できそうだぞ」

リッキーは PR チームにローレンを採用した。ローレンは、航空宇宙機械工学部のオフィスで働いているジャーナリズム専攻の学生だ。僕らはいつもお金の支払いや荷物の受け取りでそこに行っていたので、彼女は僕らのことをよく知っていた。

「素晴らしい」僕は言った。「カイル、ブレーキはどう進める？」

「え？」彼はそう言うと言って答えた。「全部パソコンでモデル化できている。クリスと俺でピボットの加工も終わっているし、あと 140 ドルくらいの小さいベアリングも買ってある」

「設計は完了？」僕は尋ねた。

「完了している。いいと呼べるね」彼は自信を持って答えた。

僕らのチームにとって「いいと呼べる」は、「信じてくれ」と言いたいときに使う方法だ。これはなかなかうまく機能していた。いいものだと確信せずにこれはいいものと呼ぶ人間は誰もいない。そのためこの言葉を信頼するだけで時間を大幅に節約できる。僕らにはルールがあった。あるものをいいと判断できるのは上級生だけだったし、非常に重要なことに関しては、最低でも二人がいいと判断しないと駄目だった。

「オーケー。じゃあ……」僕はスプレッドシートのスケジュールを見た。「ベアリングは予定より 1 週間早く購入し、設計は予定通りに完了したと。誰かが金星を獲得したみたいだね」と僕は妙に張り切って言った。

僕は部屋の隅にいるデイブに気付いた。デイブには公式の責任や締め切りはなかったが、彼が何個か作業に取り組んでいることは知っていたので、この機会を利用して彼から締め切りを知ることができるか確認した。

「デイブ、今年はステアリングラックに取り組める？」

彼は静かに答える。「設計は去年と同じだ。あとは製作するだけだ」

「オーケー」僕は静かに答えて、「製作までやる予定？」

彼は肩をすくめた。

「分かった。あと僕の方は去年と同じようにクランプの作業に取り組んでいく。クリス、延長ホースの破壊試験はあと数週間でできる？」

彼は肩をすくめた。みんなが冷淡な状態でチームを軌道に乗せるのは難しく、いらいらしてきた。デイブとクリスの製作日程を突き止めるのは特に難しかった。二人とも僕がやろうとしていることに全く敬意を示さず、日程を教えようとしないので、僕は彼らの完成予定日を記入するに留まった。この行動が彼らをもっと怒らせたと思う。

「アンディ……」僕は他のチームメンバーに話を続け、金星をどこで与えるか、そして何か忘れていないかを確認しようとした。

ミーティングの終わりにクリスを見つけると、僕らはホイールセンターを加工するため階下へ降りた。CNC マシニングセンタは部室のある工学部棟の地下にあった。そこは半地下になっており、窓と機械がランダムに配置された比較的小さな部屋だった。壁は高校のトイレや東ベルリンの悲しい映画でしか見られないような、灰色がかった緑で塗られたコンクリートブロックだった。

クリスはホイールセンターの表裏を適切な位置に合わせるためのジグも作ってくれていたのも、一連の加工はそこらの英文学専攻の学生でもできるような工程になっていた。何人かで CNC マシンを動かせるように、クリスはボビーに CNC マシンの使い方について簡単なレッスンをしてくれた。セットアップして加工を始めた後、二人は立ち去り、そして僕はそこに座って加工が終わ

るのを待った。大体 90 分おきに、ホイールをひっくり返して、新しいアルミブロックを追加して、何回かボタンを押して、待った。

シニアチームのメンバー間に亀裂が生じ始めて、二つのチームが形成されているようだった。一方はカイルとリッキー、もう一方はクリスとボビー。他のメンバーのほとんどはクリスとボビーと一緒に過ごしたが、おそらくそれは来年あたりグループの中心になると思ったからだろう。トレイは派閥の所属を避けて、グループからグループにシームレスに移動できるように見えた。デιβとフィルはそれぞれ独自のことをしていて、そして僕はみんなを怒らせていただけだと思う。結束力のあるチームの方が分断されたチームより優れていることが多いのだが、僕らは作業をこなしていたので、僕ら自身の組織方法に問題はないのだと考えた。マシンの組み立ては小さなステップの積み重ねだ。そして全員がそれぞれに割り当てられた部品に取り組んでいた。加工のステップが終わり、ツールパスはスケジュールどおりに完了した。

工作機械を待っている間に、インターネットでレースの動画を探した。僕は F1 ドライバーのトレーニングを紹介している動画を見つけた。その中で彼らは大きなボールの上でバランスを取り、周りが投げるテニスボールをキャッチしていた。運転はバランス、反応時間、手と目の協調が全てなので、これは賢い方法に思えた。似たようなものがないか部室を見て回った。テニスボールはあったが大きなボールはなかったので、即席で大きなアルミニウム片の上でバランスを取ることにした。それから数時間、僕はカラテキッドのように片足でアルミの棒の上に立ち、壁にテニスボールを投げてはキャッチした。

最後のホイールの加工が終わった後、僕は機械を掃除して道具を片付け始めた。作業をほぼ終えたころ、ドアが開いて工房長のビリーが入ってきた。

「一晩中ここにいたのか？」彼は尋ねた。

僕は壁の時計を見た。「マジかよ。もう 8 時？」

「君らフォーミュラの連中は彼女か何か作って、レースカーに時間を費やす

のをやめた方がいいぞ」

「それのどこが面白いの？」と僕は微笑みながら言った。「また会いましょう、さよなら」

「家に帰って寝るのか？」

「いいえ、1時間後に授業があります。ちょっと昼寝してくるだけ」

僕は2階に上がってコンピューターラボに行き、自分のコートを机に丸めると、頭をつけて眠りについた。

20分後、コンピューターラボ内の誰かの叫びによって、驚きと共にFSAEの容赦ない世界に引き戻された。

「あいつらトレーラーをレッカー移動させようとしてる。俺より先にバイクで向かえるか？」

僕はまばたきして目を細め、ボビーが電話を頭につけて僕の方に向かって叫んでいるのを見た。

「うう.....何だって？」僕は尋ねた。

「あいつらトレーラーを持っていこうとしてる！」彼は繰り返した。

「北の工房にある？」

「そうだ」

「あいつらがトレーラーを持って.....？ マジかよ、クソったれ」

僕はコートをつかむと、北の工房へ向かった。向かう途中、眠りから覚醒するのに加え、この路上駐車だらけの工業団地でどこかのアホがトレーラーをけん引していったという事実に腹を立てるのに十分な時間があった。フィルが工房へ着いたとき、ちょうど彼に追いついた。レッカー車は今まさに出発するところで、駐車監視員は僕とフィルに向かって叫んだ。

「レッカーから離れろ。さもなくば逮捕するぞ」駐車管理局のフォード・エスコートの窓から彼は高圧的に言い放った。彼は車から降り、僕らの方へ向かってくる。彼は白いシャツに、市のロゴマークがプリントされた安っぽい帽子

をかぶっていた。高校を卒業してから 40 歳を過ぎるまで、誰からも嫌われる低賃金の公務員として人生を過ごそうと決心した人間がどんなヤツなんだろうと思いを巡らせた。こういう連中を尊敬したことは一度もなかった。大抵はただ軽蔑するだけで従順ではあったが、この日はそうではなかった。

彼は続ける。「このトレーラーは駐車——」

僕は話を遮った。「ここはあらゆるものから 5 マイルは離れた工業団地だ。ここらにはいつもトラックが駐車されているが……」彼は僕の話の遮ろうと何か話し始めたが僕は続けた。「……そのどれも何の邪魔にもなっていないだろう！」

彼はより冷静に答えた。「車を 3 日以上路上に駐車することは違法であり、誰かが苦情を申し立てたので、我々は——」

「だったら、あそこの車について文句を言いたいね」僕は通りに駐車された車を指さして言った。「あれと、あそこの二つだ。あいつら 1 週間はいただろ！」

「街に苦情を申し立てたいなら……」と彼が話し続けていると、脳内の良識が作動し、僕は立ち去った。トレーラーは持っていかれ、僕らにはどうしようもなかった。フィルが情報を手に入れてくれたので、彼はこの件を後で処理することができた。

2 日間という時間と 200 ドルの支払いの後、トレーラーは工房の前へと戻された。そして 3 日間の期限が来る前に新しい駐車場を探すことになった。押収されたトレーラーを取り返すのはかなり厄介だった。引き取るためには所有権を証明する必要があったが、所有権は大学が保有していて、それを示す書類は何一つ持っていなかった。フィルは何らかの取引をしたようだが、それが何かは知らないし、気にもしなかった。フィルはチームで最高のエンジニアというわけではなかったが、彼には得意なことがあったし、そういうことを彼に任せるのが僕は好きだった。時々、責任を他人に委任することはいいことだ。これは睡眠時間を 1 日に 4 時間も与えてくれることを意味した。

レースのビジネス

「次にあなたがするであろう三つの質問に答えよう。

130、30 万、そしてノーだ」——ボブ・ウッズ博士

(テキサス大学アーリントン校 FSAE チームファカルティアドバイザー)

レースカーエンジニアの義務はただ一つ。レースで勝利することだ。

宣伝やリクルート活動はレースカーエンジニアの義務ではない。ルールを守ることですら義務ではない。不正して勝利することも究極的には目的の範囲内にある。しかし、不正してバレルのは駄目だ。バレれば勝利の可能性はなくなってしまう。僕らは不正して勝利することを望んだが、エンジニア的な考えを捨て、リスクアセスメント的なことを考えると、そのリスクに見合う価値はなかった。

残念ながらプロのレーシングチームとは異なり、僕らの仕事は一つに留まらなかった。つまり僕らは単なるレースカーエンジニアというわけではなかった。僕らは、マネージャー、ライター、アーティスト、募金活動者、広報担当者、リクルーターなど、レースカーエンジニアになるためのリソースを確保するために必要なことも全て行った。これはむしろ中小企業の経営に近い。

Sooner Racing Team が発足してからずっと、僕らの知名度は他の活動に比べると低いものだった。ほとんどの場合、オクラホマ大でレースカーと言えばソーラーカーを連想するだろう。なぜかソーラーカーの知名度は高かったが、僕らの方はほぼ全く知られていなかった。この差を縮めるため、オクラホマ大

で最も魅力的な催しに展示しようと考えた。つまり、フットボールの試合だ。僕らはフットボールの試合がある日に、工学部棟（フェルガーホール）の前にマシンを停めた。そして、立ち寄って、全く同じ三つの質問を尋ね、Tシャツを買ってくれる人々を待った。

最初の質問はいつも同じだ。「このマシンはどれくらいのスピードが出るのか」

僕らはこの質問が嫌いだった。人々はトップスピードこそがレースカーの能力を測るいい指標だと考えているので、どれくらいのスピードが出るのかを聞きたがるのだ。もしこのレースカーが、ボンネビルソルトフラッツで地上最速の記録を更新するために作られているのなら最高速度は重要だ。そうでなければ取るに足らないことだ。実際のところ、僕らは変速ギヤを最大限に活用するため、意図的に最高速度を制限していた。この質問に対する答えは、時速 100 マイルだった。事実、僕らはこのマシンがどれくらいの速度に到達するのか気にすることはなかった。なぜならトップスピードへと近づく前に、コーナーへ進入するため減速しなければならなかったためだ。

人々に聞かれる質問の 2 番目と 3 番目は通常同じだったが、順序はそうではなかった。ある人はどれくらいの費用がかかったかと、実際に運転できるかどうかを知りたがった。ある人は実際に運転できるかどうかと、どれくらいの費用がかかったかを知りたがった。答えは、「ノー」と「16,000 ドル」、もしくは「16,000 ドル」と「ノー」。また時々「たくさん」と「あり得ない」だった。ごく少数の人はどんなエンジンを使っているかを知りたがり、またごく少数の酔っぱらったレッドネックたちは「うおーーー行けーーーNASCAR イェーーーー！」とだけ叫んでいった。

16,000 ドルという数字は厳密には正確ではない。総得点に占める割合は小さいが、大会では製造コストの安さを競うイベントがある。最も安いマシンは 30 ポイント、最も高いマシンは何も得られない。僕らは、ほとんどのチームと同

様に、大体 16,000 ドル辺りに収まっていた。各チームは毎年、各部品の細かいコストや、少なくとも年間数百個を生産した場合のコストを詳細に記したコストレポートを提出しなければならなかった。ガレージの中でハンマーと錆びたドライバーを使って 1 個だけを作った部品も、200 万ドルもする CNC フライスを使って 300 個生産したかのように賢くコストを計上することができた。これは議論の余地なく、公正かつ合法的なものだった。なぜなら、実際に 200 万ドルの CNC フライスを持っているチームがいくつもあったからだ。いずれにせよ、実際にこれが問題になることはなかった。コストの得点は全体のわずか 3% しかなく、しかもほとんどの上位チームはほぼ似たようなコストであり、そしてどのチームもコストイベントの目的におけるグレーゾーンで入り交じっていた。もし問題になるチームがいれば、それはただの努力不足だろう。ルールのグレーゾーンを利用することは自動車レースでは定石だ。コストではグレーゾーンが大量にあったため、簡単にグレーゾーンを利用することができた。また、もしコスト審査員がチームの嘘を暴いたとしても、疑惑の項目の費用に 150% を追加するだけだ。そのためリスクアセスメントを考慮したとしても、通常僕らは少し背伸びして、150% 少々ペナルティを受け入れた。

16,000 ドルという数字は正確とは言えなかった。マシンの設計、テスト、改良に費やした時間をまったく考慮していないためだ。もし 15 人の大学インターンのグループにこれらのマシン 1 台を設計して製造するよう依頼した場合、見ることになるのは約 30 万ドルという数字だろう。もちろん、これには多くの説明が必要になる。だから、ただ 16,000 ドルとだけ言って話を切り上げるのだった。ほとんどの人は説明を望まず、ただ大きな数字だけを欲していた。

「どのくらい速いか」という質問も同じだ。彼らは尋ね、僕らが答え、そして彼らは失望して去っていく。テキサス大学アーリントン校は、「いくらかかるのか」の質問に対して、30 万ドルという数字で回答した。印象的な数字を一つ挙げるなら同じやり方をすべきだっただろう。

みんながこのマシンのあまり印象的でないスペックについて尋ねたのは本当に悲しいことだ。このマシンがコーナーで 3G に達する可能性があることや、実際に 30 万ドルするほとんどの車よりも早く時速 60 マイルへ加速できることなど誰も知りたくなかったのだ。これはレースカーだが、彼らの目に映っていたのは改造されたゴーカーだった。しかし彼らはレースカーエンジニアではない。フットボールファンだ。酔っぱらいのフットボールファン。

当時オクラホマ州にはメジャーなスポーツチームはなく、オクラホマ大には素晴らしいフットボールの催しがあった。つまり、そういうことだ。毎年少なくとも 4 カ月の間、オクラホマ大におけるフットボールはハリウッドにおける映画のような存在となる。試合のある日にはその雰囲気を見捨てることはできない。半マイル先にいる酔っぱらいが「Boomer!」と叫ぶと、その声を聞いた全員が「Sooner!」と叫び返し、さらにそれを 2 回繰り返す。Boomer 野郎が酔っぱらってカウントを忘れていたらもっとだ。これはオクラホマ大ファンによる叫びだった。オクラホマ州立大にも「オレンジパワー」という怪しいエナジードリンクのようなチャントがあった。テキサス大にも「テキサス」から始まるものがあったが、彼らがそれを叫び始めるとオクラホマ大のファンは一斉に「Sucks!」と叫びだし、しかも僕はいつもオクラホマ大のファンに囲まれていたので、そのフレーズを最後まで聞いたことはなかった。

いずれにせよ僕らはオクラホマ大のチームだったので、試合のある土曜日はオクラホマ大の一員として誇りに満ちていて、広報活動をするにはいい機会だった。

リッキーは T シャツ売り場の机の横に立って、時々シャツを売っていた。ボビー、カイル、そして僕は椅子に座って人々が質問するのを待っていた。

「やあ、マット」

僕は 1 年生のときからの古い友人を見るために振り返った。

「おお、どうした？」尋ねると同時に、彼の名前を思い出そうとした。――

ジョン。ジョンか？ そうだ、ジョン、そんな名前だった。――

1年生のときに遊んでいたグループはパーティーの常連だった。当時でさえ彼らと遊ぶのは週に数回程度で、学校に集中して成績を上げようと努力していた。彼らのほとんどは最初の1年間で酔っぱらって過ごし、学校はおろか何にも集中できていなかった。僕は彼らが1年間みっちりパーティーをするエネルギーを持っていることに感銘を受けた。80回連続でパーティーした後のパーティーハウスはその魅力を失うようにいつも感じていた。他に何もやることなければいい場所だったが、フォーミュラチームに所属している場合、まず行く時間はないだろう。フォーミュラ以前に付き合っていた友人の多くは、「えっと名前なんだっけ」状態になっていた。これはトレードオフの一部だ。

彼は答えた。「試合を観に来ただけだよ。そっちはどうだ？」

「見ての通りさ」と言ってマシンを指さす。「これにほとんどの時間を費やしているんだ」

「だろうな。しばらくお前を見かけなかったし。たまには家にも来てくれよ」

「そうだね」と僕は興味を持っているかのように言った。「まだボイドの外れに住んでる？」

「いや、今はサルキーズの近く。ちょうど東にあるアパートだ。226番。曲がった奥にある」

マーチングバンドは試合の直前、いつも僕らがいる前の通りを行進していく。これは、スタジアムに向かえというみんなへの合図だった。ドラム奏者が応援歌の「Boomer Sooner」の出だしを叩き始め、そこへホルンがちょうど演奏に加わったところだった。うるさすぎて話ができなくなったので、会話を終わらせるきっかけにした。

「ああ、そのうち行くようにするよ」。実際には行くことはないだろうと思っていたが、僕は選択の自由を保留しておくのが好きだった。

「がんばれよ」彼はそう言うと立ち去って行った。

チームでは、僕らはいつもどのようにして「大学での一般的な経験」を逃しているのか話し合っていた。僕らはずっとレースカーの上で作業していたため、何かをする時間はなかった……、他のみんながやっているような何か。僕は思い切ってパーティーに何度か出かけて行ったことがある。そこは、みんな同じようなスパイキーヘアで、同じように襟を立てている男が何十人という空間だった。おかげで制服のウェイターと間違える心配はなかった。彼らはみんな、何十人ものぼんやりした、半分酔っぱらった女の子たちと雑談をしていて、誰も面白いことを言う人はいなかった。

「じゃあ、君は……ここに良く来るの？」

「アハハ、うん。ここに住んでるの」

バカか。空っぽの連中、安いビール、ゲロで覆われた歩道でできた「大学での経験」と、レースカー。どちらを取るかと言われれば答えは明白だった。僕はこの説明をするたびに、ただあぜんとしてこちらを見つめられるのがショックだった。僕は飛び上がってこう叫びたかった。「レースカーだぞ！ レースカー！ この世で一番カッコいいものだ！」しかし一部の人にとってはただの巨大なトースターに過ぎなかったようだ。

マシンの方を見ると、もう一人別の見慣れた顔が、目を細めて注意深くエンジンを見つめているのに気付いた。

ウェズだ。残った数少ない新入生の一人だ。

「やあウェズ。調子はどうだ？」彼に向かって歩きながら尋ねた。「試合を観に来たのか？」

「いや、ただマシンを見ようと思って来ました」彼はそう言うとマシンを見続けていた。

正しい答えだ、と僕は思った。

「マフラーには何かするんでしょうか。バッフルを付けるとかパッキングするとか」

「いくつかアイデアを試してるよ。他のチームの間ではパッキング付きの穴あきチューブが人気で、うまく機能しているみたいだ。ペンシルベニア州立大は、パッキングの表面積を増やすために三角形のインナーセクションを使ったと言っていたな」

「ガラス繊維？」

「ええと、僕らはバイクショップのマフラーパッキングを使ってる。確かガラス繊維のはずだ。燃えたり溶けたりしない高密度の繊維であればおそらく同じように機能すると思う。自分のダッジ・ダート用に作ったマフラーにはカーボンファイバーを入れた。というのも他の用途には使えないくらい汚れた束がそこらじゅうにあったからね。地獄みたいにうるさいから、あまりよくないアイデアだったみたいだ」

ウェズはマシンから見上げて尋ねる。「ダート？ エンジンのサイズは？」

「6500cc、巨大な塊だ。自分のプロジェクトの車だ」

「俺はプリムスだと思うけどな」会話に参加しようとボビーが後ろから近づいてきた。

「いやそれは.....、誰もプリムス・バリエーションなんて知らないだろ？ だからダッジ・ダートって呼んでるんだ。同じことさ。正直なところ、部品の半分はダートから持ってきた。ブレーキとか、リヤエンドとか。エンジンはダッジ・マグナムから持ってきた。フューエルインジェクターは三菱・エクリプスで、スロットルケーブルはホンダのバイクから持ってきたよ」

「だからこれをダートって呼んでいるわけか」とボビーは言った。

「ああ。底無しの金食い虫とも呼んでる。まだホイールとタイヤ、トランスミッションの分解修理が必要だ。こいつは僕の貧弱な資金管理能力の化身だね」

マーチングバンドがやって来ると群衆のほとんどを連れて行った。数人のフットボールファンだけが残って、荷台の上のテレビを囲んでいた。そろそろ片付けるタイミングだと僕らは判断した。僕らはマシンを工学部棟の地下に押し

込み、施錠した。ボビーは、120,000 人のフットボールファンが引き上げた翌日、僕らのマシンを工房に引き戻した。

「マット、俺の親の家で試合を観ないか？」とカイルが尋ねた。

「いや、宿題をやるかと思ってる」と僕は少し嘘を含んだ答えを返した。少しは宿題を片付けられるだろうが、大部分は試合を観て終わってしまうだろう。「僕は昼食に行きたい。まあ、みんなが行きたいならだけど」僕はウェズとボビーを指さして言った。

「どこに行く？」ボビーが尋ねた。

「さあね。ルイーズは？ テレビがある場所なら試合は観れるだろう」

「ルイーズか。いいね」ボビーが言った。

「君も来る？」ウェズに尋ねる。

「一緒に行きます、でも食べ物は買えません。お金もないですし、それにフードクレジットも使わなきゃいけない」

大学は寮の賃貸契約に食事パッケージングプランを付帯させる方針があり、加えて新入生たちは寮に住まなければならなかった。これは学校側が生徒を子守する方法の一つだった。もし大学に入学して食費をどうやって管理するのかまだ理解していないのなら、ここで学ぶべきなのだと解釈した。学期の終わりになると、街角に立って「飢えた学生に食べ物を」と掲げる学生を見るかもしれない。しかしもちろん、その経験から学んだ学生は同じ過ちをすぐに繰り返すことはないだろう。

僕らはレストランに向かった。ウェイトレスは、テーブルの片付けが終わるまで前で待っているように、と言った。試合の観客のほとんどは既に店を後にして、テーブルは空のビール容器と食べかけのピザで覆われていた。

「で、出身はどこ？」ウェズに尋ねる。

「フォートワースです。テキサスの」

うなずいてさらに尋ねる。「なんでオクラホマに？」

「オクラホマ大はいい大学ですし、入学も簡単です。あと、学費もかなり安い」

「ああ、ここだとテキサスから来る人をよく見かけるよ」僕は少し考えてこう言った。「おそらくここで知り合った人の半分はテキサスから来たんだろう」

ブロンドの陽気なウェイトレスは、メニューを三つ手に取ると、「みんな付いてきて！」と笑顔で言った。オクラホマ大のフットボールが高額のチップにつながることはよく知られている。彼女の魅力と胸の谷間ならひと財産稼げるだろう。とても幸せそうなのも不思議ではない。

「テキサス A&M 大に行きたかったのですが、高校のクラスで上位 2%に入っていないければ挑戦するだけ無駄です」

「オクラホマ大に入るのは間違いなく難しいことじゃない」メニューに目を下ろしながら僕は言った。

僕らは壁掛けのテレビが見えるように、テーブルの一方だけに座った。

「君はバイトとかしてる？ もしくは今学期すごく忙しいとか」もっと直接的に、「何時間ぐらい作業できるんだ？」と聞いた方がよかったのかもしれないが、僕はこう尋ねた。

「バイトはしてません。授業はとても簡単に思えますが、週に 16 コマ取っています」

「いいね。早めに単位を取って、最後の年をトラブルなく乗り切るのがおすすめだ。あと、もし外国語を学ぶんだったらチェロキー語が絶対おすすめだ」

「チェロキー？ ネイティブアメリカンの？」彼は尋ねた。

僕は笑ってうなずいた。「リッキーとカイルも取ってる。ほとんど幼稚園だよ。今まで受けた中で一番簡単な授業だ。ボビーなんて GPA を上げるためだけに次の学期受講するからね」

「それで何か喋れるんですか？」彼は尋ねた。

「あー、いや。喋れるのは 15 個くらいかな。テストが終わった瞬間全部忘

れたよ。覚えてるのは Wodige が茶色、Saloli がリスってことくらいかな。次の学期はチェロキー語を 2 コマ取るから、もっと大変になるだろうね。1 年生のときみたいに。本当は、来学期は卒業するのに 11 コマしか要らないんだけど、フルタイムで学費ローンを組むのに 12 コマ必要だからテニスを取ってる。1 コマ分の合格/不合格クラスだ。楽しい学期になるだろうね」

ウェズは再びマシンの話題に戻した。

「それで、こういう車で一番重要な部品って何ですか？ 僕はサスペンションだと推測しますが」

ボビーが答える。「タイヤだ。あとタイヤを最大限に活用するサスペンション」

僕は付け加えた。「全ての性能はタイヤを通して示されなければならない。タイヤは唯一操作できる部品だからね。あと、ドライバーとエアロは FSAE で過小評価されている要素だと思う。どれくらいかと言われると難しい。エアロに関してはあまりデータがないし、他のチームのドライバーが似たようなマシンに乗ったときにどの程度運転できるのか分からないからドライバーの定量化も難しい」

ウェズが尋ねる。「大会期間は結構ハードなんですか？ それともほとんどのチームはそのときまでにちゃんと仕上げて来るんですか？」

ボビーと僕は笑った。

Formula SAE の経験者に大会のことを尋ねるのは、ベトナム帰還兵に戦争のことを尋ねるようなものだ。僕らは窓越しに千ヤードの彼方をただ見つめた。「いろんな出来事があった……。いろんなものを見てきたよ」そして、僕らは一般人では理解できないような言葉でその出来事を説明していく。

「僕らが南から向かうと、車検場まで 4 キロのところで VC（バージニア大学チェサピーク校）が四方から現れた。僕らは取り囲まれて、そこら中からエ

エンジンのバックファイヤの音が聞こえてきた。ブラジル人は死んだマシンをベースキャンプに引きずっていた。ブレーキテスト中の過度なモーメントでアップライトが曲がって、前輪はなくなっていた。『アンチロールバーはどこだ！』カイルが無線機に叫んでた。『リヤのアンチロールバーがないと最適なロール剛性配分ができないだろ！』ってね」

僕は昼食を食べ、マシンやレース、そして学校のことについて話をした。ウェズは、チームを救うことができる熱心な人のように思えた。彼はいろいろな雑学を知っていた。まるで毎週末ウィキペディアを眺めて過ごしているかのようだった。

「今から僕のお気に入りのゲームをプレイするよ」ウェイトレスが伝票を持って僕らのテーブルに近づいてきたとき、僕は言った。

「何それ？」ボビーが尋ねた。

「僕は『マットのデビットカードは使えるでしょうかゲーム』と呼んでる」

僕はいつも生活費の限界ギリギリで生活していたため、自分の預金口座は時々、都合の悪いときに底を突くことがあった。口座の残高を保っておくこともできたが、それではこのゲームの楽しみは全てなくなってしまうだろう。そして本当に憂鬱だっただろう。

「いつもは勝てるんですか？」ウェズが尋ねてきた。

「勝つなんてあり得ない」ウェイトレスに自分のカードを手渡ししながら言った。「負けないくらいの幸運を得るだけさ」

予定からの遅れ

「レースにかかる費用は 30 年間増加していない。

昔も今も、有り金全てだ」——不明

僕はレースチームで週に平均 50 時間作業していた。学校にもフルタイムで行っていた。記録を取っていれば、それは週に 90 時間になったはずだ。正直なところ週に 20 時間以上を学校で過ごすことはめったにないため、これを週 70 時間労働と呼ぶことにしよう。その時間を全部使っても、ランニングしたり、マウンテンバイクに乗ったり、自分の車をいじったり、『シンプソンズ』のエピソードを何度か聞いたりすることができた。もし自分の時間を正確に管理できたら、薄っぺらい恋愛くらいならできたかもしれない。それほど難しいことではない。週 70 時間は日当たり 10 時間だ。睡眠に 7 時間を費やしても、7 時間の自由時間がある。昼食に 1 時間、夕食に 1 時間かかったとしても、何マイルか走ったり、マウンテンバイクでトレイルに行ったり、オルタネーターを交換したり、映画を観たりする時間はある。これは週の毎日の話であり、それに僕はオルタネーターを毎日交換していたわけではない。

常に時間はあるのだ。どんなに忙しい人でも、普通はやりたいことのために週数時間は割くことができる。特に大学生は、GPA がどれだけ高い人であっても、普通はパートタイム(またはフルタイム)で何時間もバイトをするものだ。ただし例外もある。しかしそういう人はごく少数で、大きな成功を手にしているものだ。ただ残念ながら、誰もが自分たちは例外だと思っている。どんなと

きでも、忙しすぎるからチームのことは手伝えないと言ってくる人たちがいた。僕はかつてチームの一員だった人を見かけるたびに、最近見ないね、と声を掛けた。反応はいつも同じだ。

「ああ、やりたいんだけど、本当に忙しくてね。週に 20 時間働いて学校にも行って、本当に参ったよ」

僕はいつも丁寧にこんな調子で答えた。「よく分かるよ。まあ、もし時間ができたら、ミーティングの一つも来てくれよ」。そして僕は失望して立ち去る。僕の頭のイメージで彼らは、ソファに座ってマトリックスを観ながら、マリファナを片手にこう言っている。「おいおい、この仕事マジでキツイぞ。休憩しないと」。僕は腹を立てないように心掛けていたが、言い訳を聞くのにうんざりしていた。

フィルの作業は予定から遅れていた。そしてあるときから、僕が憤慨した日の数が、共感した日の数を上回り始めていた。

いつもはフィルのことを擁護する。彼にもいい点があり、過去にはいくつかのいい仕事を成し遂げたこともある。僕はいつもこの点を挙げたが、2 年前に彼がやったジグテーブルに関する素晴らしい仕事について言及するのが日増しに難しくなっていた。授業が始まってからというもの、彼は自分の作業に手を付けようとしなかった。彼はブレーキ動力計、チームの物販、燃料システム、そしてコストレポートを担当していた。11 月になるころ、彼は予定していたブレーキ動力計の作業のうち半分ぐらいはやっていたが、燃料システムは全くの手つかずだった。一部のメンバーは彼に対する不満を陰で言っていた。そして模範を示さなければいけない僕も、彼が姿を見せないうちに不満を言うようになってしまっていた。このことを誰かが彼に伝えたに違いない（この活動ではよくあることだが）。というのも、ある日工房でフィルが近づいてきてこうやってきたからだ。「君に謝らないといけない」

「謝るって、何を？」僕は尋ねた。

「俺は最近チームのことを何もしていない。だけどいろいろ忙しくて、例えば.....」

彼に最後まで言わせた。僕は全く気に掛けていなかったが。あるビジネスマネジメントの本に、人の顔を立てるのはマネージャーとしてはいい考えだを書いてあった。だから聞きたくもない言い訳であっても、いつも言わせるようにしていた。特にこの手のような言い訳。その数カ月前からというもの、フィルを見かけたと思うと、彼はいつもマシン以外のものに取り組んでいた。

その週の後半、僕は疲れ果て、睡眠不足になり、彼への同情は終わりを迎えた。誰かが、彼がチームにもたらしてくれたのはジグテーブルだけだと言い、僕はそれに同意した。「彼をクビにすべきだ」短い沈黙の後、僕は言った。

「そんなことできるか？」リッキーは、僕がこれを提案したことにショックを受けた様子で尋ねた。

「ああ、毎年誰かをクビにしている。去年はキャロライン、さらにその前の年はティム」

「まあ、彼がコストレポートをやらないのなら、それはクビに値する罪だ。それでも俺は今彼をクビにすべきとは思わない」とリッキーは言った。

リッキーはフィルを擁護した。もちろん彼らは敵ではなかったが、はまるで僕に対して非難をやめるよう合図を送っているかのようだった。ボビーはフィルと話をすると聞いた。そしてコストレポートだけが彼をデトロイトへの旅につなぎとめるものだと伝えたと。これは車に関連することではなかったが、ボビーに任せることにした。

「それに、みんなは試験で忙しかったしな」とカイルが付け加えた。「ただそれも終わったから、マシンにより多くの時間を費やせられる」

ほとんどのチームメンバーが、僕よりも授業の成績に力を入れていることを忘れてしまいがちだった。僕はいつも、ほとんど労力を掛けずにB-をすくい取るくらいには十分賢かった。統計的確率論の授業はついては少し心配してい

た。勉強不足で前回の試験はうまくいかなかったのだ。僕は合格する統計的な確率を計算しようとしたが、どうやって計算するのか全く分からなかった。

いずれにせよ、僕は予定よりほぼ遅れていたウイングの設計に戻らなければならなかった。自分がスケジュールを守れないのに、他のメンバーには守るよう期待することはできない。それに、自分が遅れていたら他の人の手助けなどできない。

翌朝、ボビーと僕は早くから学校に到着した。一人の人間に任せるにはあまりに重大な任務を成し遂げるためだ。昨年も一昨年も、僕らはデトロイト大会の登録をあと少しで逃すところだった。登録は中央時間の午前9時に開始され、デトロイト大会へ出場を希望するチームは全て、130 の出場枠が埋まるまでのどんどん短くなる時間の間に登録を完了しないといけない。2005 年と 2006 年はわずか数時間でいっぱいになり、僕らのチームキャプテンはあやうく逃すところだった。そのため 2007 年は、登録に備えるためボビーと僕の二人でオフィスに登場した。たっぷりの時間と並々ならぬ覚悟と共に。

僕らは午前9時前にウェブサイトを開き、そして工学部のクレジットカードを持っていたオフィスアシスタントのビッキーを誘拐しておいた。数分の間、僕らは登録用のリンクを見つけようとしたが、ウェブサイトの読み込みに時間がかかりすぎて探すのが難しくなってきた。どうやら、ウェブページのサーバは、登録希望者たちの負荷を一度に処理できなかったようだ。ボビーのコンピューターでは毎ページの読み込みに数分かかっていた。僕は向かいにある別のコンピューターで登録ページを探していたが、こちらの接続も遅かったので助けにはならなかった。約 10 分後、彼は登録用のページを見つけ、画面が表示されるのを待っていた。僕は自分のブラウザで登録済みチームのリストをクリックした。15 分も経っていないのに既に 75 に達していた。登録用のページが表示されると、ビッキーはすぐにクレジットカード情報を入力した。ボビーは

送信ボタンをクリックし、ページが表示されるまでさらに 3~4 分待った。僕らが待っている間にウッズ博士（テキサス大学アーリントン校 FSAE チームのファカルティアドバイザー）が電話してきた。「もう 116 チームが登録されているのに、君たちの名前がリストにないぞ！」。ボビーは必死に登録しようとしている最中だと彼に言った。ページがついに表示された。「クレジットカード情報が無効です」。ビッキーはカード情報を素早く、それでいてもう少し慎重に再入力し、送信ボタンをクリックした。クレジットカード自体の問題ではなく、入力した情報を間違えたただけだと祈った。ページの読み込みを待っている間に、僕はリストを更新した。登録済チーム：130 チーム。登録はたった 17 分間しか受け付けられず、しかも既に満席になっていた。

「もう 130 チームだ」僕は落胆して言った。「チャンスを逃したんだ」座ったままため息をついた。

「そんなことないよ、多分。送信ボタンは押したしね」ボビーは楽観的に言った。「ただページが読み込まれてないだけだよ。リストに僕らの名前がないか確認してよ」

リストをざっと見る。本当にあった。カーナンバー125：オクラホマ大学。数秒後、ボビーのコンピューターにクレジットカードの承認ページが読み込まれた。「登録ありがとうございます！」

「いやー、ギリギリだったな」ボビーは言った。

工学部のクレジットカードを使用することは最善の解決策ではなかったが、大会の登録がこんなすぐにいっぱいになるとは考えていなかった。カリフォルニア大会の登録が始まる1カ月後までには何か他の方法を考えないといけない。いずれにせよ、ボビーも僕も、チームに貸せるような 500 ドルの口座残高はなかった。学期の終わり近くだったので、おそらく 50 ドルの登録料でも前払いすることはできなかっただろう。

完全な無一文を経験することは大学カリキュラムの重要な部分だ。お金がな

いときは、教授が教えてくれない知恵を学ぶことができる。例えば、eBay で全てのものを売って家賃を支払う方法や、2 ドル分の硬貨で 3 回分の洗濯と、一晩中の洗車をする方法なんかだ。実社会における問題解決スキルだ。僕の金欠の物語は僕の車の歴史でもあった。「車バカ」としてみんなが僕に期待するのは、改造したホットロッドか、横にバカみたいなステッカーを貼ったシャコタンのホンダなんかを運転することだと思う。その代わりとして僕は、かろうじて動くポンコツを運転することを選んだ。実際には何台かあったので、正確にはポンコツたちと言うべきだろうか。

最初は 1979 年式プリムス・ボラーレだった。バーガー屋で苦勞して稼いだクソ給料 600 ドルで買った。僕は友人たちの中でほぼ最初に車を買ったため、どこへ行くときも僕らはこの車を運転した。「史上最低の車」のリストをいくつか見たことがあったが、ボラーレはその半数近くに記載があった。僕は自分の車に関しては幸運だった。壊れたときはいつでも地元の廃車置き場へ行き、古いプリムスの山を見つけては部品を取った。最初に車を手に入れたとき、僕は車のことについて何も知らなかったが、この車を手放すころにはウォーターポンプが一番いいものと交換することができるようになっていた。あの車は僕を車バカたらしめている理由だった。皆さんは 600 ドルの車を修理するためにトランスミッションショップで 800 ドルを費やさないはずだ。だからもし壊れたときは自分で直す方法を考えなければならなかった。ほどなくして僕は壊れていない部品まで修理し始めるようになった。これが車バカの全てだ。

ボラーレの直後にやって来たのはプリムス・ネオンだった。この車は僕がこれまでに所有した中で唯一ほんの少しでも受け入れることができた車だ。本当に少しだけだったが。大学での最初の 2 年間は、多くの部品を交換し、エンジンもリビルドして乗り切った。その後、より大きな問題が発生し始めた。僕は興味を失い、約 2 万マイルをオイル交換せずに運転した後、売り払ってしまった。僕は多少価値のあるいくつかの部品を外して eBay で売り、それに続いて

売った抜け殻のボディがなんと 38 ドルになった。そのころ、僕の同僚が新しい車を買ったので、彼はそれまで乗っていたぼろぼろのフォード・エクスプローラーを処分する代わりに僕に譲ってくれた。僕はこれを走行できる状態まで修理してピザの配達を続けていた。誰かにとっては、売る価値もなければ、ましてや運転する価値もないと思われていた車で一晩に 100 マイルを運転した。配達の途中でクラッチが壊れてしまったので、1 週間後に eBay で数百ドルで売った。それからしばらくは車を使わずにバイクにだけ乗っていた。暖かさを保つために 4 枚の服を重ね着することもあった。15°F (−9°C) の気候の中、ミシュランマンのような格好でバイクに乗って走り回った。

凍りつくような雨の中を走るのが嫌になったとき、僕は父の F-100 ピックアップトラックを借りた。父は新しいジープを買ってからはこの車を運転しなくなったので、ずっと家の私道に置かれていた。この車は乗り物としての機能は果たしていた。この車に関して言えるのはこれだけだった。この車は 1 ガロン (3.8 リットル) で 60 マイルを走った。これはエンジンオイルの量だ。運転するたびに、1 クォート (0.95 リットル) のオイルを入れる必要があった。僕はトラックの荷台に空のクォート缶を投げて、かなりのコレクションになっていた。エンジンの中で燃焼したオイルの一部が、まるで曲芸飛行のような煙となって排気口から流れ出ていた。そしてオイルのほとんどは、エンジンの数十個のひび割れや穴から漏れ出し、エンジンルームはタールピットのようにになっていた。学年の半ばまでは、車はまだ完全に死んではいなかった。死なないことが僕がこの車に対して求めていた全てだった。残念ながら、これも、再び、欲張りだったようだ。

「だから僕は昨夜、両親の家からトラックを運転して戻ってきたんだ」と僕は、工房内のフレームテーブルの周りに集まったチームメンバーに話した。「そしたらオイルの油圧計がゼロに落ちているのに気付いてね。だから次の出口を降りて、オイルを買うためにウォルマートの駐車場に車を停めたんだ。自動車

コーナーへ引き返して1ガロン缶のオイルを手に入れた後、しばらくウォルマートの中をうろついてた。ちょっとオーバーヒート気味だったからトラックを冷やしたかったんだ」僕は面白い話をするかのようなトーンの声で話したので、小さな群衆が集まって聞いていた。「そしたらインターホン越しに誰かが言うんだ。『白のフォード・F-150のオーナー様は食品売り場の入り口まで来てください』ってね」

ボビーは笑い始めて言った。「まずいぞ」

僕は続けた。「あまり深く考えなかったよ。だって僕が乗ってきたのは白のF-150じゃなくてF-100だったからね。でもそろそろ出発する時間だったから、外に向かい始めたんだ。そしたら、店の前に近づくにつれて煙の臭いがし始めた。それでもし誰かのトラックが燃えているんだとしたら、多分自分のだろうなと思ったよ。で、フードコーナーの入り口まで歩いて行ったら、本当に僕の車が燃えてた」

「ハッ！」カイルは笑って言った。

「しかも、ちょっと火がついているなんてもんじゃないくて、本当に燃え上がってた」と、火の大きさを見せるように両腕を伸ばして付け加えた。

「まさか……」ボビーは言った。

「そのまさかだよ。ウォルマートの駐車場のすぐそこにある」

「一体……あいつらは？ 火を消すために消防は来たのか？」とカイルが尋ねた。

「ああ、僕が出てきたとき、彼らはちょうど引き上げるところだった。彼らはどんな風に燃え始めたのかさえ尋ねなかった。荷台に空の油容器が山積みになっているのを見て、それで察したみたいだ。彼らが消火した後、警察が保険を見せるように言ってきたから、僕は半分溶けたグローブボックスをこじ開けて、黒焦げになった保険カードを彼に手渡したんだ。カードの左上隅に書いてある『オールステート』の字だけがかろうじて読むことができた。そしたら彼

は『朝、その情報を僕に電話するだけでいい』って言ってきた」

「ワオ」クリスは言った。「最悪だな」

「ああ、そうだね」とうなずいて言った。「そこにいたからね」

僕はいくつかの質問に答えた。火災のことや車がどこで壊れたのかなど。確かに面白い経験談にはなったが、僕にはエピソードよりも移動手段が必要だった。しかし、それはそれであり、僕は車無しの生活に戻っていた。

この生活のいい点はガソリン代とオイル代を節約できることだ。前月にお気に入りのデビットカードゲームで何度か負けて状況が好転しないことがあったため、これは非常にいいことだった。生存可能領域の経済的限界にここまで近づけているということは驚きだ。限界にいると思うたびに、僕は少しだけ近づく。スピード違反の切符を切られるようなことがあれば僕はすっかり赤字になっていただろう。そうすればただの生活を通り越して、工房に住む羽目になっていただろう。

時折の衝突

「時折の衝突は運転する者の代償である」——キャロル・スミス

僕がチーフエンジニアになって以来、クリスはずっと僕に対して見下すような態度をとっていた。僕の最初の反応はいつも、落胆して怒り、個人的な反省が続き、最終的にはあしらってしまう。彼は僕に対して嫌味を言い続けて、僕が言うこと全てに対し見下したような個人攻撃で応えているように感じた。数カ月が経ち、僕はこのことに疲れてしまった。

僕は工房内にある 3D デザインソフトを最新版にアップデートし、それを知らせるメールをみんなに送信した。新しいソフトウェアは以前のものよりわずかに異なっていたが、より速く、またキャンパス内でより広く使用されていた。僕は何人かのチームメンバーに問題があるかどうかを事前に尋ねていた。アンディは以前これを提案していたため、素晴らしいアイデアだと考えていたようだ。デイブは問題ないと考えていたし、大賛成だった。他に誰も問題はなかった。

クリスを除いて。

僕はクリスには尋ねなかった。彼の意見が欲しくなかったわけではなく、みんなに尋ねたときに彼がいなかったからだ。チームの大多数は問題ないと言っていた。その中には 3D デザインチーフのデイブもいた。

全員に変更を警告する電子メールを送信した後、クリスから応答があった。

「このクソ野郎、少なくとも車が完成するまで待てなかったのか？」

クリスは的外れの物事から頻繁に問題を起こしたが、大抵はもっとパッシブ

アグレッシブだった。ボビーに電話して、クリスが冗談を言っているかどうかを確かめた。彼は本気のような。

僕はクリスに返信した。

「チームメンバーの何人かと話したけど、誰も問題があるとは考えていなかった。それとは別に、ソマー博士はソフトウェアのアップグレードを望んでいるし、しかも彼の研究室だし、この件に関する君の意見はほとんど意味がない。これは問題にならないよ」

何とかこれで終わりだろうと期待して、眠りについた。

翌朝、クリスから返信があった。

「それじゃよろしくお願いします、IT 担当者さん。チーフエンジニアとしての職務に情熱を持っていたけると嬉しいんですが」

——あいつの問題は一体何なんだ？——僕は考えた。僕は全ての義務を果たしていた。僕は彼の担当システムの設計と製作状況を監督するため、彼の見下したようなでたらめを我慢して聞いていた。彼に進捗状況を尋ねるたびに、僕は自分を犠牲にして、彼の嘲笑的な非難を毎回聞いていた。

僕は工房に行く前にシャワーを浴びて冷静になることに決めた。シャワーの後、僕はまだ怒っていた。工房へ運転して行った後、僕はさらに怒っていた。僕は工房に入ると、クリスが使っていた溶接機を止めた。

「それで？ 僕に何の問題があるって？」

「君には君の仕事をして欲しい。君はチーフエンジニアとして何もしていない。君がやっているのはプロジェクトの細かい仕事ばかりで——」

「僕が何をやっていないって？ 正確に。僕がスケジュールを守っていないか？ ミーティングを開くたびに君は 15 分遅れて現れて、ミーティングに対して文句を言って、その上こちらからの質問は全部知ったかぶりの回答を返す。僕がスケジュールを守れないのは、スケジュールを守ろうとする僕の試みを尊重しない君のせいだ。自分の職務を全うしようとする僕の試み全てを君は妨害

しているが、今度は僕がそうしていないと文句を言いたいのか？ 本当の問題点は何だ？ 君からのソフトウェア関連の問題に僕は返事したが、君は別のクレームを返すだけだった」僕は身振り手振りと言さしを交えながら返答した。

「ソフトウェアのことは半分冗談だった」と彼は静かに言った。

「まあ、明らかにソフトウェアの問題ではないだろうし、おそらく他のものでもないだろう。で、本当の問題点は一体何だ？」

「君は自分の仕事をしていない。あのルールに関する問い合わせも送らなかった。あれの送付を拒否したとき、チームの士気をどれだけ損なったか君には分からないだろう」彼は冷静に答えた。

「あんなルールの問い合わせ？ あれは1カ月も前の話だし、君が作り上げた空想のルールについて明確化の問い合わせをするのは僕の責任じゃない」

「システムを監督するのは君の責任だ」

「ああ、監督はする。もし君がルールを見落としたなら、その尻拭いは僕の仕事だろう。だが、君の設計がルールに適合するかどうかを検証するのは僕の責任じゃない。それは君が設計したものであり、それがルールに適合するかどうかは確認するのは君の責任だ。これはデザイナーとしての仕事の一部だ」

「まあ、俺は今やっていることを続けて、やり遂げるだけだ」彼は手を伸ばし、溶接機の電源を入れた。

僕は冷静になるために上の階へ行った。彼の言ったことを考えた。長い間考えた。過去に他のチームメンバーと口論になることはあったが、ほとんどの場合は僕のミスだった。僕は長年にわたって自分が少しずつ成長してきたと思うのが好きだった。人との接し方がうまくなっていると思うのが好きだった。今回僕の落ち度はどこにあったのか？ 振り返ってみると、僕はルールに関する問い合わせを送るべきだった。だがそれは1カ月分の憤慨めいた軽蔑につながるべきものではなかった。

ボビーがコンピューターラボに入ってきた。

「クリスの本当の問題は何なんだ？」僕は尋ねた。

「どういう意味だ？」

「なぜ彼はこちらに喧嘩を売るんだろう？　彼はルールの特明確化が問題だというんだが、もう1カ月前の話だ」

「分らない。彼はソフトウェアのアップグレードについて少し怒っていた」

「ああ、それに関して彼は半分冗談だったと言っていた。それが何を意味するかは分らない。ルールの問い合わせについて他に誰かが文句を言ってきたことはある？」僕は尋ねた。

「そういう話は何も聞いてない。思うに、虫の居所が悪かっただけじゃないか。確かに君の言う通り、ルールの問い合わせの話は1カ月前の話だ」

「まあ、彼のたわごとに付き合うのは本当にうんざりしてる。彼の機嫌が悪いって理由だけで、1日おきにくだらない話を聞くのも疲れたしね」僕は自分の考えを固めながら言った。

「しかし、チームに影響を与えるような衝突は避けないと――」

「それを恐れてる」僕はボビーを遮って言った。「僕や他の誰かを非難するためにチームを蔑ろにすることを恐れてる。彼は既にソマーの件で一度やっている」

「覚えてるよ。あの騒動が終わった後、もしまたこんなことをしたらチームから外れてもらうことになる」と彼には言っている。短い沈黙があった。「クリスのことで問題があるなら知らせて欲しい。間に入って仲裁してみるよ。しかし君は――」

「クリスのことで問題がある」僕は遮った。「仲裁か、もしくは僕が……」僕は話すのを止めた。怒りの脅迫をしたいわけではない。僕がクリスのことを対処する以上に、ボビーは僕のたわごとに対処する時間がないように見えた。僕は首を横に振り、後ろを向いて立ち去った。

もしクリスがそのときすぐチームを去っていたら、僕は幸せだっただろう。

実際、彼が生意気な返事をするたびに、チームの前で容赦なく彼をからかってチームを辞めてもらおうと真剣に考えていた。4日後になって、彼にチームを辞めてもらおうという考えを捨てた。彼はデザインレポートを添付したメールを僕に送り、文末にはこの一文が付け加えられていた。

「個人的な話だが、先日は怒ってしまい申し訳ない。私は学校などで多くのストレスを感じていたが、君を非難するのは不公平だった。君のことを友達だと思っているし、将来またそうなることを願っている」

彼に腹を立てないくらいには十分に冷静になっていたが、今回のことをただやり過ごすつもりはなかった。僕はこう返信した。

「君に怒鳴り、ルールの明確化に関する問い合わせを拒否したことについて心から謝罪します。友達やチームメイトになってほしいのはやまやまですが、今回はただ謝るだけでは足りません。非常に有用なことを言っておくと、君の弱点は他人の技量や人格をすぐ攻撃することであり（その人が近くにいないときは特に）、しかも君の感情はすぐに傷ついてしまうところです。前者は後者よりもはるかに悪い」

次の火曜日の夜のミーティングは順調に進んだ。アンディにアップライトについて尋ねると、クリスが割って入ってきた。

「ベアリングの圧入はどうするつもりだ？」

アンディは答えた。「僕はただ押し込むつもりだったけど」

「ベアリングスリーブ無しで？　まあマレットで打ち付けたっていいと思うけどね」とクリスは怒りながら皮肉を交えて言った。

「皮肉はやめて、クリス」僕は言った。

彼は話をやめた。アンディと僕が締め切りについて話し合っている間、クリスは立ち上がってミーティングから離れていた。

僕らはミーティングを終え、そして僕はウイングに使う発泡材を機械加工す

るために階下に向かい始めた。

「いや、まだだ。マット、俺、そしてクリスで話をしよう」とボビーが言った。「君ら二人が仲が険悪になってる。今すぐ解決しよう」

次の 15 分間、僕は唇を噛み、クリスが僕に対してなぜそんなに怒っているのかを聞いた。

「君はいつもエンジンシステムとかについて何かを読んだり、それを引用して専門家ぶったり……」

「俺からしてみれば君はダブルスタンダードな人間だ。俺には生意気だとか言っておきながら、カイルやリッキーが横で喋ってるときには何も言わないし……」

「君は仕事をしていない。それにルールの明確化について送らなかったときはチームの士気も傷つけている」

僕が情報を学んだばかりのときに専門家のような引用をしたらどうか？ まあ、時々は、したかもしれない。だがそれほど意地の悪いことではないはずだ。僕がクリスを不当に扱ったか？ ルールの問い合わせの件は本当にチームの士気を傷つけたか？ これら全ての問題についてカイルとリッキーに別々に尋ねたところ、両者と同じ結論に達した。

「ああ、確かにルールの問い合わせの件は少し腹が立った。でも、クリスはあらゆることに腹を立てている。ほとんどの人が 5 分後には忘れてしまうようなことにもだ」

ボビーは僕らを座らせて問題を話させ、問題を解決して仲良くすることを望んでいたが、そんなことにはならなかった。僕はさらに自己防衛的かつ怒ってミーティングを後にした。僕は物事を個人的に取らえた。他のチームメンバーが僕の話を話すときは、例えそれが冗談だったとしても、常に個人的な反省をした。しかし、クリスはいつも僕に対して怒っていた。彼は僕が周りにいるときはほとんどいつも機嫌が悪く、なんの敵意も持たずに応答したり、僕とや

り取りしたりすることはめったになかった。僕は壁を作った

——あのクソ野郎。他の奴らも全員クソだ。製作しなきゃいけないマシンがあって、こんなたわごとに付き合ってる暇は無いてのに。——

「ソマーがいなくなってから、お前はその矢面に立たされている」 とカイルは言った。「彼は以前はこうではなかった。いつも幸せそうだった。だけど何かが起こって、今の彼はほんのささいなことにも怒りを覚えるようになっている」

「もう疲れた」と僕は言った。「彼の友人であることにも、彼の考えを気に掛けることにも。彼のたわごとを我慢するためにチーム内であまりにも多くの時間を費やしすぎている」僕は壁の時計を見た。「それでウイングの型を機械加工するためにバカみたいに徹夜するんだ。ボビーが結婚相談会に行きたいって言うからね」

カイルはため息をついた。「友人を失うのは嫌だ」

「僕は惜しいとは思わないけど」

「まあ、私を殺すに至らないものは私をさらに強くする、だろ？」カイルは僕を前向きにしようと言った。

「人生における戦争の学校か」僕は自分自身に静かに言った。

「え？」

「何でもない、気にしないで」と僕は窓の外をしんみりと見つめて言った。

「今夜は俺らと一緒にクラブに行こう。マシンから離れよう」

「ああ、そうだね。いや、僕は踊るようなタイプじゃないよ。もしくは社交的なタイプでもない。実際、そういうことは全部.....僕と正反対だ」

「楽しい？」カイルは笑って言った。

「昔は外向的だと思ってたけどね。とにかく、ウイングに取り掛かるよ」

僕は階下に行き、CNC フライスの準備を始めた。長い夜になるだろう。もう疲れた。バカげたこと全部にも疲れたし、週に 80 時間も作業しているのに

何もしていないと怒鳴られることにも疲れた。完全な無一文な状態にも疲れたし、この汚い場所で生活することにも疲れた。僕の友人はレースチームのメンバーだけで、もう姿を見ることもうんざりしていて、その友人も毎日起きている時間ずっと僕を見ることにうんざりしている。昔の友達はみんな電話を掛けて来なくなった。レースカーの締め切りに間に合わせるため、彼らと話すたびに適当にあしらっていた。で、何のため？ 何の意味がある？ それで、年間45000ドルの給料をもらって新しいシビックのシートベルトを設計する仕事に就くのか？ もう何をしたいのかさえ分からなかった。

ボビーはクリスのでたらめに同調してさらに僕をいら立たせた。彼はほとんど単位を取れていなかったが、それがチームで過ごした時間の長さを示しているのかどうか、僕にはもはや確信が持てなかった。チームの残りのメンバーは一年中楽にやり遂げているように見えた。カイルはレクサスに乗ってるし、彼女もいるし、でかい浴槽付きの家に住んでる。彼はどういうわけか3.8のGPAを持っていて、秋にはイギリスのレースカーエンジニアリングの大学院に進む予定だ。僕のGPAは工学系大学から追い出される基準をкаろうじて上回っている程度で、ホンダでシートベルトを設計する仕事を得るために必要な最低限をはるかに下回っていた。頼れるものは何もなかった。手持ちのカードは全てテーブルに乗っているが、全てFSAEだ。

CNCの画面に映る時計を見た。「10時15分」と、「残り8時間」。リッキーとカイルもおそらく僕と同じような時間に寝るのだろう。違うのは、彼らは酒を飲んで、踊って、でかい浴槽に座って夜を過ごすってことだ。

「クソッ」静かに自分自身に言った。僕は拳でCNCの非常停止ボタンを叩き、コンピューターをシャットダウンし、照明を切り、背後のドアをロックした。締め切りよりも大事なものが人生にはあるはずだ。

サッカー・フォースクエア

「リスクのないドライビングの仕方なんて知らない。誰もが自分自身を磨かなければいけない。ドライバーにはそれぞれ限界がある。僕の限界は他の人よりもほんの少し遠くにあるんだ」——アイルトン・セナ

彼らがまだ出発していないことを期待しながら、カイルの家の私道へとやって来た。彼の車はまだそこにあった、そして他の数台の車も。僕が持っていた唯一のボタンアップシャツと、唯一残った汚れのない最後のジーンズで構成した急ごしらえの服装で、玄関まで歩いて行った。僕はオシャレな服を持っていなかった。あったのは、ただ汚れていないというだけの服だけ。

僕がドアベルを鳴らすと、カイルは驚きと混乱の表情でドアを開けた。

「マット？」彼が言った。

「マットも今日来るのか？」リッキーはリビングルームの後ろから大声で言った。

「君からの招待はまだ有効だと思ってね」

「当たり前だ。入れよ。僕らはプレゲーミングを終えるところだ」

プレゲーミングというのは、安上がりに家で半分酔っぱらうことだと教わった。そしてその後クラブで完全に出来上がるのだ。リッキーはショットを勧めたが、僕は自分がビール好きだと力説した。カイルは僕らと一緒に行く他の人々に僕を紹介してくれた。彼らのルームメイトや他のカップルたちだ。僕は社交的な空気や新しい人と会うのが苦手だった。だから僕はリッキーからの二

度目のショットの提案を受けて、理性のタガを外した。

僕らは別々の2台の車に荷物を詰めてクラブに向かった。僕らが到着したとき、僕はまだ緊張を感じていた。リッキーはレッドブルウォッカを試してみようことを提案したが、僕は自分のビールに満足していた。それでも、僕は無愛想で退屈な男にはなりたくなかったので、僕はバーでのラウンドオブショットに参加した。さらに数杯のビールを飲み、一緒に行った他の人たちと話をしてお酒を飲みながら工房外での素敵な時間を過ごした。まださらにリラックスしてグループの輪に入ろうとしていたので、おすすめのレッドブルウォッカに切り替えた。他のみんなはクラブに着いてからずっと踊っていて、みんなが僕をダンスフロアに連れて行こうとした。僕にとってクラブに出かけることはストレッチだったが、ダンスしたいわけではなかった。僕には足りないものがたくさんあったが、その筆頭がダンスだった。

7杯のレッドブルウォッカを飲むと、僕はダンシングマシーンと化した。カイルは本当にいいダンサーだったが、これが僕を不安にさせた。幸いなことに、自信ありげに虚勢を張ってはいたがリッキーは違った。部屋をざっと見ただけで、他にも下手なダンサーが大量にいることが分かった。いずれにせよ全く気に掛けなかった。二度とこれらの人々に会うことはないだろうし。そしてカイルとリッキーは僕のダンス能力の不足をよく分からせてくれた。だから僕は踊って、飲んで、笑って、冗談を言って、あともう少し飲んだ。家に帰るころには、レースカーを持っていたことさえも忘れていた。ウォッカのボトルを空にするころには、自分に名前があることすら忘れていた。夜明けの苦痛な帰宅のドライブ前に、彼らのソファでほんの数時間だけ横になった。

10:40に目が覚めた。チェロキー語の授業に遅れてしまう。僕は授業をさぼることに決めた。遅刻するくらいなら行かない方がましだ。僕は歯を磨くために洗面台に行き、バスルームの棚に固定した曇った車のサイドミラーを立った

まま見つめた。

ここ数週間、レースチームは戦争のように見えた。クリスと学校、そして締め切り、そして工房外でのあらゆる種類の社会的な交流との戦い。これは連戦だった。僕が生来持っていた能力だけを使い、人生の全ての可能性をレーサーの競争につき込み、銀行口座の残高を0ドルにしながら作り上げた戦争だった。

カイルが昨夜言ったことについて考えた。「私を殺すに至らないものは私をさらに強くする」。彼がやろうとしていたことには感謝するが、この引用は嫌いだ。引用文に本来の品質が欠けているということではなく、この引用の一般的な使われ方が気に食わないのだ。人生が自分の顔を平手打ちしようとするとき、人々はそれを断言のように振り回す。これは実際には何も意味がないし、人々がこの言葉を使う方法は全く正しくない。強さというものは、苦難の慰めとして自動的に軒先に現れるきれいな小包ではないのだ。教訓は学ばなければならない。個人的な成長とか、他のくだらないことも含めてだ。引用の全文は、「人生における戦争の学校より。私を破壊するに至らないものは、私をさらに強くする」。しかしこれは適切に思えた。戦争の学校と呼ばれる何かがあるなら、FSAE はまさに当てはまるだろう。そのポイントは何かを学ぶことであり、それは競争という文脈で存在していた。学ぶことに興味はあったが、僕らがそこにいた本当の理由は勝利だった。学習は、補助で、副産物で、おまけで、大学にお金をせびるいい口実だった。しかし、学ぶこともたくさんあった。僕らの勝利のための努力は、逆境に直面したときに、より強くなることを要求した。戦争の FSAE 学校より。私を殺すに至らないものは、ただ私を強くする機会を与えるのみである。

いずれにせよ、僕は自分の問題が何であるかを知っていたので、ニーチェが僕に言う必要はなかった。自分が置かれている全ての状況を選んだのは僕自身だ。僕は汚いアパートに引っ越して、余ったお金をダッジ・ダートにつき込み、

空いた時間を全部レースカーの製造に使うことを選択した。僕はチーム以外の友達はいなかった。なぜなら、持っていた時間の 90%はチームの中で使い果たしていたし、残りの 10%はとりとめのないことに消えていた。僕はこれらの決断に対して責任を負い、これらの決断と共に生きる責任を負わなければならなかった。カイルにはカイルなりの状況があった。彼はまた別の選択をして、他のものを犠牲にしていた。彼が毎日一日中働いていることを僕は知っていた。彼は素晴らしい友人であり、彼にとっても僕が一番の友人だと期待していた。ボビーもまた、誰よりもチームに献身的だった。チームは往々にしていられたい状況にあり、自分自身のストレスや自分自身の問題のために他のチームメンバーに腹を立て始めていた。何かを変える必要があった。そして変わるべきは彼らではない。

クリスに関しては、まあ、たまに、嫌なやつだった。しかし本当のところは僕もまた嫌なやつだった。もしトレイかカイル、ボビーの誰かが無視したなら、僕は自分のエゴで小さな口論から争いへと増長させただろう。クリスが僕との口論を止めようとしたとき、僕は彼に向けて傲慢な言葉を投げかけたりした。その状況から一歩引いて自分の間違っただけの行為を客観的に見ることは難しかった。しかしあのメールは僕の傲慢さをそのまま記録しており、僕が言ってしまった言うべきでなかった言葉を恥ずかしげもなく示していた。いろんな意味で、クリスはチームと僕らの進捗を擁護し、僕は自分のエゴを擁護した。彼は自分の担当をうまくこなしたが、戦争を始めるためには少なくとも二人の人間が必要だった。

僕らは親友というわけではなかった。実際、話をしたのは数週間前だった。僕らはチームメイトだ。いいチームメイトになった。彼は彼の仕事をして、うまくやり遂げた。彼は自分自身の力でやった。僕らの助けがあろうとなかろうと同じようにやり遂げただろう。僕らは徐々に関係を回復し、マシンについて慎重に話し、あると分かっている地雷を避けた。口論したりケンカしたりとい

うのは無益だ。マシンは遅くなり、僕らの生活が悲惨になるだけだ。

僕らは冬休み中もマシンの製作を続けた。クリスマスイブの日に両親の家に向かう途中、何か持って帰ろうとコンピューターラボに立ち寄ったら、デイブは静かに一人で作業していた。彼はほぼ一日中そこにいたと思う。彼は人のいないコンピューターラボが好きだった。

春学期の初め、学資ローンが現れて僕は黒字に戻った。僕は署名学生ローンを加え、慎重に予算を割り当てた。僕は卒業後も就職活動をしている可能性が高いので、学期中とさらに夏の 2 カ月間、それを持ち続けることを計画した。自分の車を走らせるために必要なことにも予算を組んでおいた。

チームの物事も同じように適切に分類され始めた。カリフォルニア大会の登録はデトロイト大会のときのような楽しいドラマはなく、すんなりとエントリーすることができた。両方の大会は同時に登録が開始されるが、チームは 1 カ月の間、どちらか一つしか登録できない。さらに 1 カ月たってもまだ空きがあれば、両方の大会に登録ができる。これは、全チームが少なくとも一つの大会に参加できるようにするためだ。デトロイト大会は数分でいっぱいになったが、カリフォルニア大会にはまだ 8 チームの空きがあった。エントリーの日が来たとき、登録用の組織が準備できていた。リッキーとカイルはクレジットカードを持って家に待機。僕はルームメイトのクレジットカードを持ってアパートに待機し、ボビーは工学部のカードを持って学校に待機。最初に登録された人以外は直ちに登録費用が返金される。僕らはみんな、同時に、異なるコンピューターで試そうとしていた。リッキーが 1 分もかからずに登録し、3 分後に登録は締め切られた。僕らは二つの大会に行くことになった。全てのプレッシャーが一つの大会にかかるわけではなくなったことを知って嬉しかった。

最初に提案して以来、僕はフィルを辞めさせることについてあまり考えていなかったが、それが正しいことではないことは明らかだった。彼はミーティン

グに現れ、自らの仕事を成し遂げていた。彼は自分の部品を予定通りに終え、コストレポートをうまく作成し、予定通りに提出していた。

トレーラーが持っていかれたあの日、フィルがチームにとって大きな利益になったことは明らかだったはずだ。彼は何でも屋だった。彼はどんな仕事でもやってくれた。押収されたトレーラーを取り返すとか。やりたくもなければ、やる時間もないような仕事。ボビー、カイル、リッキー、クリス、デイブ、そして僕のように、多少なりともチームとマシンに夢中になっている者もいた。だからこそ、一部の人々が夢中になっていないという現実を受け入れるのが難しくなった。もし誰かが週に 10 時間チームで作業していたとしても、その人が何もしていないと見なすのは簡単だ。しかし、10 時間という時間は貴重な貢献であり、本来ならば対価が必要となる 10 時間なのだ。フィルは週 10 時間男であり、彼は週 10 時間分の作業を必要としていた。フィルの一番の長所は彼の態度であり、その理由だけでも彼には存在価値があった。彼はいつも上機嫌で、前向きで、そしてチームの誰であっても身代わりになって非難を受けただろうと確信している。誰でも、おそらく適当に選んだ見知らぬ人でさえも同様にだ。彼はまさにそんな男だった。また、彼がスケジュールどおりに進んでいるかどうかを確認するのはチームマネージャーの責任だということも分かっていた。クリスとデイブは締め切りに対して防衛的であり、僕はチームメンバーに対して各自のパーツやシステムを聞いて回るのを躊躇していた。僕はスケジュールから遅れないようにすべきだったが、チームのメンバーに対して個別に、そして彼らのスケジュールとチームのスケジュールのバランスを考慮してアプローチした。チームはフィルをコストレポート担当にすることを同意し、そしてボビーはコストレポートを予定通りかつ平均以上の完成度を確保するという素晴らしい仕事をした。ボビーは間違いなく、僕よりも優れたマネージャーだった。

春学期に入りレースカーが形になり始めると、チームもまた同じように新しい形をとるように見えた。僕らは以前より外に出て楽しむようになり、マシンのことを四六時中心配するようなことはなくなった。カイル、リッキーと僕はクラブにも何回か出かけ、彼らの仲間と新しく友人を作ることができた。比較的落ち着いたダンスも数回踊った（内緒だよ）。苦手だった人付き合い対策の一環として、僕は他のチームメンバーと一緒にカイルの実家に行き、ここ数回のオクラホマ大のフットボールの試合やスーパーボウルなんかを観た。

絶え間なく小言を言ったりスケジュールを心配することを止め、マシンとは別のことに時間を使うようになってから、僕の個人的なストレスレベルは下がった。全体として僕の生産性は上がった。チームで週 60 時間作業すれば、普通、週 80 時間作業するよりも生産的なはずだ。ミスを犯すと、スクリーンを見つめて、歯軋りして、なぜいまだに辞めていないのか思い出そうと何時間も使い始める。

実際のところ、どんなに一生懸命作業しても、楽しんでいなければおそらく勝てないだろう。

時々、工房に何人かいたら、集まってサッカー・フォースクエアで遊んだりした。これはフォースクエアのサッカールール版だ。言い換えれば、手を使うのは無し。楽しかったし、みんなリラックスできた。サッカーボールを屋根から降ろすための回収デバイスを何度も作成しなければならなかった。これは高さ 20 フィートの屋根を考えると、それ自体が技術的な課題だった。

ある夜、ボールを取り損ねてキングのスクエアを失ったウェズが、ボールをつかんで「This is Sparta!」と叫びながら目いっぱい蹴飛ばした。何が今起きたのか誰も分からなかった。しかし、みんなただ頭を振って大笑いしていた。

「今のは一体なんだよ？」ボビーがヒステリックに笑いながら尋ねた。

ウェズはただ肩をすくめた。

「分かった」僕は言った。「それじゃあマシンの作業に取り掛かろう。ウェ

ズ、サッカーボール探しに行けよ」

僕らはそれぞれのプロジェクトに戻っていった。リッキーは自分で持ち込んだゴーカーの作業をしていた。それは彼のいとこのやつだか何かで、半分錆びていて、シートに裂け目があって、右前のタイヤはパンクしていた。リッキーは家族の良き一員であり、それを修理していた。彼のその作業に文句を言うメンバーはいなかった。マシンは予定通りに進んでいて、リッキーは自分の仕事を既に終えていた。それに、僕自身も車を走行できる状態にするために何度か工房へ持ち込んだことがあった。

「誰かここでジョシュを見なかったか？」と僕は尋ねた。「電装系の締め切りは1週間くらい前だったんだが」

ウェズが答える。「彼は15分だけ作業しに来て、しかも来るのは数日に1回だけです。彼の仕事は実際何も進んでないでしょうね」

「あいつはここに来て、仕事をやり遂げなきゃいけない。それは彼の責任だ」カイルは落胆したように言った。

昨年まで電装を担当していたリッキーが、「彼はこいつを直す必要がある」とペダルに向かって伸びる配線を指さしながら言った。「この辺のスเปードコネクタはゴミだ。しかも配線に弛みを持たせていない。ひどい設計だ」

彼が話していた配線というのはブレーキトラベルスイッチ用のもので、ブレーキの油圧が抜けてしまったときにエンジンを停止させるのに必要な部品だ。これは安全要件の一つで、ペダルがマシンに取り付けられたあとすぐにジョシュが行った仕事だ。

「でも電装系をやってくれるのはありがたい」リッキーが続けた。「マシンがほとんど完成してからじゃないと作業できないし、その日のうちにやってくれることをみんな期待するし。なんで俺が今年電装をやらないと思う？」

リッキーが言うことももっともだったが、ジョシュが締め切りに間に合わないことも明らかだった。彼はフィルと同じような週10時間男だった。だが電

装系は週に 10 時間しか作業しない人間にとっては大きすぎる仕事だ。最近、彼がチームに来る時間は 10 時間を切っていて、バイトにもっと多くの時間を使っていた。彼は熱心で、僕らが電装のリーダーを依頼したときに彼はそれを引き受けてくれた。だが彼が自分で努力するかどうかを確認するまで僕らは待つべきだった。かなり前にチームを辞めたラルフのときと同じ間違いを僕らは犯したが、ジョシュは昔の僕を思い出させてくれたので、彼にはもっと期待してしまった。しかし彼は僕ではない。僕は後ろに引き下がって、彼に自分の道を踏み切らせるべきだった。もし彼が本当にそれを望んだなら、彼は最終的には電装チームのリーダーになっていただろうし、それに値するし、それに必要な時間も与えていただろう。もし彼が本当にそれを望まなかったなら、それほど重要ではなかったタイミングで、僕らは知ることができただろう。

いずれにせよチームの残りのほとんどは予定通りだったので、電装を完成させるために全員で取り掛かることができた。

しかし、あれは別の夜のことだった。僕はリヤウイングのサポートを完成させるために作業をしていた。そのサポートはアルミの締結部品を接着したカーボンファイバーチューブでできていた。表面を処理し、接着剤を混ぜ、それぞれの部品を適切な場所へと接着していった。接着剤が固まるのを待っている間、駐車場で小さな火が出ていて、ウェズがそれを覆うように前かがみになっていた。僕は調査のために歩いて向かった。

「何してるの？」僕は尋ねた。

「このガソリンがまだ燃えるかどうかを見たかっただけです。これはずっとゴーカートの中に入っていたやつです。もうガソリンの臭いさえしません」と彼は言い、ガソリンが入ったカップを手渡してきた。

「中学生のころ、火遊びをしていたころのことを覚えているだろう」カップの臭いをかぐ前に僕は言った。「そのとき、行き過ぎて近所中を火事にしかけるような子供がいつも一人くらいいただろう？ ああ、僕がその子供さ」

なぜだか、ウェズからの返事はこうだった。「分かってると思いますが、あそこにバケツ一杯分のガソリンが残ってますからね」そう言うと、彼はゴーカートを指さした。

5分後、駐車場全体が火事になった。僕がそのバケツに火をつけたら、すぐに溶けて、炎のガソリンが四方八方へと流れ出た。僕は炎を覆って消すために段ボール箱をつかんだ。しかし、ただ段ボールも燃えただけだった。それから段ボールを踏みつけると、今度は自分の靴に火が燃え移った。ウェズは消火器を拾い上げて、これ进行处理した。火が完全に消える前に彼は叫んだ。「今のは何ですか！ 一体何考えてるんですか！」

「ウェズ、言っただろ.....何て言ったっけ、何を言ったっけ？」僕は笑いが止まらなかった。火事は大事には至らず、駐車場は広大で、ガソリンもあまり入っていなかった。その上、僕はこのようなことを中学校でたくさん経験していた。ウェズは首を横に振り、笑いたくなる衝動を抑え、諦めるまで数分間、怒りの表情を浮かべていた。

「アホ」彼は笑いながら言った。

僕はゴミの山を片付け、目の前のプロジェクトに戻っていった。駐車場を火の海にするのに勤しんでいた間、ウイングサポートの接着剤は接触可能なところまで硬化していた。僕はそのうちの一つを拾い上げ、後でボルト固定する場所へ当ててみた。

「どう思う？」みんなに聞いて回った。

「カーボンファイバー製？」カイルは熱心に尋ねた。

「ああ」

「なんか壊れそうに見えますけど」ウェズが言った。

「ああ、でもカーボンファイバーだからね。テストピースを材料試験機に掛けてみたけど、400 ポンド（181 キログラム）のところまで座屈しなかった」

僕は意図的にこのパーツを手渡さなかった。エンジニアがすごく軽量で手の

込んだものを見たとき、なぜだかそれをねじったり曲げたりして、どれくらいの強度があるかを確認するのは自然な反応だからだ。これらの部品はマシンで使う分には全く問題なかったが、好奇心旺盛な学生エンジニアたちがねじったり曲げたりするようには設計されていなかった。

「端のアルミニウム片はのり付けしただけですか？」ブレットが尋ねた。

「のり付け、じゃなくて、接着だと思うけどね」僕は接着という単語を指で強調して言った。

「じゃあもっと大げさな言い方でもすればいいんじゃないですか」ウェズは笑顔で言った。

ウェズを一瞬にらみつけると、最高にうまい返しを思いついた。「お前のママこそ大げさな名前だろ」

「これはいいと呼べる？」リッキーが尋ねた。

「僕はいいと呼んでいる」と自信を持って言った。「実際には構造用接着剤だから、せん断強度は.....忘れたけどすごく大きい値だ。ウイングサポートをフレームに固定するボルトよりはるかに大きい。壊れることはないだろう。でも、すごく脆くて切欠き感度も高いから、マシンに搭載していないときは卵の殻のように扱うこと、いいね？」

ボビーは想定していた反応を返してきた。「鉄製の予備品も用意するんだろ？」

「もちろん。僕もバカじゃない」ウイングサポートを慎重に箱へ入れて、工房の奥の隅に置いた。ねじられたり、曲げられたりするのを避けるためだ。僕は携帯電話の時計を見て出発する時間だと決めた。「じゃあ、もうそろそろ行こうかな」

「テニスの授業のために早起きしないといけないのか、マット？」カイルは笑顔で尋ねた。

「はは、違うよ。テニスはもう1カ月行ってない。楽な今学期をもう少し楽

にする必要があると決めたんだ」

「そうか、落とすつもりか？」

「まあね。だけど構わない。テニスは合格/不合格クラスだから GPA に影響しない。来学期向けの学資援助が執行猶予になるだけだ。でもこの学期で卒業する予定だから、問題にならないみたいなんだ。それに、もう眠たくてね」

僕らはみんなそれに同意して、その夜は作業を切り上げた。

ハワイ標準時

「勝利のためには、全てではないにしろ、娯楽の時間を犠牲にする必要がある。
しかしレースというものは基本的に娯楽であるため（人は生計を立てるために
何かしら嫌なことをするものであるし）、あまり文句も言えない」

——キャロル・スミス

僕のめったにない帰省旅行の途中に、高校時代の友人から尋ねられた。人生のあらゆる機会の中で、なぜレースカーで過ごすことにしたのかと。彼に答える回答は持っていなかった。そんなことを考えたこともなかった。混沌とストレスと失望の真ただ中にあるときでも、眠れぬ夜でも締め切り数分前でも、僕はなぜこんなことをしているのかと自問をすることは決してなかった。それは僕から僕への贈り物だった。ほとんどの大学生は専攻を3回切り替え、何をしたいのか数年掛けて思いを巡らせ、そして最後の数カ月間は何をやるかに思いを巡らす。僕は既に考えていた。それでも、考えさせられた。一体なぜこのチームなのか、そしてそれより重要なのは、なぜ毎週何十時間も使うのか。僕は自動車会社での職を望んでおり、このチームでの活動は履歴書で映えそうに見えた。だから僕は入部した当初、週に5時間顔を出した。僕はレースを愛していたので、さらに5時間姿を現した。そして僕は残りの時間をつぎ込んだ。なぜなら運転したかったし、テクニカルリーダーになりたかったし、優勝したかったからだ。最高なチームの、最高なマシンの責任者としてマシンに乗り込みたかったのだ。

シーズンの途中になると、そのポジションの魅力は輝かしさをほとんど失っていた。不在のファカルティアドバイザー、落第寸前の成績、チームメイトとのいら立ちに満ちた口論との狭間で、優勝トロフィーにそれだけの価値がないことは分かっていた。シーズンの途中でチームを辞めることは問題外だった。僕は何があってもシーズンが終わるまでは留まっていただろう。しかし春が来たとき、僕は再びチームに週 10 時間以上いられる新しい熱意とモチベーションを見いだした。チームの中で僕は本当に楽しんでいて。夜遅くにはサッカー・フォースクエアで遊び、社交的な生活を送っていた。確かに社交的とは言ってもチームの中の話だ。しかし、思いやりのないマスタースケジュールの指示に従って仕事をするいら立ったチームメンバーが大量にいるグループより、協力して仕事をする気の合ったグループの方がよっぽど良かった。僕はより良いチームメンバー、より良い一人の人間になろうと努力した。マネージャーよりかは友人、もしくは少なくともフレンドリーなマネージャーに。なぜか、という質問に対する僕の答えは以前と全く同じだったが、答えのいくつかは重要性が変わっていた。

残念ながら、「なぜ」僕がレースカーを設計するのかということは、「どこで」それをやろうとするのか、「誰が」僕に給料を払うのか、ということと同じではなかった。春学期の半ばに、卒業を控えるチームメンバーのほとんどは大学卒業後に何をするかが決まっていた。クリスは大学院へ進学。カイルはイギリスでモータースポーツ工学の大学院学位を取得する予定だった。アンディはテキサス州でエレクトロニクス会社の職を得ていたので、卒業後すぐにチームを離れて行き、大会まで留まることすらなかった。しかし僕は、相変わらず求職中だった。1 カ月の間に米国の全ての主要なレースシリーズの全ての主要なレースチームと、二つの自動車メーカー、そして三つのレースカー部品サプライヤーに履歴書を送った。チャンスがあると思ったチームだけでなく、チャンスがほとんどなさそうなチームにも送った。返事はほぼなく、好意的な内容はゼ

口だった。僕は大学院に行きたくなかった。名前の中に「美容」とか入っていない学校にとって、僕の GPA が必要条件をはるかに下回っていたことを考慮すれば分かりやすいだろう。

いい面では、チームはもう教員の代表者無しの状況から脱していた。シディーク博士が僕らの新しいファカルティアドバイザーとなった。シーズンの途中まで新しいアドバイザーへの移行が難しいのではないかと少し心配していたが、彼は僕らが全てを比較的コントロールできていることが分かったようで、何かを強く主張することはなかった。彼はサインが必要な書類にサインし、僕らのミーティングに顔を出し、機会があれば僕らを助けてくれた。

その間、僕らはマシンを予定通りに完成させるために何時間も働き続けた。ボビーと僕で、大会で配布されるイベントプログラム用のマシンスペックを記入した。もちろん、本当の情報を記入する代わりにもっと楽しくなるようなことを考えた。

「『マホガニー材』ってのはどうだ？」ボビーはボディワークの欄に記入しながら言った。

「じゃあ『Wheelbase』のところは『Wheel-Lair』って書くか」と僕は笑いながら言った。

クリスや他のチームメンバーもコンピューターラボに入って来て提案した。僕らが書き終えたとき、リストには正しい情報は一つも書かれておらず、内容はこんなだった。

ブレーキ：ザ・ミダスタッチ

駆動方法：希望とインスピレーション

エンジン：ある

全長：ママに聞け

変速機：ミントフレッシュ

タイヤ：丸い

重量：僕らは誰も待ってない(We weight for no one)

ほとんどの大学生にとって春休みというのは、全てのハードワークから解放されてリラックスする期間だ。僕らにとっては、ほとんどの時間ではなく、全ての時間をマシンに費やせるチャンスだった。僕らは毎年その週にマシンに関する作業を長時間行った。昨年の春休みは確実に百時間以上作業していた。いつも春休みの終わりにシェイクダウンの締め切りを設定したため、同級生たちがカンクンで MTV スタイルのパーティーを楽しんでいる間、僕らは昼夜を問わず丸 1 週間必死になって製作しなければならなかった。締め切りを 1 週間前に設定すると中間試験の期間になってしまうから、ずっと悩まされている成績の向上にはつながらなかっただろう。逆に 1 週間後に設定すると、今度は全ての車両テストを行うだけの時間がなくなってしまう。楽観的に、2007 年度マシンの締め切りを春休みの大体 2 週間前に設定した。正確な日付まで設定しなかったが、春休みの 1 週間にもなると日曜日に落ち着いていった。具体的には、日曜の夜。それも深夜。こうすることによって、中間試験の勉強期間に 1 週間と、MTV スタイルのパーティーのために 1 週間を確保することができる。さらに嬉しいことに、締め切りのストレスを受けずにマシンの作業ができる。おそらく週 60 時間か 70 時間くらいの作業で済むだろう。

そして締め切りの日曜日、僕らは午前 11 時に工房へと集まり、やるべきことのリストを作り始めた。

「スタブシャフト。クリスはスタブシャフトに取り掛かっている？」僕はボビーに尋ねた。

「ああ、工作室の CNC フライスで作ってるよ」彼は答えた。

「素晴らしい」僕は言った。「ブレーキシステムは？」僕はカイルを見た。

「え？ ああ、ブレーキラインを取り付けてエア抜きしなきゃいけない」とカイルは言った。

「今日中にできる？」僕は尋ねた。

「多分」

「.....分かった」僕は答え以上の何かを期待して言った。

「自分の車ならできるだろうけど、もしみんなが周りをうろつくなら無理だろうね」カイルは少しだけ予防線を張るように付け加えた。

「まあいいや」リストの続きに戻った。「冷却系。いつもはデイブが冷却系をやっていたよな？ デイブはどこだ？」

みんなが黙った。

「デイブは見えないな.....何週間か前から」とボビーは言った。

「僕も見えない。デイブは一体どこだ？」僕は大声で尋ねる。「誰か最近彼を見てないか？」

「少なくとも1カ月間は見えない」とトレイが言った。

彼は背景に溶け込むのがとてもうまかったので、いなくなったことにも気付かなかった。

「うーん、多分辞めたと思うよ」リッキーが控えめに喋った。

「そりゃすごい。もうデイブはいないとさ」と僕は言った。

僕は深呼吸をして、スケジュールのことと、そしてずいぶん前に覚悟はしていたが、デイブ抜きでこのシーズンをやり遂げなければいけないことについて考えた。

「クソッ。デイブ抜きでやるしかない」と僕は断固として言い、リストの次の項目に進んだ。「リッキー、今日中にジョシュが電装系を完成できるように手伝ってもらえるか？」

僕はリストを読み終え、全員にやるべきことがあるのを確認した。切り上げようとしたとき、カイルが僕に聞いた。「ウイングは出来上がるのか？」

「うーん.....、多分。正直、走るだけなら要らないと思ってた。燃料システムの方を先に完成させないといけない。こっちは明らかに走らせるのに必要だ

から」。僕はウイングを完成できなかっただろうし、それは自分でも分かっていた。これまでのところ、ウイングはまあまあ順調に進んでいると思っていた。基本的には燃料システムの作業をしていたことを考えればなおさらだ。しかし、チームは言い訳とか「まあまあ順調」には興味がない。僕はチームのみんながそれぞれの仕事をやり遂げることを期待していたし、また彼らからしても、僕が自分の仕事をやり遂げると期待する権利を持っていた。ただウイングに関しては今週末に何かが起こるということではなかった。僕が知る限り、彼らは間に合わないことを分かっているし、それで良かったのだろう。「よし。じゃあ発射まで後……」僕は時計を見て頭の中で計算した。「残り 12 時間と 46 分。さあ、終わらせよう」

僕らは一日中作業し、リストにあるものを全て仕上げ、忘れていた細かい作業を思い出してはリストに追加していった。何台マシンを作っても、いつも細かい部分を忘れてしまう。最終的に僕らを殺すのは小さな部品だ。ナットやボルト、ホースの継手など、頭をよぎりもしなかったもの。

僕らは夕食を取り、リラックスするために少しだけサッカー・フォースクエアで遊んだ後、差し迫っている締め切りへと戻っていった。リッキーとクリスが燃料タンクの溶接を手伝い、僕は水を使った漏れテストのための装置を組み立てた。僕らは漏れ検査に水を使うのが好きだった。後で漏れ箇所を溶接するときに爆発させないで済むからだ。

先見の明があった。

残念ながら、タンクには約 5 カ所の漏れがあった。僕は漏れている部分にマーキングし、水を抜いた後、リッキーに溶接で隙間を埋めるようお願いした。これをさらに 2 回繰り返し燃料タンクを完全に密閉する。その後ラジエータでも同じことを行ったが、取り付けの際に漏れやすいことが分かった。もう深夜になろうというころ、僕は時計を見て、もう間に合わないということに気が付き始めた。やり忘れていた細かい作業が発覚したのが原因だ。そしてそれによっ

て別のやり忘れが次々と発覚していく。夜の 11 時 55 分、壁から時計を取り外し、針を 1 時間戻した。時計を壁に戻して僕はこう言った。「よし、じゃあ今から中部標準時ではなく山岳標準時を採用する」みんな笑った。「.....そして、残り 1 時間と 5 分だ」

僕らは配線を仕上げるためにさらに 1 時間を費やした。

「よし、試してみるか」リッキーはマルチメーターを見下ろしながら言った。ジョシュは手を伸ばしてボタンを押した。

「煙、煙、煙！」ウェズは必死に電装ボックスを指さした。ジョシュはすぐに回路の電源を落とした。

「大丈夫だ」と、僕は冷静に言った。「どんな車でも火災事故の一つくらいあるもんさ」

僕らは配線を修正し、作業を続けた。

フィルは時計を壁に戻し、大きな笑みを浮かべて言った。「今は太平洋標準時だ」

さらに 3 時間が経とうというころ、ハワイ標準時での締め切り 15 分前のところで、ようやくマシンの運転準備が整った。

「ボビー。マシンに乗って、駐車場を走って、そして家に帰ろう」とクリスが言った

ボビーはマシンに乗り、ヘルメットを装着し、エンジンを始動した。燃料マップが正しく調整されていなかったためエンジンは完全には吹け切らなかった。ただこれは逆に好都合だった。なぜならディファレンシャルのリヤブレースが欠けていて、激しい加速を勧められる状態ではなかったからだ。ボビーは慎重に駐車場内を走り回った。そして午前 4 時 55 分。僕らは、疲れてはいたが心の底からの歓声を上げた。満足のいく走行とは言えず、時計は 5 時間遅れていて、工房はまるでサッカーファンの暴動に飛行機が衝突したような状態になってはいたが、僕らはやり遂げたのだ。4 時間後に始まる中間試験週間に備

えるため僕らは帰路に着いた。そして、レースカーが眠気に勝ったように、眠気は勉強に勝った。優先順位が必要だ。

最初のドライブから数週間たっても僕らはテストとチューニングを続けていたが、いまだに新しいマシンは何マイルも走らせるには十分な状態ではなかった。しかし、各動的イベントのドライバーを選ぶときが来てしまったので、代わりに 2006 年度マシンを取り出した。ドライバーのトレーニングは極めて重要なため、ドライバーの選出は慎重に行いたかった。しかももうすぐ完成車テストを行う予定だったので、どのイベントのテストをするにしろ、それぞれのテストに最も適したドライバーで臨みたかった。僕らはさまざまなドライビングイベントを企画して、マシンに多くの時間を割いていた全員がトライアウトに参加できるようにした。そして最速の人間がその役を得ることができる。それぞれのイベントで誰が運転することになるのかは各々考えがあっただろうが、全員にトライしてもらうのはいいアイデアだった。チームの士気にいい影響を与えるという理由もあるが、それだけではなく、誰も知らない才能に驚かされることにもつながったし、またそれを知る方法は一つしかなかった。全員がちょうど大会本番のようにスキッドパッドとアクセラレーションを 2 回ずつ走行した。その結果、リッキーとクリスがスキッドパッドを走ることであり、ボビーとリッキーがアクセラレーションを走るようになった。残りの二つのイベント、オートクロスとエンデュランスは基本的にほぼ同じで、オートクロスは 1 周ずつを、エンデュランスは 10 周ずつを 2 人のドライバーそれぞれが走行する。そのため全員に 10 周を走行させた。最初のラップがオートクロスのタイムとしてカウントされ、10 週の合計タイムがエンデュランスのタイムとしてカウントされた。10 週のタイムはクリスと僕でほぼ同じだったが、彼はコーンと接触して 2 秒のペナルティが追加されたため僕との差が広がった。オートクロスとエンデュランスを走るのは、カイルと僕に決定した。

最終調整

「偉業は常に高い志のもとで達成される」——チャールズ・ケタリング

2007 年度マシンの見た目は今まで作った中で最高だった。僕らはしばらくの間、カラーリングについて考えたり議論したりして過ごした。しかし、ほとんどの車はサーキットを速く走ることに特化しているもので、美観は副次的なものに過ぎなかった。主要なレーシングチームは何百万ドルもの資金と何百万時間もの時間を車の設計につぎ込んでいる。そのため全ての部品一つ一つが車を速く走らせる能力を持っていると言えるだろう。塗装でさえ、車上で宣伝されている製品を販売するために特別に注意深く設計されている。しかし、ある特定のタスクを遂行するために払った全ての技術的な努力の結果、最終的に芸術作品のような見た目になるのだ。アートはしばしば、機能を持たず、美的価値しかないものと考えられている。美学のための美学的なアプローチとは正反対に機能を究極的に突き詰めていくと、深く本質的に美しい何かに行き着くと信じている。それが機能的であるからというだけでなく、機能的であるからこそ存在する美しさが美学的価値を超越するのだ。

今年はその理想に少し近づいた。ウイングは途方もなく素晴らしく、それにチームメンバーがもたらしてくれた細部のレベルが、マシンのあらゆる部分に設計意図を追加するのに役立った。大会とその行き返りの輸送で壊れてしまうまで、数週間このマシンを楽しんだ。過去を振り返ると、僕らのチームはシェイクダウン予定日をかなり過ぎてからマシンを完成させようとしていた。いつもは期末試験週間中ずっと作業し、デトロイトへ出発する前日も徹夜し、大会

へ向かう途中の駐車場でもいくつかの修正を加える。数年前の僕らのチームがそうだったように、大会の最初の2日間をずっとパドックで過ごしてしまうようなチームがいくつかいる。この数年間で僕らが学んだ最も重要なことの一つは、多くのテストを行ったそこそこの車の方が、全く走らない素晴らしい車よりはるかに優れているということだ。

走行テストのときはカイルの両親から多くの助けをもらった。レース用のテスト機器をいくつか使わせてくれたのだ。僕らの予算は限られていたし、シーズンの終わりに近づくにつれてそれは特に厳しくなったので、設備を借りられたことは大きな助けになった。

自動車レースにおいてはテストが非常に重要だ。自分の想像通り、あるいはコンピューターの計算通りに車が動作してくれることはまずない。エンジニアリングにおいてシミュレーション結果を物理的な実験で裏付けることは、運転中に寝てはならないのと同じくらい当たり前のことだ。工学部オフィスのトイレに入ると壁にはこんな言葉が書かれている。「シミュレーション結果と実験結果を比較する前にまず手を洗え」。

部品のいくつかは締め切りに間に合わせるために「まあまあいい」くらいの状態で急いで作られたが、時間があるときに後で作り直される予定だった。サスペンション部品はシャシー全体の完成日に間に合わせるため鋼材で製作したが、後でチタンで作り直した。これは多くの余計な仕事が発生するように見えるが、マシンを運転する時間は非常に貴重であり、追加の製作時間を費やすだけの価値があった。

今年はプッシュバーの製作に力を入れすぎてしまうくらい時間があつた。プッシュバーとはマシンを後ろから押して動かせるようにする器具のことで、どのチームにも求められる。数年前、ルール委員会はいくつかの機能要件を課した。二人で利用できる（使用する）こと、そして押すだけでなく引くこともできること。僕らはさらなる複雑さが必要だと考えた。僕らのマシンが接近して

いることを周囲に知らせるため、自転車のベルを追加してはどうかという提案から始まった。ベルを選びながら、さらに追加の部品が必要だとウェズと僕は判断したので、自転車コーナーからピンクと紫のキラキラしたタッセル付きのハンドルバーグリップとピンクのバスケットを加えた。その後、カイル、リッキーと共にホビーストアに向かい、バスケット用の造花、テディベア、紫色のおもちゃの風車を選んだ。これは途方もなくバカげていた。まさにエンジニアリングの勝利だった。

前学期の期末試験は楽勝だった。これまでの4年間、僕らは土壇場になってマシンを組み立てようとし、最後の瞬間まで期末試験のための詰め込み勉強をし、それからまたマシンに戻って眠らずに作業をしようとしていた。数年前、クリスは一晩中マシンで作業した後、期末試験の一つに向かった。そしてトーマス・ジェファースン大統領に関する質問に20分も無我夢中で答えるうちに、その学期はアメリカ史の授業をとっていないことに気付いた。彼は2時間も早く試験室に着いていたのだ。

大会前の最後の公式ミーティングは期末試験週間の火曜日だった。マシンに関する作業はかなり進んでいたため、今回の試験週間はいつもよりのんびりと過ごせるだろう。勉強はともかく、少なくともレースカー側は。ミーティングは任意なので試験に集中すべきだとみんなに言った。それでも、ほとんどのメンバーが来てくれた。

「イベントプログラムの作成責任者からメールをもらった」僕は演壇の後ろに立ってチームに言った。「僕らが追加したマシンスペックを面白がっていない人もいた。どうやら、マホガニー材のボディも、ミントフレッシュなシフターも信じてないようだ」

「印刷してくれないのか」ボビーが尋ねた。

「印刷しないどころか、コピーをファカルティアドバイザーに送るつもりだよ」と答えた。「でもシディーが気にするとは思わない。書いた内容は

攻撃的でもない。正直なところ、彼らがなぜあんなにいら立っているのか分からない」

「おそらく『全長』の項目に書いた『ママに聞け』のところだろうな」とリッキーは推測した。

カイルは「ああ、あれは抜いておくべきだったな」と付け加えた。

僕は肩をすくめ、次の話題へと移った。「知っての通り、今デザインイベントのポスターボードを作ってる。知らない人のために説明すると、ポスターボードというのはデザインイベントで重要なグラフやチャートを審査員に見せる手っ取り早い方法の一つだ。これがあれば、テストデータを表示するときにノートやコンピューターにある大量のファイルを探す必要はない。また、質問されることが分かっている内容をあらかじめ用意しておくのもいいと思う」。僕は演壇の後ろに手を伸ばし、自分で作ったエアロダイナミクスのポスターボードを手を取った。僕は中学校のサイエンスフェアと同じやり方を採用した。これは買ってきた発泡ボードに、グラフやチャートを画用紙用フレームに入れて貼り付けるやり方だ。「で、これがエアロ用に作ったポスターだ。一部のチームのような光沢仕上げの本格的なプリントポスターじゃない。でもみんな知っているように、コーネル大やペンシルベニア州立大のようなデザイン審査に強いチームでもこのアプローチを取るところはある。基本的に、みんなが期末試験で忙しいことは分かっているんで、テストが終わるまで待って、その後グラフとチャートを作ってくれたら、後のことは僕らでやる……、このエルマーズののりと安全ばさみを使ってね。みんなそれでいいか？」

「すごくいいと思うぞ」とカイルは言った。

「分かってる」と僕は答えた。「酔っぱらった大学 3 年生レベルの美的センスしか持ってない僕がやるのも変な話だけど」

「あとアンディは大会には来ない。就職したからね」僕は皮肉と嫌悪感を込めて言った。「だからアンディ、もしよろしければチームを離れる前にデザイ

ンボード向けの資料をご一緒に用意していただけますか？ ああ、カイルとトレイも一緒に中身をチェックして欲しい。デザインイベントのときは二人に対応してもらう予定だからね」

「特に何か期待している内容とかはある？」 アンディは尋ねた

「いや、特に。審査員が見たいと思うものを考えて欲しいかな」 アンディのために具体的なことを考えてみたのだが、サスペンションについてはよく分からなかった。「これは君が設計したシステムだ。それにデザイン審査は経験があるだろうから、それを踏まえて有意義なものにしてもらえればいい。あとコンピューター解析は物理的なテストによる裏付けがなければ、あまり効果的ではない。自分のシステムの基本要素が考え抜かれたものであるということを明確に示すものが欲しい」

次に進む前に他の質問を少しだけ中断した。「あと覚えている人もいると思うけど、デザインイベント関連の賞をいくつか応募させてもらった。だから、プレゼンしてもらう人もいる」

「何件申し込んだの？」 アンディは尋ねた。

「うーん……思いつくのは全部応募した。パワートレイン賞、ボディデザイン賞、複合材料賞、あと今年はデザインレポート賞にも応募している。両方の大会で全部の賞に応募したよ」

「いいね」 カイルは笑顔で言った。

「そうだろ？」 僕は肩をすくめるように言った。「いくつかは結構見込みがあると思う。どの賞にも賞金が出るし、どんなときもチームにはお金が必要だ。それにどんなときも僕には履歴書に掛ける功績が必要だ。あとクリス、パワートレイン・システム賞に出席しなきゃ駄目だよ。もしまたウィスコンシン大に次いで2位になったら本当に怒るからね」

ボビーが大学名を訂正してくれた。「ファッキン・ウィスコンシンだろ」

「そうだ。ファッキン・ウィスコンシン。あと異論がなければ、マシンの広

告スペースを eBay に出品しようと思う。ウイングにまだスペースがあるから、そこを埋める過程でいくらかお金を稼げると思ってね」

「どれくらいの金額を期待してる？」クリスは真剣な声で尋ねた。

「それほど多くない。でも eBay で広告スペースを売りに出すのは面白いアイデアだと思う。これは例えば、もしテキサス大が広告スペースをオークションに出したら、『テキサスはクソ』っていうステッカーを貼るためにみんな 100 ドル出してくれるか？ って意味でもある」

ボビーはこう言った。「ということは、テキサス大が『オクラホマ大はクソ』っていうステッカーを貼ることもできるというわけだ」

「ああ、それでもいい。金銭的な補償さえしてくれれば。それじゃあ.....異議はある？」

「俺らが入札してもいいの？」リッキーが尋ねた。

「ああ、問題ない」

「よし、じゃあリッキーステッカー用に 20 ドルを取っておこう」

「いいね、でも僕はマットステッカー用に 21 ドル持ってるからね。これで分かったら？ 現在価格は 21 ドルまで上がった。でもオークションは始まってない」

リッキーは 2 本指を立ててやり返す。「じゃあ 22 ドルだ」

僕はリッキーをにらみつけ言った。「これをインターネットで解決する」僕はマシンの話題へと移した。「さて、やるべきことがいくつか残ってる.....」

マシンに関して終わらせないといけないもののリストを見たが、大きなものはなく、より完璧に近づけるためのちょっとしたものばかりだった。ボビーはみんなに、システムデザインレポートの提出期限が大会前までということを再度アナウンスしてミーティングを終えた。システムデザインレポートはチーム内部向けの設計書としてまとめられるものだ。これは年々知識を伝達するための主な手段となる 200 ページの遺産だった。またこれはデザインイベントにとっ

ても重要なことだった。審査員が年ごとにどうやって情報を伝達しているかを質問をするのはよくあることだったためだ。

ボビーがミーティングを締めくくった後、こう追加した。「ああそうだ、イベント全種目を走る練習会を今週土曜日に開催する。もし時間があれば遠慮なく来て手伝って欲しい。もちろんドライバーは全員来ること」

「あと、実はもう一つ」みんなが出ていこうとしているときに僕は発表した。「年の初めに、この『マッコイさんの星と車の壁』を始めて、みんなたくさんの星と車を集めてくれた。僕は以前、これで勝った人には大きなクッキーをあげると言った。それで、小学校みたいで、ガキっぽくてダサくて、小学校みたいだけど.....、みんなが勝者だ！」そう言って演壇の後ろから紙皿とナプキン、そして巨大なクッキーを引っ張り出すと、不平交じりのみんなの笑い声が聞こえてきた。

僕は笑顔で言った。「ああ、分かってるよ。全員分あるはずだから、さあみんな、食べてくれ！」

僕らの練習イベントは、マシンのどこかに致命的な欠陥がないことを確認するためだけのものだった。走行タイムを記録したものの、前回大会のタイムと比較するには路面があまりにも違いすぎた。二つのよく似たアスファルトの路面がラップタイムに与える影響は驚くほど大きいものだ。冷却システムに関しては少し心配があった。ウイングがラジエータへの導風をどの程度妨げるか分からなかったのだ。そこで僕らは、高度に制御された「実際に運転してどうなるか見てみよう法」を選んだ。エンデュランスの練習中、エンジン水温は許容温度の 220°F (104°C) を超えることはなかった。デトロイトはもっと寒いだろうから、そこでは問題にならないだろう。カリフォルニアはもっと暑いだろうから、大会までのもっと暑い日に再テストしなければならないだろう。

テストの後、僕らはデトロイトへの旅に向けマシンを準備した。マシンに一

枚のステッカーを追加した。ウェズがインターネットフォーラムを通じて知り合った人物が eBay でステッカースペースを落札したのだ。そして書いてほしいと言った内容は、「It's all about Chuck!」だった。

4 日後、僕らは全ての工具箱、追加の材料、スペアパーツ、必要と思われる全てのもの、そして必要ないだろうと確信していたいくつかのものと共に、マシンをトレーラーに積み込んだ。大会の週は常に驚きに満ちているものだが、僕らはそれらに対して全く備えていなかった。

僕らは一晩中ずっと荷造りをし、ほとんどのメンバーは午前 1 時までそこにいた。僕は翌朝 5 時に工房へ到着し、出発の準備を整えた。僕はとても疲れていた。今週はずっとこんな感じなんだろうということは分かっていた。誰かがドーナツでも持ってきてくれることを期待したが、そんな幸運はなかった。トレーラーはほぼ一杯で、もう出発できる状態だったが、向かうためにはもう少し荷物を積み込む必要があった。リッキーは母親のミニバンを借りて来ていて、リヤハッチを開けた状態で正面に駐車していた。僕は自分のバックパックを後部座席に押し込んだ。

「予備パーツと材料は全部載せた？」トレイは後ろから近づきながら言った。

トレイは前の晩も工房にいて、僕が出たときにもまだそこにいた。

「もう 2、3 個持って行かないと。昨夜はいつ帰ったの？」

「帰ってない。まあ、家からいろいろ持ってくるために 30 分くらい前に一度帰ったけど、まだ寝てないよ」

「運転はしない？」僕は尋ねた。

「ああ、しない。ボビーと一緒に乗っていく」

「いいことだ。前回はみんな君に殺されかけた」と僕は笑顔で言った。

2 年前、トレイは徹夜で荷物を積み込んでから運転し、運転中にほんの少し眠ってしまった。オクラホマシティを離れるちょうどそのときだった。読書に

没頭していたら、車が急に右へと揺れて僕は叩きつけられた。そしたらトレイが息を切らしながらこう言った。「ヤバい！ いま寝てた！」

当時はあまり気にしていなかったが、大会に出場したとき、モンタナ州立大チームのトレーラーがコントロールを失ってトラックと衝突し3人の学生が死亡する事故があった。僕らが参加していたようなレースであっても、競技で最も危険なのは運転中だということを肅然と思い出させる出来事だった。トレーラーを運転してくれていたフィルは安全性を重視していたから、制限速度を超えないだろうと当てにしていた。トレーラーの後ろについて時速 65 マイルで運転するのはイライラしたが、彼の安全運転には感謝した。

僕は最後の荷物を積み込むために工房へと入った。壊れやすいカーボンファイバー製のウイングサポートを拾い上げ、ポスターボードと共にレッカー車の後部座席の後ろ側に注意深く配置した。

「フィル、トラックの後部座席に誰が座ってるか知ってる？」と僕は尋ねた。

「分からないな。多分誰もいないんじゃないか」

「分かった。じゃあもし誰かが乗るなら、ガラスのように繊細なウイングサポートがシートの後ろに置いてあるってことを知らせてほしい」

彼はうなずいた。

「頼むよ。シートを後ろに傾けちゃ駄目だ。ほんの少しも」

彼はドアを開け、クーラーボックスを座席の横に置いた。「よし、これで誰もここには座らない」彼はいつものような笑い声で言った。

「それなら大丈夫だ」

僕らは全ての荷物をしっかり固定し、スケジュール通りに出発した。運転している間に、リッキーはラジオのビースティー・ボーイズの曲に合わせて音量を上げ、みんなで一緒に歌った。

「No! Sleep! Till Brooklyn!……No! Sleep! Till Brooklyn!」

2 時間後、リッキーを除いてバンの全員が眠った。

デトロイト

「このゲームで何かを成し遂げるためには、大事故の一手手前まで近づく覚悟が必要だ」——スターリング・モス

デトロイトは.....憂鬱だ。まるで太陽が全く出ないかのように見えた。雲も全くなかったのにも関わらずだ。灰色の悲しいドームが街の全てを覆っているようだった。僕らが到着するのはいつも春の終わり頃だったが、5月を過ぎて雨季になるともっと顕著になるのだろう。もしかすると夏や秋の方が良かっただろうか？ これは現地に到着するまで全く考えていなかったことの一つだ。だから大会会場まで 30 マイルのところでミニバンの後部座席で目を覚ましたとき、会場がすぐ近くだという興奮はすぐに消え、不穏な天気の 1 週間が差し迫っていることに打ちひしがれた。

僕らはパドックへ車を入れてすぐに自分たちのエリアを設営した。改造した馬用トレーラーの側面から張り出した頑丈な日よけフレームに、2 枚のブルーシートを掛けて覆って作った。2 枚の間から雨が漏れてこないように、トレーラーの上部でブルーシート同士をテープで留める必要があった。ビバリー・ヒルトンホテルほどではなかったが、なかなかうまくいった。

パドックエリアは、両側に鬱蒼とした木々が立ち並ぶ大きな砂利の駐車場にあった。他の二つの側面は広大な競技エリアに面していた。そこには技術車検と静的イベントを行う金属製のプレハブが数カ所と、数千個のオレンジコーンによってできた動的イベント用コースがある大きな舗装エリアがあった。

パドックを設置した後、チームが最初しなければならないことの一つが技術車検である。事実、マシンは技術車検の最初の段階を完了するまでエンジンを始動することさえできない。どのチームにも車検をクリアするのにいつも十分な時間が与えられるが、僕らは堅実な計画を立てた。荷解きを終える前にあらかじめマシンと代表者二人を待機列へ並ばせたのだ。僕はトレーラーに留まりあらゆる準備を手伝った。

トレーラーを小さな工房として使用できるようにツールボックスを並べなおした。そこに小さなワークベンチを置いて、後ろの壁にペグボードを取り付けておいた。このワークベンチはすぐにガラクタで散らかってしまい、ワークベンチとしては役に立たなくなった。そしてペグボードは一度も使われることはなかった。僕らはツールボックスをトレーラーの両サイドに配置し、他のものは全てグースネックの中か、その下の脇に保管した。こうすることによって、夜でも苦労せずにマシンを運び入れられる十分な余裕ができた。

「技術車検待ちのレースに勝ったぞ！ 俺たちが最初だ」カイルは人差し指を立て、ナンバーワンであることを誇らしげにパドックに向かって歩いてきた。

ウェズが答える。「残念ですけど、それは得点になりませんよ」

その後の数時間、他のチームのマシンを見て回った。このときが、この週で唯一リラックスできた時間だった。みんなが笑顔でパドックとパドックを行き交い、マシンの写真を撮り、新しいデザインについて質問した。自分たちのマシンの写真を撮られて気にするような人は誰もいなかったが、写真を撮っても大丈夫かみんな聞いたものだった。僕らはできるだけ多くの写真を収集するため、カメラマンを二人指名しておいた。これによって来年の車両設計において有益な情報を得ることができる。部品を設計するときに去年の写真を見て、全ての設計の中から最もいい側面を見つけることができる。そこには実に巧妙なアイデアがいくつもあり、僕らはできるだけ多くのアイデアを取り入れた。時間が進むにつれて技術車検の待機列が長くなってきたため、撮影係と質問係は

そこへと移動していった。

ミズーリ大学ローラ校のパドックを通り過ぎようとしたとき、彼らのエアロダイナミクス担当の一人に呼び止められた。彼らは僕ら以外にマシンハウイングを装着した他の5校かそこらの内の一つだった。

「リヤウイングのエンドプレートがリヤタイヤからはみ出しているようだ」と彼は言った。「それルール違反だから多分技術車検で指摘されるぞ」

「ああ、このウイングは Hoosier タイヤを使っていたときに設計したものだからね。Goodyear のタイヤに変えて幅が小さくなったんだ。たった 0.5 インチだから、何とかなるかもしれない」

彼は首を横に振った。「あり得ない。検査員は毎年チェックするからな。最初にチェックする項目の一つだ」

「うーん、のこぎりとハサミがあれば数分で修正できるから、やってみようかな。教えてくれてありがとう」

「ああ、問題ない。ところで Chuck って誰だ？」と彼は尋ねた。

「何？」僕は困惑して尋ねた。

「君らのマシンに『It's all about Chuck』というステッカーが貼ってあるだろ」

「ああ、よく分からない。僕らが出したオークションのページにコメントしてくれた誰かで、誰も彼のことを知らないんだ。でも彼は 120 ドルを持っていたから、『It's all about Chuck』って書いたんだ」

「そりゃあいい。では頑張って。ところで、いいプッシュバーだな！」彼は歩き去りながら言った。

マシンが車検の第二段階に入る間に、僕は車検の待機列に戻った。車検の第一段階は、必要な耐火スーツ、手袋、ヘルメット、および 2 本の消火器を確認だった。第二段階は楽しい段階だ。2、3 人の検査員がルールブックを片手にマシンの各部をくまなくチェックする。この段階は最も背の高いドライバーに

よる脱出テストから始まる。僕らのチームではカイルが一番背が高かったため、彼が5秒以内にマシンから脱出できるかどうかを確認した。ドライバーはスーツとヘルメットを着用し、ベルトのバックルも締めた状態から脱出を開始して、5秒以内に両足を地面に揃える必要があった。カイルと僕が計画した作戦はこうだ。彼がステアリングホイールを外し、僕に向かって投げ、そして僕は邪魔にならないように逃げる。ステアリングホイールを傷つけたくはなかったが、丁寧に扱って貴重な数秒を無駄にしたくもなかった。

「準備はいいか？」検査員がストップウォッチを握りしめて尋ねた。

カイルはうなずいた。

「Go!」

一秒もしないうちにステアリングホイールが飛んできた。僕はそれを後ずさりしながら空中でキャッチした。カイルはすぐに僕がいた場所に立っていた。

「おお、3.5秒だ」検査員は驚いて言った。「コース上でも速いことを願っているよ」

検査員はどんなマシンでも車検の不適合箇所を必ず二つは指摘すると信じていたので、彼らが見つけやすいように意図的に不適合箇所を仕組んでおき、対策部品をトレーラーに準備しておいた。彼らがそれらを見つけ、僕らは修正用パーツを「製作」するためにチームメンバーをトレーラーへ送って、それで解決だ。

僕はこの二つの車検不具合作戦を信用していなかった。彼らは徹底的にチェックすると思っていたし、そうあるべきだった。安全性と速度のバランスのことを考えると、僕らは非常に危険なキャンディーストアにいる監視されていない子供のようにになってしまうからだ。それに、技術車検の間に二つのことを「修正」しても害があるわけではなかった。

検査員が僕らの素晴らしいプッシュバーを楽しんで満足してくれれば、作戦はうまくいくはずだった。しかし残念ながら、彼らは僕らのウイングのエンド

プレートがルールに準拠していないことに気付いてしまった。エンドプレートは空力装置の一部ではなく、そのルールの対象外であると主張しようとしたが、二言と言えずに検査員の言葉で遮られた。

「議論の余地はない。修正するか取り外すかしなさい」

技術車検の責任者であるマイク・ロイスは全ての空力部品を自らチェックしていた。彼はみんなに公平で人柄も良かったが、技術車検の責任者という立場が好かれるのを難しくしていた。ワッシャーを端に取り付けたロープを使って、それぞれのエンドプレートにトリミングが必要な部分の線を引いた。僕はマシンからウイングを取り外し、検査員が残りの部分をチェックしている間に、修理のためにパドックへと戻った。僕は数分間でエンドプレート修理し、再び戻った。僕はロイスさんを見つけ、新しい修正箇所について彼の承認を得た。

ウェズとブレットがプッシュバーをマシンに取り付けたとき、ロイスさんはこう言った。「おお、素晴らしいね！」

カンザス大の友人の一人がブースの向こうから言った。「ベルを鳴らせ！」

ウェズがベルのレバーを押すと、「チリン、チリン」と音が鳴り、みんなを楽しませた。

カイルの両親であるリーとミッシェルは飛行機で駆けつけてくれて、最初の技術車検から戻ったときにはトレーラーにいた。過去数年間、二人は大会に来てくれて、常に多大な協力をしてくれた。彼らは僕らにトランシーバーを貸してくれたので、伝令として誰かが一日中走り回らなくても他のメンバーとコミュニケーションを取ることができた。

最初の車検を通過すると、チルト、ブレーキ、騒音のテストがある。チルトテストはマシンを横に傾ける大きな金属製の装置で行われる。45 度傾けたときに、マシンからどんな漏れもあってはいけなない。60 度傾けたときに、マシンが転倒してはいけなない。60 度に傾いたマシンを見るのはかなり壮観だ。フ

ォード・エクスプローラーで試してはいけない。このテストは最も背の高いドライバーがマシンに乗っている必要があったが、カイルはこのテストを本当に嫌がっていた。彼が最初に参加した年、タイヤがチルトテーブルから滑り落ち、マシンが彼を乗せたまま地面に落ちそうになったからだ。それ以来、ボードを持ち運び、ホイールの横にあるテーブルに置いて、不幸な事態を防ぐようになった。

技術検査の各ラウンドの後、チームは各技術車検に合格したことを示すステッカーを手に入れる。三つのステッカーがあり、一つは最初の技術車検、もう一つはチルトテスト、そして最後の一つは騒音およびブレーキテスト用になっている。僕らは二つを手に入れたので、残りは一つとなった。

ブレーキテストでは、加速し、短い距離でブレーキをかけた際に、四つのホイール全てがロックするかどうかを確認する。また騒音テストは、排気口から0.5メートルのところで排気騒音レベルを検査する。最大許容値は110デシベルだ。110デシベルはコンサートや騒々しいナイトクラブぐらいだが、マシンから離れるとノイズレベルは大幅に低下する。

最初は騒音テストからだった。僕らも騒音テスト用の計測器を持っていたが、それが正確であるか、そして再現性があるかどうかは確認していなかった。

最初の騒音テストで合格できなかったことでそれが判明した。マシンをパドックに戻しマフラーを改造しなければならなくなった。

「どれくらい音が大きかった？」僕は尋ねた。

「114デシベル」ボビーは僕を見ずに言った。

僕はぼうぜんとして立ち止まり、彼が「冗談だよ」と言ってくれるをしばらく待ってから言った。「冗談だろ！？」

「冗談じゃない」

「くそったれ、騒音値を下げるためには本気で修正いないといけない」と僕は頭を横に振って言った。デシベルスケールは対数であるため、110と114の

差は106と110の差よりもはるかに大きい。言い換えれば、長い道のりになるということだ。

パドックに戻り、マフラーを分解して、パイプを少し延長して新しい消音材を追加した。騒音テストのエリアに戻って、ボビーとカイルとリッキーはもう一度テストした。騒音に合格した場合、同じエリアでそのままブレーキテストを行う。短時間のテストの後、元来た道に帰って行く彼らの姿が見えた。

「114だ」ボビーは言った。

今日は長い1日になりそうだ。

「でも俺たちのデシベルメーターは校正できた」クリスは安物のRadio Shack製デシベルメーターを持って付け加えた。

ウェズとブレットは日よけの下へとマシンを押し、マフラーを外し始めた。僕は排気部品が入った赤い入れ物を引き出し、トレーラーから持ち出した。

「でかいマフラーを試そうぜ」僕は言った。

「パワーはどうなるんだ？」カイルが言った。

「ダウンする」僕は事務的に言った。

「走らなければどれだけパワーがあっても意味がない」とリッキーは明らかなことを指摘した。

「じゃあ、もしパワーの出ないマフラーを使わなくていいなら……」とカイルは主張し始めた。

リッキーが遮る。「分かってる。分かってるけど、車検をパスする必要があるって言うだけだ」

「このマフラーは使えないな。排気管がサスペンションに近くなりすぎる」と僕は言った。

「出口を伸ばせないか？」クリスは尋ねた。

「延長する部品があればね」僕は答えた。「古いマフラーは中身を全て詰め替えてしまえば……」

「今やってる」リッキーが遮った。

「ああ、分かってる」僕はうなずいた。「最後まで聞いてくれ。全部詰め直して、共鳴室を無くす。どのチームも完全に充填されたマフラーを使ってるし、それでうまく機能してる。まあ、大体はだけど」

リーは身を乗り出して言った。「もし排気の延長部品が必要なら手に入れてくるぞ」

「頼む。大きなマフラーが必要になると思う」とカイルは言った。

僕は肩をすくめた。「大きいマフラー用の部品を手に入れている間に、ここで何かできることがあるはずだ」

カイルとクリスはリーに集めてもらう部品リストを作成し、その間にリッキーと僕で拡張コアをつなぎ合わせた。数分後、そのコアを装着してテストした。メーターは 113 を示した。少なくとも僕らは正しい方向に進んでいるようだ。誰かがより多くの音を吸収するために消音材を少なくすることを提案したので、マフラーを外し、リベットを開け、消音材を軽く詰めて元に戻した。115。間違った方向だった。明らかな方法は、より多くの消音材を使用して密度を上げることだった。そのため、マフラーを再び分解し、できるだけきつく詰め込んだ。僕らはマフラーを完全にパッキングするのに十分な消音材がないことに気付いたので、消音材をコアの周りにしっかりと巻き付けてから、全体にステンレスの鋼線を巻き付けてパッキングした。再び試験をすると、113 をわずかに下回った。

「なあ、カイル」僕は言った。「お父さんに電話して消音材をもっと持ってきてもらうように頼んでくれないか？」

「どれくらい？」

「ええと.....いっぱい」

僕らが消音材を詰めたり戻したりしている間、フィルは排気系に入らないような設計の部品を使って、チャンバーとカゴを追加した別のマフラーを作って

いた。僕らは必死になっていた。

リッキーが提案した。「エンジンから出てくる音を、ゴム製のフロアパッドで吸収させたらどうだろう。それがうまくいくかどうか見てみよう」

「あのさ……どうやってそれでコースを走るつもり？」僕は理屈っぽく尋ねた。

「知らないよ。機能するかどうか確認するだけだ」彼は言い返した。「後で分かるさ。俺たちに必要なのは……」

僕は遮って言った。「分かった、分かった。いいよ、やろう」僕は無意味な議論を避けようとしていたが、まだ議論するようなトーンで話していた。そして、また僕は議論を始めてしまった。僕はイライラしていた。

エンジン自体から出る音を減衰させたことで少しは効果があったが、十分ではなかった。フィルのマフラーを試して、点火タイミングを遅らせたことも少し効果があった。リーが排気管の延長部品と追加の消音材を持って帰ってきた。古いマフラーを分解して新しい消音材を詰めた。その結果、112まで下がった。僕らは出力への影響を最小に留めようとしたが、それは急速に難しくなってきた。

カイルはイライラして言った。「分からん。カンザス大は全部パッキングされたマフラーで、しかも俺たちと同じエンジンを使っているのになんで108なんだ」

僕は落胆して答えた。「確かにそうだけど、でも彼らは排気レイアウトが違う。僕らのマシンは4-1集合で、彼らは4-2-1集合になっている」

「知ってると思うが」リッキーは言った。「彼らは去年のマシンを会場に持ってきている。旧マシンの排気ヘッダーは俺たちのマシンにも付けられるだろう」

「そうだけど……」僕は話し始めようとしたが口を止めた。最初は気が進まなかったが、その後、時間が足りないことをどうするかを考えた。次の選択肢

はマフラーを2個使うことだったが、これにより重量とパッケージングの悪夢が始まってしまう。僕は続けた。「.....君が賛成なら、僕も賛成だ」

リッキーは肩をすくめて言った。「やろう」

僕がいくつかの工具をつかむと、ボビーは言った。「みんな、あと15分でデザイン審査だ。準備に取り掛かってくれ」

「ああ」僕は自分の携帯の時計を見て言った。「よし、じゃあマフラーを戻してマシンを完全な状態にしよう。その方が簡単で見た目もまともだ」

僕はポスターボードといくつかのものを持ってデザインエリアに向かった。

ボードのセットアップが終わったちょうどそのとき、ウェズとブレットがマシンを押して審査会場に入ってきた。予備デザイン審査は、審査員に対してマシンに問題がないことと、自分たちが話している内容について自分たち自身が多少は知っていることを示す機会である。毎年この機会を利用して審査員にフィードバックやアドバイスを求めている。彼らみんなが共通して言ったこととして、マシンと主要システムの設計者について簡単な紹介をするべき、というものがあった。このアドバイスを受けて、オクラホマ大チームの基本的な情報と、誰が誰であるかを伝えるために、スピーチの準備と練習をしてきた。

審査員がマシンに向かって歩いてきた。僕らは準備万端だ。

「さて、僕らはオクラホマ大学です。これは.....」

審査員の一人、おそらくヘッドジャッジが僕を遮った。「審査を次のように進めます。私たちはペアを組んで、マシンのシステムについてそれぞれ質問します。エンジンの担当者は誰ですか？」

彼はシステムのリストを読み上げ、チームメンバーは必要に応じて前に出た。全員の確認が終わった後、彼は続けた。「エアロダイナミクスから始めて、次にエンジンの話をします。では、始めましょう」

彼は僕のところに歩いてきて、「圧力中心はどこですか？」と尋ねた。

簡単な質問だ。「最初は重心の前方約 3 インチで、後方約 1 インチまで移動します——」

「それをテストしましたか？」

「はい、風洞でのウイングの試験結果があり——」

「では、完全な車両でのテストはしなかったのですか？」

「行っていません。車両全体の CFD 解析を行いました、風洞試験は単体で行い——」

僕が話している間、彼はずっと首を横に振っていた。そしてまた遮るように彼は、「では、このウイングの取り付け位置をどうやって選んだんですか？」とリヤウイングを指さしながら尋ねた。

僕は無言になり、なぜ彼がそう尋ねたのかと考えた。何も思いつかなかった、ので、正直に答えた。「パッケージのためです。簡単に搭載できる場所なので——」

「リヤウイングの取り付け位置の効果を確認するテストは行わなかったのですか？」

説明を中断される前に言いきりたかったため、僕は急いで答えた。「はい、ウイング自体はルールが許す限り後ろにあります。リヤタイヤの後端までです」

「僕はウイングについて話しているのではなく、ウイングの取り付け位置について話しているのです。なぜあなたはもっと後ろに取り付けなかったのですか？」

僕はもう一度考えた。なぜ僕がそんなことをする？ 彼は一体何を聞いているんだ？ 「ウイングが同じ場所にある限り、シャーシへの取り付け位置に関係なく、タイヤにかかる正味の力は同じになります」

彼は首を横に振った。「ウイングのマウントをもっと後ろに持っていくとどうなるか考えてみてください」

僕は混乱し、黙って立っていた。

「取り付け位置にモーメントが働くでしょう」頭の上に電球がつくのを期待しているような表情で彼は僕の方を見た。しかし、何も起こらなかった。

「考えてみてください」と言って彼は歩き去り、クリスの方へ向かうとエンジンのことについて話し始めた、多分。

僕は言葉の意味について考えた。他のウイングマウントからの力やモーメントで打ち消されずに、ただモーメントが発生するなんてことがあり得るか？ あいつは一体何の話をしていたのだろうか？ 割り当てられた 20 分の後、僕らは審査員にお礼を言い、マシンをパドックに押して帰った。歩いて帰る途中、僕は他のチームメイトと話をし、答えを得た。

「彼はなぜ四つのサスペンションが全て一緒ではないのかと聞いてきた」とクリスは混乱した表情で言った。

「ハブベアリングを除けば、四つのサスペンションは全部同じだ」とカイルは主張した。

「彼は A アームも全部同じにしたかったんだろう。そうすれば、必要なスペアは 1 セットだけになる」

「バカげてる」とリッキーは言った。リッキーはサスペンション担当ではなかったし、僕もそうではなかったが、二人とも、そしてチームの誰もが、利便性の向上とコース上でのパフォーマンス低下におけるトレードオフがくだらない決定につながるを分かっていた。まさに、リッキーが言うように、バカげていた。

「待て、なぜ彼はサスペンションについてクリスに聞いたんだ？ 彼はエンジン担当じゃなかったのか？」ボビーが尋ねた。

クリスが答える前に僕は答えた。「そうなんだ、エアロについてもくだらない質問をされた。ウイングのマウントがフレームの後端にない理由についてだ」

考えれば考えるほど腹が立つ。デザイン審査では、システムをよく理解していない思い上がったバカ野郎にだまされたように感じた。彼はパワートレイン

部品を製造する会社のエンジン技術者だったのに、なぜエアロダイナミクスとサスペンションについてバカげた質問をしたのだろうか。

ウェズはいつものように前向きな言葉で僕のイライラを静めてくれた。「他の審査員はあなたのシフトやクラッチが優れていると言っていましたよ。どっちの手でもクラッチ操作とかシフトのアップダウンができることを気に入っていました」

僕らのプッシュボタンシフトは、どちらの手でもクラッチ操作やシフトアップ、シフトダウンができるようにセットアップしておいた。特に役立つものには見えなかったが、審査員が望むものになるとは思っていた。残念ながら、それが他の部分の「不足」を補うのに十分だとは思わなかった。

いずれにせよ、他に心配すべき問題があった。

トレーラーに戻るとすぐに、「カンザス大の排気系はまだ試すつもりだよね？」と尋ねた。

「ああ、今すぐやらないと」とカイルは答えた。彼はデザイン審査だけでなく、排気系のジレンマにも明らかにいら立っていた。

カイルが僕らの計画をカンザス大に伝えに行く間、僕はレンチセットを握り締めていた。彼らは全く気にしていなかった。事実、喜んで協力してくれた。カンザス大は会場にいた中で最も素晴らしいチームの一つだ。また、カンザス大のメンバーのほとんどは友達だったので、彼らにとって不要なものは何でも使わせてくれた。カンザス大の旧マシンを分解している間、クリスと他のチームメンバーが大きなマフラーを取り付けていた。それをテストしたら有望な結果が出た。111 デシベルだ。分解して再びパッキングしたが、111 のままだった。フィルが彼のマフラーでやったように、誰かがそれにバッフルを加えることを提案した。そこでマフラーを分解して、さらに巨大なマフラー用に部品を収集し始めた。

僕はカンザス大の 2006 年度マシンの下に潜り込んで、腕を排気エリアに突っ込み、見えないところにあるパーツで指を擦りむきながら悪戦苦闘していた。

「俺らの車両パッケージを楽しんでくれてるかい？」顔を上げるとカンザス大のメンバーの一人であるエリッチがいた。

「こんなに取り外すのが難しい排気系は見たことない」と僕は言った。「一体どうやって外してるんだ？」

「いつもは最初にエンジンを降ろすんだよ」と彼は笑顔で言った。

僕はボルトの取り外しを続けた。2本の指でレンチのバランスを取り、見えない状態でそれをボルトの上に滑り込ませ、ほんの少しだけボルトを緩め、そしてそれを繰り返した。それに加え、何回もレンチを落としては、落胆の「くそっ」を呟いた。

ボビーがやって来た。「数分後にパドックを閉めるみたいだ。何をやるべきか考えないといけない」

夜間にマシンを持ち出すことは認められている。ただしその場合、翌朝に全ての技術車検を再び受けることになる。僕らは二つを残して全て完了していたので、これはかなりの手間になる。しかし、僕らには解決策が必要だった。

「ホームに持って帰るべきだと思う」と僕は立ち上がりながら言った。

「つまり.....オクラホマに戻って？」カイルはまるで誰かが彼の犬を撃ったかのように返答した。

「いや、違う違う違う。ホテルに戻ってマフラーのことを考えるつもりだ」と答え、ホームという言葉の意味を明確にした。「僕らは決して諦めない。止められるまでは。いや、止められても」

リッキーが言った。「夜中にホテルの駐車場で騒音テストはできないと思うんだ。それにマフラーを外して持ち出したら、他の全ての技術車検をもう一度受ける必要があるし、明日の正午にはスキッドパッドとアクセラレーションが終わってしまう。明日の朝直した方がいいと思う」

「それもそうだ」と僕は冷静に答えた。「可能な限り早くここに来て、絶対に11時より遅れてはいけないと肝に銘じるんだ」

「分かった、他のみんなに伝えるよ」とボビーが言った。

他のチームメンバーは荷物をまとめて出発する準備をした。出発する直前に、排気管の最後のボルトの取り外しが終わった。

睡眠というよりはうたた寝の後、僕らは大会の会場へと戻った。ボビー、カイル、クリス、そして僕はゲートオープンと同時に誰よりも早く会場入りした。僕らはすぐに、カンザス大の排気管をマシンに取り付け始めた。リーとミッシェルは僕らのすぐ後に到着し、他のメンバーがそれに続いた。

排気取り付けが完了すると、クリスはチームの何人かが前の晩に作業していたマフラーを必死になって探した。僕らは手当たり次第にマフラーを持ってきては試した。

「111だ」ボビーが言った。「以前は114だったマフラーだ」

カイルが提案した。「カンザス大のマフラーを俺たちのマフラーの後ろに直列に付けてみよう」

ウェズが手袋をはめ、マフラーの出口にもう一つのマフラーを保持した状態にすると、カイルがエンジンを始動した。

「109、以上だ」ボビーは控えめに言った。

クリスが叫んだ。「あのマフラーはどこいったんだよ！」

「もう時間がない」とボビーが言った。「何かしないといけない。他に手段がないのなら、二つのマフラーを使わないといけない」

ここで、搭載方法を考える必要があった。マフラーを直列に取り付けることはできなかった。排気管をそこまで後ろに延ばすのがルール違反だからということだけでなく、そのまま走ればトラック上の全てのコーンをひっくり返してしまうことも理由だった。僕らは二つのマフラーを車両後方に搭載するという

大雑把な計画を立て、別の部品調達のためにリーを送り出した。幸いなことに、彼は前日の経験が豊富だったため、全ての排気部品がどこにあるかが分かっていた。それでも僕らの時間は尽きかけていて、神様が何とかして彼を一番近いパーツショップに導いてくれることを願っていた。

彼が去った後、僕らは車検通過を期待して、いくつかの、あらゆる他の方法を試みた。全部で約 0.5 デシベル低くなった。

「2 時間だぞ！ フィル！」。トラックの荷台でマフラーを拾い上げるクリスを見上げた。彼はフィルのマフラーを振って叫んでいた。「2 時間もかかった！これがトラックにあるかどうか聞いたが、お前はないと言った！ 2 時間もかかったぞ！」

午前も遅くになってきて、みんな緊張し、疲れ、荒れていた。クリスの態度は特に不自然というわけではなかったが、いつもはあからさまに叫んだりしなかった。

クリスは他のマフラーを外し始めた。僕らはみんな距離をおいた。新しいマフラーがしっかりと固定されると、彼はカイルにエンジンを始動するように言った。僕はボビーの肩に寄りかかってメーターを見た。

ボビーは言った。「109！ 終了だ。行くぞ！」

彼は言葉を発するや否や、全ての準備が整う前に、騒音試験エリアに向かって、ジョギングペースでマシンを押した。

そして、カンザス大製の排気管と、持っていたあらゆる部品から適当に製作したマフラー（テーブルの近くに置かれていた余分な何かを含む）を載せたマシンは、騒音試験をパスするために騒音試験エリアへと向かった。僕らはみんなフェンスの脇に立ち、これが最後の騒音試験となるよう願って見ていた。これがうまくいかなかった場合は、トレーラーに戻って二つまたは三つのマフラーを溶接し、パワーを大幅に減らし、イベントを逃すことになる。騒音試験の検査員がマシンの後ろに立つと、エンジンの回転を上げた。数秒後、彼は僕ら

の車検シートを手に取り、その上に何かを書いた。

「.....合格ですか？」僕は尋ねた。

検査員はシートをボビーに渡し、ブレーキ試験のエリアに向かって歩き始めた。

「僕らは.....合格だ。合格か？ 合格だと思う！」安心とかリラックスという感覚は普通レース場で感じることはないが、このときは確かに感じた。ついに僕らは騒音試験を通過したのだ。あとは簡単なブレーキテストに合格するだけだ。それでレースに出ることができる。

カイルはエンジンを始動させ、クラッチを緩めたとき。「ポン！」という爆発音と共にマフラーの中身がマシンの後方 30 フィートに散らばった。マフラーには多くのがらくたを詰め込んでいたので、マフラーを吹き飛ばすのに十分な圧力がかかっていた。コアは白いパッキングで覆われていたが、それは歩道を横切って広がるにつれてフェザー状になった。誰かが大砲で鶏を撃ったようだった。状況が違っていれば、ヒステリックなほど面白かっただろう。そうでなくても本当に面白かった。

「リベットガンとドリルを使え。もっとリベットを追加するんだ」と無線機から命令口調の声が聞こえた。みんなでマフラーの部品を全て拾い集め、マシンをダイナミックエリアの外に押し戻し、工具が到着するとこのフランケン・マフラーを組み立て直した。

「ここに 5、6 カ所穴を開けてくれ。そこにリベットを追加する」とカイルは心配する様子で言い、リッキーにドリルを手渡した。

「まあ、騒音試験は通ったからな」と僕は言った。

「いや、もう一度やらないと」とリッキーは言った。

僕は信じられないという気持ちで尋ねた。「今何て言った？」

「マフラーを修理した後、もう一度やらなきゃいけないって言われたんだ」

「くそったれ」

安心感はここまでだった。

5 分後、騒音の再検査に戻ってきた。僕らはみんな同じことを考えて座っていた。今度はまた騒音が大きすぎになってやしないかと。

幸いなことに、彼らはフランケン・マフラーの中にフェザーを詰め直し、騒音試験に合格した。彼らはマシンをブレーキ試験エリアへと押して行った。そして僕はフェンスを強く握りながら、鶏の大砲が繰り返されないことを願っていた。

カイルはエンジンの回転を上げ、クラッチをつなげた。約 2 秒間加速して、ブレーキを思い切り踏んだ。4 人の検査員全員が手を挙げ、4 個の車輪全てがロックしたことを示した。技術車検がついに終わった。過去 2 日間、ストレスを感じ、走り回り、お互いを怒鳴り、必死に何とかしようとしてきた。そして、僕らはまだレースを始めてもいなかった。今やるべきことは、リッキーをマシンに乗せて列に並び、スキッドパッドを走り、アクセラレーションを走り、ドライバーを交代して同じことを繰り返すことだけだ。全てを 1 時間以内に完了しないといけない。奇妙なことに、それはとても簡単に思えた。

僕が振り返ると、排気部品でいっぱいのバッグを持って立っているリーがいた。彼はバッグを持ち上げると、笑いながら言った。「持ってきたぞ！」

レース

「一位になるためには、第一に完走しなければならない」

——リック・ミアーズ

僕らはデザインイベントのセミファイナルに進めないことが判明した。事実として、僕らと同じデザイン審査ブースのチームは全て敗退していた。その中には優秀なチームであり、またデザインファイナルの常連でもある西オーストラリア大もいた。この事実を、僕らの審査ブースは体毛を剃ってエンジニアの恰好をした傲慢で無知な猿によって運営されていた何よりの証拠だと僕らは考えた。とはいえ、怒鳴っていら立ちを口にしたところで結果は変わらない。もっと重要なことに、僕らは他の差し迫った問題に直面していた。

リッキー、クリス、そしてボビーがスキッドパッドとアクセラレーションへと急いで向かっていた。どちらのイベントも 45 分以内に終了してしまう。僕は無線機を手に取り、両方の競技で得点を稼げるよう、セカンドドライバーのために戻らずに、スキッドパッドとアクセラレーションを 1 回ずつだけ走行するよう指示しようとした。しかし、彼らは自分たち自身で状況を理解してくれるだろうと僕はすぐに考え直した。それに僕が無線機で強要したところでフラストレーションを生むだけだ。

リッキーは耐火性のドライビングスーツに身を包み、出走の準備を終えたマシンに乗り込んだ。

リーはヘッドセットを装着し、カイルに無線で連絡した。「今スキッドパッ

ドの待機列はかなり短くなっているみたいだ。最初にそっちへ向かった方がいい」

応答はせず、カイルとボビーはスキッドパッドの待機列にマシンを押していった。イベントエリアは観覧エリアからかなり離れていたため、スキッドパッドのタイミングマーキーはほとんど見えなかった。幸運なことに、僕らは他のチームの一つと同じ無線機チャンネルを選んでおり、トレーラーに時間を中継してくれる人がいたため、どのチームがどれくらい速いか知ることができた。

「今何時だ？」リーに尋ねた。

「11 時 21 分」

彼らが列に並んでいるのを心配になって見ていると、胸がドキドキしてきた。並んでいた他のマシンは順調にイベントを終え、それから数分後には僕らの順番になった。

「スキッドパッドはどれくらいのタイムで走るんですか？」とウェズが尋ねてきた。

「速いチームで平均 5.4 秒ってところだ」僕はマシンを見つめながら言った。

これが彼への合図になったかのように、リッキーはスキッドパッドを走り出した。時計回りに 2 周、反時計回りに 2 周。僕はタイミングボードに目を細めたが、何と表示されているかを伝えることができなかった。

隣に立っていたシディーク博士が双眼鏡を覗きタイムを伝えてくれた。「どうやら 5.4 秒みたいだ」

「悪くない。悪くない」僕は静かに言った。「多分、全部の走行に間に合うと思う」

ボビーとカイルは、リッキーを乗せたマシンをアクセラレーションの待機列へ押していった。そして短い待ち時間の後、彼は 4.47 秒のタイムを残した。素晴らしいタイムというわけではなかったが、そもそもアクセラレーションは僕らの得意なイベントではなかった。リッキーが 2 回の走行を終えた後ボビー

がマシンへ乗り込むと、4.318 秒を記録した。ベストタイムのみが採用され、僕らはトップ集団の中、25 位付近となった。マシンをスキッドパッドの列に戻し、セカンドドライバーのクリスに託した。二つのイベントが終了するまであと 10 分というところで、クリスは 5.173 秒のタイムを出し、このイベントで僕らは 4 位に躍り出た。

僕らはトレーラーまでマシンを押して帰った。安堵はしつつも、興奮を覚えるには疲れすぎていた。ミッチ、グロリア、そしてミッシェルが僕らのために昼食を用意してくれていた。カイルの両親、二人のファカルティアドバイザー、そして僕らがチームのママとよく呼んでいたグロリア。僕らには本格的なサポート・クルーが付いていた。まるでケータリング業者と機器サプライヤー、そして部品配送サービスが付いているかのようなようだった。彼らの助けがなければこのイベントに来られなかったことは明らかだったし、彼らの助けがなければ 1 年中競争力を維持することもできなかつただろう。

昼食の後、カイルと僕はオートクロスへと出発する予定だ。僕は非常に緊張していたので、トレーラーのグースネックの下で一人で座っていようと決めた。オートクロスのコースマップを注意深く見た。目を閉じて、各コーナーを想像する。——速く入って、遅れてブレーキング、そして大きいコーナーを素早く駆け抜ける。スラロームでは素早く、かつ、無理なく切り返していく。マシンを信頼しているが、不安定な状態にはさせない。——

コースマップを見ていたとき、クリスがフィルに対して、少し前に怒鳴ってしまったことを謝罪しているのを耳にした。もう過ぎたことだと言ってフィルは切り上げていたが、クリスと同じようにフィルも謝罪に感謝していることは分かっていた。そしてもちろん、ストレスのせいでクリスが過剰に反応していただけということもフィルには分かっていた。二人とも間違いを犯したが、どちらもストレスで友情が損なわれることはなかった。僕もこのことを考えておけば良かった。

「マッ、朝食は食べた？」とグロリアが尋ねてきた。

ゆっくりと静かに見上げて僕は言った。「いえ、オートクロスが終わるまで食事は控えようと思って」

「分かったわ。サンドイッチを作って取っておいてあげる」

「ありがとう」と僕は答えた。グロリアはどんなサンドイッチが食べたいかを僕に尋ねなかった。一人にして欲しいという僕の気持ちを察してくれたのだろう。

数分後、僕は精神を落ち着けて集中していた。時間が来ると、僕はドライビングスーツを着てカイルと共にオートクロスへと向かって行った。コースは、イベントが始まる前の数分間はウォーキングのために開かれていた。コースのマップは実物と近いが正確ではなかった。例え正確だったとしても、レースが始まる前にコースを歩いて実際にドライバー視点で見ることは非常に貴重な時間だった。カイルと僕は、各コーナーへの進入方法、スラロームの対処方法、注意しなければいけない場所について話し合った。

ファーストドライバーは僕だったので、マシンが到着するとまず僕が乗りこんで準備した。

「何台かマシンが出走して、コース上のごみを一掃するまで待たないと駄目だ」バックルを留める僕にカイルは言った。「今はまだ乗り込まない方がいいかもしれない」

「いや、マシンの中で待っていたい」と、僕は静かに答えた。マシンに座っている間、コースをより鮮明に想像することに集中できた。しかも、このマシンはとても快適だった。いいローンチェアになるだろう。待機列のすぐそばでしばらく待った後、リッキーとカイルは、長い待機列の最後尾へとマシンを押し進めていった。各チームはドライバー一人につき2周する。そして全てのチームの一人目のドライバーが走り終わると、二人目のドライバーたちが走り出すのだ。僕は長い間静かに座って、コースについて考え、頭の中で走行し、最初の

ラップでテストする箇所を決めた。

「さあ、準備はいいか？」リッキーが尋ねた。

僕はうなずいた。僕の心臓は再び早く鼓動し始めた。シートベルトのストラップを神経質に引っ張り、しっかりと固定されているか確認した。前にいたマシンは、グリーンフラッグが振られると加速して走り去っていった。僕はクラッチを緩め、ゆっくりとマシンをスタートラインまで動かした。深呼吸して、最初の三つのコーナーに集中した。三つのコーナーを通り過ぎるころには、完全にレースへ集中しているだろうことは分かっていた。深呼吸し、短時間の加速の後ブレーキング、左へ曲がる。そしてすぐ右へ曲がり、左へ向かいながら加速。深呼吸し、短時間の加速の後ブレーキング、左へ曲がる。そしてすぐ右へ曲がり、左へ向かいながら加速。

スタート係がグリーンフラッグを振った。僕は深呼吸をし、クラッチを素早く緩め、最初のコーナーへと加速した。最初のコーナーへブレーキをかけているときに、ペダルに置いた左足が震えているのを感じた。緊張しすぎていたので、もう一度深呼吸をし、この走行の目的はタイヤを暖めることとコースの練習をすることだと自分に言い聞かせた。

「これはただのテストランだ、ただのテストランだ。マシンに集中しろ」エンジンが 109 デシベルで叫ぶ中、自分自身に静かに言った。

スピードを緩めると、ターン中に少し滑った。右コーナーへ向けマシンを立て直すと、注目していた左の高速コーナーを迎えた。マシンは何カ所かのコーナーでスリップした。そのうちいくつかは、タイヤ温度を上げるために意図的に行い、いくつかはオーバースピードで突っ込んだ結果だった。コースの終盤には三つの大きな高速コーナーがあり、マシンはそこをレールが敷かれているかのようにコーナリングしていく。さらに強くマシンを走らせるが、まだコーナーで持ちこたえている。最後の高速コーナー。僕はさらにペダルを踏み込んで限界を見つけようと決心した。

「もっと速く！ もっと速く！ 行け行け行け！」僕は叫び、ペダルを踏みこみ、マシンの限界を探した。減速しなければならないところでちょうど見つけることができた。もう少しで何ダースもコーンを吹き飛ばすところだった。最後の数コーナーを通過し、フィニッシュラインを走り抜けた。すぐに再走行ラインに戻り、タイヤが温まっているうちにすぐに2周目を走ろうとした。少し待った後、再びグリーンフラッグが振られ、僕は出走した。左、右、そして左の高速コーナー。横滑りは少し減ったが、完璧なコーナーとは言えなかった。高速コーナーに達すると、最初から限界で突っ込んだ。高速コーナー間の移行は完璧ではなかったが、悪くない走りだった。自分にできるベストというわけではなかったが、なかなかいい走行だった。多分トップ 15 には入っているだろう。走行し終わるとすぐ、Goodyear のシャツを着た男がタイヤの温度を測定し始めた。この場を利用して、自分の走行がどうだったか尋ねた。

「僕のタイムはどれくらいでした？」僕は尋ねた。

彼は静かに何かを言ったが、エンジン音がうるさくて聞こえなかったため、エンジンのキルスイッチを押してもう一度尋ねた。「え？」

「47.7 秒。今のところのファステストだよ」彼は笑顔で言った。

彼がそう言うとき、カイルとリッキーがプッシュバーを持って現れた。

リッキーが大きな声で言った。「やったなスーパーファスト！ これまでのファステストだ！」

僕は満面の笑顔を抑えようとしたが、きっとみんなもう分かっていたと思う。例えヘルメットを着けたままであっても。僕は冷静でクールな男を演じたかった。——分かってるよ、ファステストになると思ってた。全く心配してなかったね。——

しかし、その代わりにとびきりの笑みを浮かべていた。

テキサス大学アーリントン校 (The University of Texas at Arlington, UTA) は僕らのすぐ後に出走し、僕らを2位へと追いやった。どのチームも遅いドラ

イバーを最初に送り出すため、速いドライバーは温まったタイヤとアドバイスを
を得ることができる。僕は遅いドライバーの中では2番目に速かった。悪くない。
速いドライバーが全員出走したが依然として2位だった上、カイルが出走
するとまた1位に返り咲いた。数台のマシンの後、UTAのセカンドドライバ
ーが出走し0.2秒強差で再び1位に躍り出た。

2位という順位は僕にとって十分だった。1位を逃したことでカイルは少し
動揺していたようだが、彼も僕らみんなも幸せだった。僕はそれ以上にリラッ
クスしていて、あまり神経質にならずにエンデュランスのレースに参加できる
ことが分かっていた。僕のタイムは全体で4位。カイルと二人のUTAのドラ
イバーに次ぐものだった。勝利に必要なマシンとドライバーが手の内にあるの
は明らかだった。

僕らは夜のために荷造りをして、翌日の大きなレースに向け、少し眠るため
にホテルへと戻った。

翌朝、自分たちのピットエリアを準備していると、ブレットが全チームのス
コアをまとめてくれた。デザイン審査のスコアはデザインファイナルの結果に
よって多少変化するが、今のところ僕らはトップ5に入っており、1位からは
そんなに離れていない。トップチームのうち、何校かは偶発的な故障によって
エンデュランスから脱落するだろうと予想していた。そのため残りの数校より
若干速く運転する必要があった。僕らはみんな、自分たちがこんなにうまくや
っていることに驚いた。ある意味で期待していたことではあったが、僕らが本
当にトップレベルのマシンを持つトップレベルのチームであるとは信じがた
かった。僕らがチームに入ってから、どんなに良くてもトップ5がせいぜいと
いうところだった。だが今はトップ3にかなり近く、優勝も狙える位置にいる。

「UTAは僕らより上か？」僕は尋ねた。

「いいや。だが本当に僅差だ」ブレットが何か言おうとする前にボビーが答

えた。

「1位はどこだ？」僕は尋ねた。

ブレットはただ僕を見た。笑顔で。

「うーん、ファッキン・ウィスコンシンとか言うなよ」

彼はうなずいて笑い、僕は失望して首を横に振った。

「どうしてウィスコンシン大が嫌いなんですか？」とウェズが尋ねてきた。

「本当に嫌ってるわけじゃないよ。一種のライバル関係だ。一方的だけど」
ウェズはまだ混乱しているようだった。

「分かった、説明しよう。去年、パワートレイン賞を獲得しようとしたんだ。だけどウィスコンシン大との厳しい争いになることは分かっていた。だから彼らのマシンのところに行って、不適切な部品がないか見つけようとしたんだ。そうすればその部品に関して僕らは適切だって説明すれば、審査員はウィスコンシン大のマシンが間違ってることに気付くと思ってね。僕が見つけたのは空気圧シフター用の CO2 ボトルが大きすぎることだけだった。そこで僕がプレゼンをしているときに、僕らの空気圧シリンダーがいかに小さく、そしてウィスコンシン大と差別化しているかについて話したんだ。ただ、それは毒にも薬にもならなかった。結局、彼らが1位になって、僕らは2位に甘んじる結果になったからね。そのとき以来、ずっと『ファッキン・ウィスコンシン』なわけだ。まるでハットフィールド家とマッコイ家のような激しい対抗意識だ、ウィスコンシン大側がこっちを知らないことを除けばね」

「つまり、彼らの方が優れているから好きではないと？」ウェズはより明確化しようと質問した。

僕は憤然し、かつ、微笑みながら言い返した。「彼らの方が優れていたわけじゃないぞ、ウェズ」

「じゃあなぜ彼らが1位に……」

僕は不可解な反論で話を遮った。「ウェズ……いいか……ウェズ……」

カイルと僕は出走の準備ができていたが、他のメンバーはマシンの仕上げを行っていた。念のためボディパネルと燃料キャップをテープで留め、全てのボルトが締まっていることを確認していた。

エンデュランスのコースはオートクロスのコースと大きさは似ていたが、コーナーやスラロームは異なっていた。また、一度に1周ではなく、10周ずつ走行することになる。僕が最初に運転し10周した後、ドライバーチェンジェリアへマシンを持って行き、エンジンを止めて車外へ出る。その後カイルが乗り込み、シートベルトを締め、エンジンをスタートさせ、そしてゴールに向けて走り出す。僕にグリーンフラッグが振られた瞬間からカイルがフィニッシュするまで、マシンに関する作業は何もしてはならない。つまりカイルは自分の力でエンジンをスタートさせ、無事に完走しなければならない。簡単そうに聞こえるが、エンデュランスを完走できるチームは半数にも満たない。

時間が来ると、エンデュランスのドライバー全員がコースウォークへと向かった。カイルと僕は各コーナーをどう攻略するか、そして一見すると遅くなりそうな場所について再び話し合った。エンデュランス中にコースアウトすれば20秒のペナルティが課される。もしそんなことをすれば勝利の可能性はなくなってしまう。コーン接触による2秒のペナルティでさえ受け入れられない。だからタイヤが温まっていない最初の数周はかなり慎重に運転しなければならない。慎重だが遅いのは駄目だ。オートクロスは可能な限り速く走ることが第一であり、コーンに触れないことは二の次だ。それに対し、エンデュランスはコーンに触れてはならないことが第一であり、可能な限り速く走ることが二の次だ。僕は落ち着いて集中し、各コーナーを慎重に運転し、全てのラップを完璧に近づける必要があった。

コース上では常時5台のマシンが走行している。一つのチームが20周を走り終えるたびに、別のチームが出走する。スタート順はオートクロスのタイムに基づいて決められるため、コース上のマシンは全て同じようなスピードにな

る。時々、あるマシンが別のマシンに近づくと、先行するマシンに対し青と黄色のフラッグが振られる。振られた側は指定された追い越しレーンで停車し、後続車両が追い越すのを待たなければならない。僕らは少なくとも数台を追い抜く可能性は高かったが、逆に追い抜かれる可能性はほとんどなかった。僕らよりも速いマシンは唯一 UTA だけであり、その UTA も 1 周あたり数分の 1 秒速いに過ぎなかった。

僕は落ち着いていた、少なくともオートクロスの前よりかは。マシンが到着すると、シートベルトを締め、ちょうど以前やったのと同じように頭の中でコースの中を走り抜ける。深呼吸し、すぐに左、急な右、急な左、短いスラローム、右の高速コーナー……。

オレンジのベストとヘッドホンを着けた男がレースカーの列へと歩いてきて言った。「あと 2 分だ！ 2 分後に開始する！」

僕は深呼吸をしてこう言った。「エンジンを暖気したい」

異議があるかどうかを確認するつもりで言ったが、誰からも反応はなかった。僕はメインスイッチを入れマシンを起動し、スタートボタンを押してエンジンを掛けた。すぐにエンジンはかかった。カイルが運転するときも問題なく再始動できるとは思っていたが、再始動時のトラブルでレースから脱落するチームはかなり多く、安心することはできなかった。

UTA はスタートラインへと合図され、僕はその少し後ろに着いた。スターターはドライバーを指さし、ドライバーは親指を立てた。スタート係がグリーンフラッグを振ると、UTA のマシンがコースへと走り出した。発進の瞬間、わずかにタイヤが空転し、小石が僕らの方へと飛んできた。僕はゆっくりとスタートラインまで進み、スタート係の指示を待った。僕ら二人はコース上の UTA を見つめ、ある程度の距離が開くのを待った。

スタート係は僕を指さし、グリーンフラッグを振った。

僕は深呼吸して、最初のコーナーへと慎重に加速した。そしてギヤを 2 速に

入れ、次の二つのタイトコーナーをスムーズに通過できるようにした。最初のスラローム前にある急な左右のコーナーを抜けようとしたとき、エンジンが突然停止した。心配したが、誤ってキルスイッチを押したのだろうと考え、手を伸ばしてメインスイッチを押した。まだ惰性で走っており、エンジンも回転していたため、始動ボタンを押す必要もなくマシンは息を吹き返した。スラロームへの入り方を失敗したが、それが問題にならないほど遅かった。

レースへと意識を戻し、スラローム後のコーナーへと慎重に戻った。その場所に土や砂利があることはコースウォークのときに気付いていた。念のため、想定しているよりもゆっくりとコーナーを曲がったが、マシンは問題なく路面に張り付いていた。次の二つのコーナーはもう少し積極的になった。コースへと意識を向けたそのとき、またエンジンが停止した。

メインスイッチを押すと、また息を吹き返した。ものすごく心配になり始めた。キルスイッチを2回も押すようなことは絶対にしていない。それでも、左手のグローブが弛んでキルスイッチに触れている可能性を考え、右手を伸ばしグローブをしっかりと引っ張った。

コースの終盤近くに大きな高速コーナーが二つある。そこはエアロデバイスを持たないマシンに対して差をつけられる箇所だった。コーナーを曲がるときに UTA のマシンがどこにいるのかを確認した。次のラップでもう一度確認することで、自分が速くなっているのか遅くなっているのか確認することができる。

フィニッシュライン前の最後のコーナーを少し速すぎるスピードで駆け抜けた。しかしコーンの間にマシンを収め、軌道修正に時間を掛けなかった。コース序盤の低速タイトコーナーに入ったとき、再びエンジンが停止した。

「おいおい。クソッ！ クソッ！ クソーッ！ 一体何なんだよ！」ヘルメットの中で叫んだ。僕がメインスイッチを押すと、再びエンジンがかかった。コースを進みながらインパネの下にある配線に手を伸ばした。配線の接続が緩

んでいて、コーナーで互いに引き離されているのではないかと考えたのだ。2周目は5回発生した。3周目には、メインスイッチから手を離すとほとんど一瞬でエンジンが停止してしまう状態になっていた。

左手をフロントロールフープに置いて親指をメインスイッチに固定した状態で、できる限りコースを進んだ。シフトアップもダウンも片手で行うことはできたが、さらに操縦まで同じ手で行うとなると大変だった。僕は2速に入れたままにしたため、低速コーナーはより低速となった。しかしそれ以上にステア操作が難しくなっていたため、ギヤは問題にさえならなかった。長い高速コーナーではステア操作が簡単だったため、特にトラブルなくコーナー入り口で3速にシフトアップし、出口で2速に戻すことができた。大きいコーナーで時間を稼ぐことができたが、それ以上に他の部分でタイムをロスしていた。5周目の途中、フラッグステーションの一つが僕に対してブルーとイエローのフラッグを振った。僕が追い越しレーンへとマシンを持って行くと、オレンジとブルーのマシンが追い越していった。フロリダ大だ。僕らはオートクロスでは彼らよりはるかに速かったが、今では彼らに抜かれてしまうほどタイムをロスしていた。僕は高速コーナーの正面へとマシンを戻した。高速コーナーではフロリダ大よりもはるかに速かったためコーナーの出口付近ではほぼ追いついていたが、数個のタイトコーナーを過ぎると彼らはいなくなっていた。そして次のラップで、西オーストラリア大に抜かれた。

操作する腕が疲れてきた。より力を入れるためにハンドルに寄り掛かるようにしたが、どんどん遅くなっていった。残りの周は、最大の操舵力が得られるようなドライビングポジションを模索した。残り1周のシグナルが視界に入ったとき、カイルがエンジンを始動してギヤを入れたら、片手でメインスイッチを押しながら10周運転しなければいけないことに気付いた。

最終ラップのフィニッシュラインを越えると、ドライバーチェンジエリアへ向かった。僕はバックルを外し、マシンから飛び出してカイルに言った。「ず

っとメインスイッチを押し続けなさいといけない。メインスイッチから手を離すとエンジンがすぐに止まってしまう」彼に聞こえるように大きい声で喋ろうとしたが、オフィシャルに安全性の問題を疑われて退場させられてしまう可能性があるため、あまり大きな声も出せなかった。カイルはうなずき、マシンへと乗りこんだ。バックルを締めた後、彼は片手でクラッチレバーを握り、一方の指でメインスイッチを押し、また別の指で始動スイッチを押せるように不器用に腕を置いた。エンジンは何回か回転したものの、始動しなかった。カイルは数秒間待って再度トライしたが、運は味方しなかった。彼はしばらく座ったまま待ち、もう一度トライする前にエンジンを少しでも冷やそうとした。だがそれでもエンジンはかからない。このマシンはどう見てもメインスイッチがオフの状態では始動できない状態なのだ。メインスイッチを入れていれば、マシンを走らせるのに必要な全ての電装部品に通電するはずなのだが、エンジンはかからなかった。

「では、計測を始めます」ドライバーチェンジエリア担当のオフィシャルが僕らに通告した。「2分以内にエンジンがかかると失格です」

カイルはシフトボタンを押しニュートラルに入れた後、再度トライした。それでもエンジンはかからなかった。

「残り 10 秒になったら教えてくれ！」彼がヘルメット越しに伝えたと、オフィシャルはうなずいた。

エンジンが少し冷えてから再始動することに期待しながら、約2分間待った。僕はぼんやりとエンジンを見つめて、何が起こったのだろうと考えた。検査員に気付かれないうちに何か修理することで済むのだろうかとか、エンジンを冷やすために小便を引っ掛けてもいいのかとか、そんなことを考えていた。

「残り 10 秒！」オフィシャルはカイルを指して言った。

カイルはスタートボタンを押すと、エンジンがゆっくりと回り出した。しかし、エンジンはかからなかった。

10 秒後、オフィシャルは首を横に振って言った。「残念だが、時間だ」

終わった。大きなトロフィーもなくなったし、履歴書に書ける大きな 1 位の文字もなくなった。ほんの数時間前まで、最高のマシンを持って偉大な結末を迎える予定だったチームはどこかへ消えさり、壊れたマシンと、マシンをパドックに押し戻す気力もほとんどないほど意気消沈した数人の子供たちへと変わっていた。

僕はしばらくぼうぜんとして突っ立っていた。フロリダ大のマシンがドライバーチェンジエリアへやって来ると、マシンへ駆け寄る学生の一人とぶつかった。困惑から目を覚まし、体を避けると、僕ら抜きで進んでいく競技に背を向けてトレーラーへと帰って行った。

僕らが戻る前に、既にリッキーは何が問題だったか分かっていた。彼はキックパネルを外し、外れていた配線を差し込んだ。彼が始動スイッチを入れるとすぐにエンジンがかかった。ブレーキのオーバートラベルスイッチの配線が緩んだため、マシンはブレーキトラブルが発生した状態となり、システム全体がシャットダウンしてしまっていた。コース上で徐々に緩んでいったのだろう。メインスイッチを押しながらマシンを走らせられたのはただの偶然で、配線方法の副作用に過ぎなかった。

「まあ」ボビーは明らかにわざと作った明るい声で言った。「デザイン審査員と話をして、カリフォルニア大会までに何がもっと良くできるか見てみよう」

チームのメンバーを連れ、マシンをゆっくりとデザインエリアへ押していった。マシンをより良くしたり、デザインイベントで得点を得るためにアドバイスをくれる審査員はいつも何人かいるものだ。デザインは多くのポイントが得られるわけではないが、多くの名声が得られる競技だ。そして仕事も得られる。ほとんどの審査員は自動車業界から来ており、新しいエンジニアを探していた。

ボビーは上級審査員の一人、クロード・ルエルを見つけた。クロードはサスペンション分析用のソフトウェアを販売するコンサルティング会社 Optimum

Gを経営していた。彼はこのイベントで最も尊敬されるエンジニアの一人であり、レースカー工学の分野で世界的によく知られていた。彼はベルギー訛りで話したが、それを知らない人にはフランス語訛りと間違えられやすかった。新しいメンバーはみんな、彼が僕らのマシンについて何と言うのか聞こうと、前に立って熱心に待っていた。僕はいまだにあの故障に失望しながら、後ろの方、マシンのさらに後ろで静かに立っていた。

デザインイベントはプロフェッショナルなものであり、ほぼ就職面接のようなものだったから、彼の最初のコメントに少しあっけにとられた。

「君らのマシンめっちゃくちゃ速かったな」

きっと彼は僕らの反応に気付いていたに違いない。なぜなら彼が「今はアメリカ英語を喋ってるぞ」とさりげなく付け加えたからだ。

彼は僕らのマシンを見ていくつかコメントをしたが、ほとんど肯定的なものばかりだった。ボビーが、なぜ僕らはデザインでいい点を得られなかったのかと尋ねた。

「知らないよ」と彼は答えた。「私は君らの審査ブースにいなかったから、君らが何を聞かれたのか、そしてどう答えたのか分からないからね。ただ、君らのマシンはいい。素晴らしい。そう思う。」

彼はさらにいくつかの質問に答え、いくつかのジョークを言い、いくつかの知恵を与えてくれた。

「レースカーエンジニアは裕福とは言えないまでも、いい給料を稼ぐことができる。覚えておくんだ、男は多くのベッドを持つことができるが、寝られるのはそのうち一つだ」僕らは静かにうなずく。「もちろん、多くの女性をベッドに寝かせることはできるがな」

僕らはみんな笑って、彼がカリフォルニア大会のデザイン審査ブースにいることを願った。

授賞式が始まるころには、僕らはみんな少しリラックスして、気分もよくなっていた。カリフォルニアがまだ残っていることは分かっていたし、少なくとも一つは賞を取るつもりだった。僕らは実に五つの賞を獲得した。デザインレポートに対するデザインとコミュニケーション賞、カイルのオートクロストップ3に対する Hoosier Tire 賞、ボディデザイン賞、複合材料賞、そしてパワートレイン賞の第2位。

ウィスコンシン大はパワートレイン賞で僕らを打ち負かしただけでなく、デザインで1位、総合でも1位となった。

ファッキン・ウィスコンシン。

結局のところ、僕らは28位だった。ポイントを見てみれば、もしカイルが自分と同じペース、片手運転のときと同じくらい遅かったとしても、総合で2位になっていることが分かった。設計を改良して、エンデュランスで両手が使えさえしたら.....。

まあ、たればの話をしだせば、70 チーム以上が勝つ可能性があるのだ。こういうことは毎年ある。僕らはうまくやったし、カリフォルニアではもっと良くなるだろう。

デトロイト大会で一番誇りに思っているのはプッシュバーだと思う。イベントの主催者が最優秀プッシュバー賞という新しい賞を作ったほど、誰もがこのプッシュバーを気に入った。僕らは名誉賞として受賞したが、彼らは翌年、トロフィーとその栄誉に見合うだけのお金と共に、それを実際の賞にしてくれた。

さらなる最終調整

「常に最高となるのは難しいが、常にパフォーマンスを上げることは可能だ」

——ジャッキー・スチュワート

デトロイトからの帰り道、1週間の休暇を取ることにみんなが同意していたが、僕はレースチーム最後の1カ月を4分の3にするつもりはなかった。僕は数日間休んだ後、衝動に駆られた。僕はリヤウイングをもっときれいにすることを決めた。今すぐにでも取り掛からないといけない。技術車検に合格するためエンドプレートを短くカットしたとき、見た目が少し雑になってしまった。他のメンバーが工房にいるとは予想していなかったが、自分が到着したときカイルの姿を見つけたことは嬉しい驚きだった。

彼は新しいマフラーをマシンに取り付けていた。カンザス大が使っていたのと同じものだ。

「みんな1週間休むと思ってたけど」僕はマシンに向かって歩きながら呟いた。

彼は肩をすくめて言った。「これはやらなきゃいけない。クリスがさっき点火タイミングをいじってくれたから、このマフラーで109デシベルになってるはずだ」

「なるほど。誰か丸1週間休んだ人はいないの？」そう言って僕は六角レンチセットを手に取り、リヤウイングのエンドプレートを取り外し始めた。

「今週お前は職探ししてると思ってたよ」カイルは言った。「何も決まって

ないのはお前くらいだと思うぞ」

少しためらったが、僕はビッグニュースと共に答えた。「クロードから電話をもらった」

「クロード？ クロード・ルエル？」彼は眼を見開いて聞いてきた。

「ああ、彼が今一緒に働いているチームのエンジン部門の仕事について、カリフォルニア大会の会場で話をしたいとさ」

「おい、それは.....、本当にクールだな」

「ああ。まさか彼から連絡が来るとは思ってもみなかったよ。履歴書を 30 枚印刷して、余ってたから送っただけなのにね」僕は笑った。

「彼の下で働くなら絶好の機会だと思うぞ。大会で絶対に彼を見つけないとな」

「もちろん、何が何でもこの仕事を得るつもりだ。チャンスがあるとは思えないけど。ただ、何かが.....分かんと思うんだ。高いところを狙えば、あるいは.....どこかで教訓の一つも得られるはずだ」そう言って僕は目の前の作業に意識を戻した。

あのデザインイベントは僕らにとって詐欺みたいなものだったが、僕らの責任の部分も確かにあった。僕の方で言うと、ウイング単体の空力性能テストデータと流体解析データはあったが、車両全体の抵抗係数やダウンフォースダイナミクスなど、必要な数値のいくつかが不足していた。カリフォルニア大会までに変更を加えることに決めた。大会の成績は運に左右される部分もある。だが、準備すればするほど、幸運が現れる期待をする必要もなくなる。幸運に恵まれたというだけで優勝するチームもある。そういうチームは常にいいチームだったが、誰が見てもそう見えないようなチームが優勝することもあった。トップ5には入るが、トップ1ではないチーム。また、最高のチームが運に頼らず勝つこともあった。素晴らしいチームであり、よく準備されたチームだった。

そういうチームが自らの運命をつかみ取れば、残された僕らは幸運にも 2 位になることを願うばかりとなる。

テストはデトロイト大会までに終えられなかった。間違いなく、終わるはずがなかった。丸 1 年掛けてテストして、テスト結果に基づいてパーツを作り直して、そして最終的に全く別の車にしてもいいが、それでもテストと改善は終わらないのだ。ただそうは言っても、次の大会までにはもう少し時間があつた。僕の追加テストはエアロに関してのものだった。エアロによって速くなることは分かっていた、その理由も分かっていたが、それでもまだやるべきことがあつた。さまざまな速度でのダウンフォースとドラッグを測定するため一連のテストを計画した。僕らは車体がどの程度ストロークしたかを測定するショックユニット用センサーを持っており、また車体を押し下げるのに必要な荷重は計算で求められるため、ストローク量からダウンフォースを逆算できる。ダウンフォースを測定するもっといい方法もあるが、低予算のチームの場合、このショックポテンショメーターを使うのがいいやり方だ。

辺りの人が 1 日の仕事を終えて帰宅するのを夜遅くになるまで待った。地元の工業団地を走り回り、時速 100 マイル弱まで加速した後クラッチを切り、道路の終点までコーストダウン試験を行った。全ての速度域のデータを得るために低速でも同様の試験を繰り返し、データ収集用コンピューターに必要な情報を全て集めた。短距離で加減速しながら、歩道の縁石と郵便受けがある市道を時速 100 マイルで走るのはかなり強烈だった。他の車が入ってこないようにコーンを置いた方が賢明だったかもしれないが、そんなことをすれば警察を呼ばれただろう。合法的な方法とは言えなかったが、僕らはほぼ安全で人里離れた場所にいたので、全てを用意周到に準備し、その場所に誰もいなくなるのを待ってからこの電撃作戦を決行した。

テストの後、解析するためにオンボードコンピューターから生データを取り出した。適切な方程式と変数を Excel 上に入力し、傾向を見つけるためにグラ

フにプロットした。

データは全く雑然としていた。まるでコカイン中毒者がペイントシェーカーの中で描いたようなグラフだった。しかし、傾向は見て取れた。僕らが手にしていたデータは、ウイングの有意性と、それがどのように機能するのか、なぜ機能するのか、そしてどれほど効果を生むのかを審査員に示すには十分だろう。

テストデータを以前のシミュレーショングラフに重ね合わせてみた。二つは近いものだったが、より近くなるはずだと考えた。まずウイングがマシンにどのような影響を与えるかについて考えた。ダウンフォースはタイヤのグリップ力を高めるが、これはコーナー内、つまり外側のタイヤの方が内側よりも負荷が大きくなる所でのみ有効になる。そこで自分の『Race Car Vehicle Dynamics』を取り出し、横方向の荷重移動を説明する関数を追加した。そして荷重ごとのタイヤの摩擦係数変化を考慮し、それも追加した。シミュレーションデータはどんどんテストの数値に近づいていった。タイヤによってウイングの効果が違うのではないかと考え、タイヤの種類を増やした。速度を上げていったときのフロントダウンフォースの減少分を考えて、さらに風圧中心の高さも考えた。明け方5時。レースカーでまた徹夜してしまったことに気付いた。このレースチームで最後となるであろう徹夜に対して、感謝すると同時に失望した後、僕は「inescapable.xls」ファイルを保存し、寝るために家に帰った。

3週間後、僕らはみんな早々と工房へ行き、スケジュールに遅れないように努力した。前日にある程度の事前の荷造りをしていたが、ある時点から集中力を失い、夕方の大半をホットドッグの調理とサッカー・フォースクエアのプレイに費やしてしまっていた。

最後の梱包を終えた後、僕はリッキーのバンの後ろに飛び乗り、そして出発した。リッキーはミニバンの後部座席を取り外し、代わりに巨大な枕を置いていたので、運転後の仮眠に適したベッドになっていた。巨大な枕ではあったが、

世界最大というわけでもなかった。この枕はリッキーの家の中で、「世界最大の枕」と書かれたギネス認定証の隣に置いてあった。

リッキーは風変わりな男だった。

僕らは数時間おきに運転を交代し、昼夜を問わず運転し続けた。僕らの平均速度は掲げられている制限速度よりも少し速かったため、朝食の後に他のメンバーに電話したとき、僕らが3時間進んでいることにあまり驚かなかった。

「それじゃあいい景色を観に回り道をしよう」僕はミニバンの後部座席に横たわりながら提案した。

「どこへ？」とカイルが尋ねた。「今は砂漠の真ん中だぞ」

「しばらくの間、ルート 66 を辿ることができる」

沈黙。

「どうだろう。ただ退屈だ」

「迂回することもできるぞ」運転席からリッキーが答えた。「高速道路を運転するのには飽きたし、ホテルの駐車場で3時間他のメンバーを待つのも嫌だ」

僕は起き上がって地図で適当な迂回路を探した。「セリグマンで降りた後、ルート 66 を辿って、その後キングマンの I-40 から元の道に戻ろう」

「こんなところに住もうってやつはどんな考えをしてるんだろうな」高速道路以外の全てから遠く離れ、お互いに隔絶された移動住宅を見ながら僕は尋ねた。どれも州間高速道路から遠く離れていたのではっきりとした特徴は何も見えず、そのどれにも私有車道があるようには見えなかった。

「土地が安いに違いない」とカイルは言った。

「そうだろうね。バスの時刻表が読めるほど頭のいい人はここにはいないだろうし。きっとシャベルを持ってディナーに行って、害虫か何か食べるんだろうな」と僕は答えた。

「なあ、ここだったら自分の城を建てられるぞ。土地は実質無料だろう」リッキーは明言した。

「絶対イヤだね。僕は都会に城を建てる」僕は言った。「もし城を買えるなら土地も買えるだろ」

「お前は城を持ってない。俺は城を建てる」リッキーは反抗的に言った。

「なんだろうが、いつも城が欲しかったんだ。君よりも前からね」僕は無礼に言った。

「お前のことは知らないけど、多分俺の方が先だね」

「でも、僕は君より年上だし、ずっと欲しがって……、君は何歳だ？」

「22 だ」

「僕は 23 だ」僕は高圧的に言いながら座った。

「まあ、堀は手に入れたし」リッキーがやり返した。

「堀は無理だ。堀は城についてくる。堀無しで城は持てない」

カイルが入ってきた。「最初に堀を手に入れたやつが城を手に入れるってのはどう？」

「お前の負けだよ」リッキーは後ろを振り返らず、指を下に向けて強調して言った。

「どっちでもいいよ。もう 50 ドル儲かってる」

回り道も終わりとなり山道に差し掛かって、ようやく退屈から解放された。山道はレーストラックのようなものだ。セーフバリアの代わりに崖があることを除けばだが。リッキーは山を駆け上がると、ミニバンをヒルクライム用のレースカーのようにして下って行った。崖の端でタイヤのスキール音が鳴り響き、ブレーキの焼ける臭いが立ち込めると、レースには絶対に行けないだろうと思い始めた。ましてや城はなおさらだ。エキサイティングな山道を期待して迂回することを決めたが、僕らが目にしたのは、ミニバンの速度記録更新を阻むハイウェイパトロールが時折潜む、ただまっすぐな道路だった。

レーストラックから 20 マイル進んだところで、数台前を走るトラックからはしごが落下した。はしごにぶつからないよう、できる限り避けようとリッキ

ーはわずかに左へ方向を変えたが、時速 70 マイルで右のリヤタイヤがはしごを踏んでしまった。タイヤはすぐにパンクしてしまい、リッキーは車を停止させた。

止まろうとする車の中で僕は言った。「1500 マイルは問題無しで、ホテルまであと 20 分までのところでパンクとはね」

「少なくともフロントタイヤは避けた」リッキーは言った。「スペアタイヤは 1 個しかない」

僕はスペアタイヤを持ってくるために外へ出た。車の後ろの床を確認したがスペアタイヤは見当たらない。

「そこに無いか？」とカイルが尋ねた。

「無いな。後ろのどこかにはあるはずだ」フロアマットを持ち上げてみたが、ここにも無い。カイルが片側のサイドコンパートメントを開けるとジャッキを見つけた。

「スペアタイヤは一体どこだ？ リッキー、もしかしてこれランフラットタイヤじゃないか？」僕は尋ねた。

「違うと思う。後ろの床を確認してよ」

「もうチェックした」

リッキーは、自分でやるよという態度で後ろに来た。こういうことはリッキーの方が得意だったし、いつも彼は理解して行動するタイプだったため、タイヤ探しの仕事は彼に任せることにした。

5 秒後、彼は言った。「どういうことだ？」

カイルはマニュアルに助けを求めると、ある一文を指さした。「スペアタイヤは運転席の後ろの床にあります」

僕らは驚きと困惑した表情でお互いを見合った。——なんでこんなところに置くんだ？——

「これは意外だったな」フロアマットとその下にあるカーペットを持ち上げ

て僕は言った。20 分後、現地のタイヤショップの駐車場に立って、タイヤ交換が終わるまでの 45 分間、何をしようかと考えた。僕は北の山脈を眺め、これほどまでに巨大なものが存在することに驚いた。オクラホマ州のノーマンは平地で、一番高い建物で 10 階建てかそこらだったので、町の後ろに山が広がっている風景は驚きだったのだ。それは本当に文字通り、畏敬の念を抱かせるものだった。まるでアーミッシュの子供がニューヨークに来たかのようなだった。

「フィルは俺らより 45 分遅れているから、バンの修理が終わるころに合流できるだろう」リッキーは自分の携帯を見ながら言った。

「さあ、飯に行こう。腹が減った」とカイルは言った。

カリフォルニア

「私がレースを始めたとき父はこう言った。『クリスチアーノ、玉を3個持ってるやつはいない。だが、素晴らしい2個を持ってるやつはいる』」

——クリスチアーノ・ダ・マッタ

南カリフォルニアは温暖で、デトロイトより総じて幸せな場所だった。ほとんどのチームは一つの大会しか出場しないが、カンザス大やミズーリ大ローラ校、そして僕らのように両方の大会に出場するチームもいくつかあった。

カリフォルニア大会の車検は楽勝だった。デトロイト大会で起きた問題は全て修正済みだ。可能な限り車検をスムーズに進められるよう、検査員に見つかりやすい二つの違反を意図的に残しておいた。そのうちの一つはすぐに見つかり、チームメンバーは必要なパーツを「製作」するためにパドックへと戻っていった。もう一つの違反、リヤロールバーサポートのパッド欠損は指摘されなかった。僕らはこのパッドがただの余計な重量物だと判断して、改めて付けることはしなかった。

技術検査は順調に進んでいたが、不運なことに大きな問題が発覚してしまった。チルト検査の列に並んでいたとき、リッキーがスプロケットハブの亀裂に気が付いたのだ。

スプロケットハブはリヤスプロケットをディファレンシャルへ固定するアルミニウム製の部品だ。エンジンからの出力はこのハブを介して伝達されるため、もし壊れればマシンは動かなくなる。ドライブトレインの部品は多くの衝

撃に晒されて疲労していく。さらに、変動するシフト力と、エンジンの回転を上げて8000RPMで荒く変速する学生のことを考慮に入れて設計することは大変だ。ただ、この壊れ方は僕らにとって好ましいものだった。突然ではなく、ゆっくりとした壊れ方。ただ、タイミングは悪かった。

「これはマズいな」状況を調査するチームメンバーが立ち並ぶ中、カイルは言った。

「でもまあ、1カ所だけだし」とコメントを求めるように僕は言った。「それに、どれくらい前からあったのか分からないしね。もし1カ月前からあるなら、多分大丈夫なんじゃない？」

ボビーが答えた。「それだったら誰か気付くと思うんだ。出発前のマシン清掃のときか、少なくともデトロイトにいるうちには」

僕は深呼吸して、自分たちに残された選択肢について考えた。「まだブレーキテストが残ってる。そこで目立って悪化するかどうか確認する必要がある。

この状態で残りのイベントを運転しなきゃいけないのは本当に気が進まないけど」リッキーは言った。

「じゃあ、複雑なCNCフライス盤加工の後にCNC旋盤で仕上げよう。もしロサンゼルスにいたとしても一晩で完成させられる可能性はかなり低いだろうけどね」僕は言い争わないように言った。

リッキーが提案した。「次の飛行機でクリスをオクラホマへ帰らせよう。そしたらクリスが機械で作って、翌朝飛行機に乗って新しいパーツを持ってくるんだ」

「俺は別にそれでもいいけど」とクリスは答えた。「だけどまずはこの辺の大学に工房を使わせてもらえないか聞いてみた方がいいだろうな」

「クリスは明日運転しなきゃいけない」とカイルは言った。「だから必要が無ければ、夜通しマシニング作業させて彼を疲れさせることはない」

クリスと他の数人は、車で行ける範囲内にキャンパスがある学校のパドック

へ向かい、僕らを助けてくれる人がいないか尋ねた。その間、カイル、リッキー、ボビーと僕は騒音テストとブレーキテストエリアへとマシンを持って行った。騒音テストは一発で合格した。本当になんの問題も無いかのようだった。続いてカイルがブレーキテストを行ったが、こちらは一発で合格した。マシンがコースから離れるとすぐ僕は最後の車検ステッカーを貼ったが、その間ボビーとリッキーはスプロケットハブを見ていた。

リッキーがこう言った。「ああ、ここだ。別の亀裂が入ってる」

「これで作り直しは決まりだな」とカイルは言った。

トレーラーへと戻ると、ウェズがマシンへとやって来てこういった。「僕らに協力してくれる学校をクリスが見つけて来てくれました」

カイルが尋ねる。「どこの学校だ？」

「CSUN とか言ってました」

「ああ、カリフォルニア州立大学ノースリッジ校か」とボビーが補足した。

「数分前にフィルとブレットが彼らと一緒に向かったから、明日の午前中には新しいハブが手に入るはずです」ウェズは自信をもって答えた。「クリスはここに残って、明日の運転に備えて睡眠をとるみたいです」

「それで、このハブはデトロイト大会までは持ったわけだけど、また壊れないように何か修正するの？」

「ええ、彼は何かを変えてました」ウェズは振り返って、クリスの方に向かって叫んだ。「クリス、ハブの設計は何か変えました？」

クリスはこちらに近づきながら言った。「軽量化の肉抜きパターンを無くしただけだ。強度が上がるし、マシニングも簡単になる。それに 10 分の 1 ポンド重くなる程度だ」彼は自信を持ってこう付け加えた。「これはいいと呼べるね」

車検を終えた後、僕らはデザインイベントへと向かった。僕にとって今回のデザインイベントはデトロイトの時よりスムーズに感じた。特に質問が無かつ

たからだ。チームの他のみんなも上手くやったと確信していて、デザインセミファイナルへ行けると固く信じていた。

僕らは午前中の残りをリラックスして過ごした。ボビーは海賊船をモチーフにした子供用のプールを買い、さらに家からミストメーカーを持ってきていた。プールを水で満たし、冷たいミストの下でリラックスして過ごした。まるで休暇のようだった。僕らはカリフォルニアの陽を浴びながらプールの水に足を浸し、何時間もくつろいだ。

「おい、今回は印刷されたぞ！」リッキーが興奮しながら叫んだ。

「印刷って何を？」リッキーの手に大会のプログラムが握られていることに気付く前にカイルが尋ねた。「おお、俺らのマシンスペックか？」

「そうだ」リッキーはそう言って、僕らのマシンとバカバカしいスペックが書かれたページをみんなに見せた。あの時に書いたバカな文章を思い出しながら僕らはみんな笑った。

「ハハッ！ Wheel-Lair で、か。おもしろいな」僕は言った。「デトロイトの時のプログラムはみんなチェックした？」

リッキーが答えた。「ああ、チェックした。全部空欄になってた」

カイルの両親と祖父母がフルサイズのキャンピングカーに乗って現れた。太陽の下でくつろぎすぎて暑くなったら、空調の整ったモーターホームへ行って、冷蔵庫から冷たい飲み物を取り出す。まるでプロのレースチームにいるみたいだった。デトロイトでやったように、走り回って、マシンを押して、あんなことやこんなことでパニックに陥る他のレースチームを見ていた。これはいい変化だった。

「皆さんにお知らせします。皆さんにお知らせします」スピーカーから声が聞こえてきた。「次のチームはデザインセミファイナルへ選ばれました。30分以内にデザイン審査室へ集合してください」

僕らは静かに座って、名前が呼ばれるのを待った。

「カーナンバー79、カンザス大学。カーナンバー1、テキサス A&M 大学。カーナンバー4、ワシントン大学。カーナンバー8、オクラホマ大学.....」

「よし、じゃあマシンをあそこに持って行こうか」僕は声色に興奮を見せないように言った。

プールの周りにいたチームのみんなが、寝そべった姿勢からゆっくりと立ち上がり靴とシャツを身に着ける間、アナウンサーは学校の名前を挙げ続けた。ウェズの準備が完了したようなので、彼にポスターボードを手渡してこう言った。「ウェズ、これを持っていい場所を確保してくれ」僕は自分のパソコンをつかみ、ウェズに続いてデザイン審査室へ向かった。

その前年は、オクラホマが 90 年初頭以来初めてデザインセミファイナルへ進出した年だった。みんなとても驚いていた。セミファイナルへ行くためにずっと準備をして来たのに、いざ進出すると何をしていいのか分からなくなった。予備デザイン審査は、審査員にマシンの基本を伝えて、自分たちのやって来たことの妥当性を納得させる機会であり、デザインセミファイナルではそれをさらに深く納得させなければならない。セミファイナルでは、細かいあらゆることを本当に考慮したのかを質問される。そしてそれ以上に、システムを本当に理解しているのかどうかを確認される。僕にとっては幸運なことに、エアロダイナミクスに対してはほとんど注目されなかった。トレイとカイルにとっては不運なことに、サスペンション、タイヤ、シャシーに対しては多くの関心が向けられた。僕がエンジン担当だった昨年と同じ経験をみんなで楽しんでいた。審査員のほぼ全員がサスペンションやシャシーに興味を持ち、5 人に 1 人がエンジンに関する基本的な質問をした。ジェームズがポスターボードとウイングの設計データを持っていたにもかかわらず、その年はエアロに関する質問はなかった。あまり期待してはいなかったが、とにかく準備はしていた。

準備は万端だった。デトロイトでのデザインイベントにはチームの全員が憤慨していたが、逆にそれを自分たちのシステムとマシンについてできるだけ多くのことを確認するためのチャンスと受け取っていた。

イベントが始まるとすぐ、クロードが僕らのマシンへ近づき質問をし始めた。トレイとカイルは両手を後ろに組んで立ち、時々ポスターのグラフを指さしていた。僕は聞き取ろうとしたがあまり聞こえなかった。審査員がマシンの周りを歩き回れるようマシンから距離を取っていたためだ。時々カイルの口から、僕には全く理解できないような言葉が聞こえてきた。

「.....車両がヨーからピッチに移行すると、Pajacka モデルによれば、リヤタイヤの無負荷時の摩擦係数が増加します。なぜなら、アウトボードアセンブリのコンプライアンスと組み合わされた力学がスリップ角の.....」

僕は辛抱強く後ろに立って、時々ボトルの水を飲みながら、誰かにこう尋ねられるのを待っていた。「エアロダイナミクスの担当は誰だ?」。1時間と2本のボトルの後、チャンスが来た。

「エアロの設計をしたのは誰だ?」フォードと書かれた灰色の帽子を被った太った背の低い男に尋ねられた。

僕は手を挙げた。たとえ実際にエアロを「設計」したわけで無かったとしても。設計のほとんどをこなした男は昨年既に卒業しており、今は数千マイル離れた場所にいる。だから僕が代理を務めることにした。

「これ本当に役に立つのか?」彼はウイングを指さして尋ねた。

「はい。このウイングによって時速 60 マイルのときに約 150 ポンド (68 キログラム) のダウンフォースを得ることができます」

「分かった。だが実際に速くなるのか?」

「典型的な FSAE スタイルのコースでは 1~2 秒のタイム短縮が見られます」

彼の眼は大きく見開かれ、まだウイングを見ていた。

「なるほど」彼はうなずいた後、僕の方を見て尋ねた。「君らのエンジン担

当は誰だ？」僕はクリスを指さした。

「ありがとう」そう言うと彼は立ち去って行った。

「これだけ？」ボビーに静かに尋ねる。「エアロの質問はこれでお終い？」

「気安く願望を言うと痛い目に遭うぞ」未だにカイルとトレイを質問攻めにしているクロードを指さしてボビーは言った。

「ああ、彼は僕らを本当に気に入ってるのか、本当に嫌っているかのどちらかな」と僕は言った。

ヘルメットを被り、完全にベルトを締めた状態でミシガン州立大のマシンに座っているマイク・オニール審査員長をボビーは見ていた。オニールはヘルメットをロールフープに打ち付けていた。おそらく頭の可動範囲とパッドが適切かどうかを確認したかったのだろう。

心配な口調でボビーが、「しまった」と言った。しばらく意味が分からなかったが、ボビーが心配していたことに突然自分も気付いた。

リッキーも同じように突然思い出したようだ。「ロールバーのパッドを取り付けなきゃいけない」彼は早口かつ、いつもの静かな声で言った。もし車検に適合しない箇所をデザイン審査員が見つけた場合、車検通過のステッカーを剥がしてしまうのはよくあることだ。既に車検に合格していたとしても、オニールがパッド無しのロールフープサポートを気に入らなかったら、技術車検をもう一度全部やり直さなければならなかっただろう。時間はあった。だが再車検のストレスに耐えるより、プールの周りで時間を費やしたかった。

リッキーはウェズに近づき、トレーラーからロールバーパッドを持ってくるように頼んだ。ウェズが歩き出そうとしたとき、リッキーは「急げ」と言い、走るジェスチャーをした。オニールがちょうどこちらに近づいてきたとき、ウェズは走り出した。

「では、君たちのマシンに乗ってエルゴノミクスを確認しますので、僕が乗るのに必要な準備をお願いします」

リッキーは手を伸ばし、クイックリリース付きのステアリングホイールを外していった。「さあ、どうぞ」

僕はいくつかの結束バンドを手に取りボビーへ渡した。オニールは、ペダルを踏み、ステアリングホイールを回して、運転席の感触を確認していた。エルゴノミクスの得点が低くなるようことは心配していなかった。このマシンは今まで僕が座った中で一番快適な車だった。シートの型を使ってラウンジチェアを作りたかったくらいだ。きっと眠りに落ちてしまうだろう。

ウェズは駆け寄ってきて、パッドを二つリッキーに渡し、リッキーはボビーと僕に手渡した。オニールは既にヘルメットを着用していたため、彼の後ろへ忍び寄り、それぞれのパッドをリヤのロールバーサポートへ当て、結束バンドで固定した。2秒も経たないうちにオニールはヘルメットを左右へと打ち付け、パッドをテストした。

オニールは降りると次のマシンへと向かっていった。ボビーと僕は結束バンドを切断し、パッドに黒いテープを巻き付けて丈夫にした。

「あと少しのところだったな」僕は静かにボビーへ言った。

言い終わるとすぐ、まだクロードと話をしていたカイルが僕を指さした。クロードが僕の方向へ歩いてきた。

「やあ、モット。ようやく会えて嬉しいよ」

クロードのアクセントはそれほど酷いものでも無かったが、正しく発音できていない言葉がいくつかあり、僕の名前はその一つだった。

僕はうなずいて言った。「僕もです」

これは僕が考えられる全てだった。

彼は一瞬口を閉じてから言った。「じゃあ君のアイロダイナミクスについて教えてくれ。どうやってシミュレーション結果と実測を比較した？」

「はい、シミュレーションによるとダウンフォースは……」僕はエアロダイナミクスのグラフ全てが書いてあるポスターへ向かって歩き、シミュレーショ

ン方法について解説し始めた。その中には、あの眠れぬ夜の大半を掛けて作ったスプレッドシートも含まれていた。彼は僕が説明を終えるのを辛抱強く待ってから質問をした。一般的なデザイン審査員にはない礼儀正しさだった。また彼は、何を聞きたいのか僕に推測させる代わりに直接的な質問をしてきた。

「ダウンフォースとドラッグに関して、アイロダイナミクスの目標値はどうやって設定した？」

僕らは3分ほど行ったり来たりした後、彼はこう言った。「話せて良かったよ、モット。とても感動した。私は他のチームのところに行かないといけない。だが、また後で話そう」

「願わくはデザインファイナルで」立ち去る彼に笑顔で言った。彼は肩をすくめるとそのまま歩いて行った。

僕がクロードと話している間、二人の審査員がカイルとトレイを捉まえていた。クリスは、僕らが使っていたドライブトレイン用の部品を作った会社のオーナーに対し、ドライブトレインの設計を説明するのに手いっぱいだった。

僕はボビーが立っていた場所へと戻った。

「なんとか大丈夫だったよ」

「そうか？」彼は尋ねた。

「そう思うけどね。消えてしまうよりかはいいだろう。確実に」

その日の暮れ、僕らは荷物をまとめてホテルへ戻った。ボビーはフィルへ電話し、加工の進捗を確認した。彼らはちょうどNC旋盤のコーディングを終えたところだった。これはつまり、徹夜を意味した。

翌朝、ちょうどみんなが起床して準備をしていたとき、フィルとブレットが新しいハブピースを手にして現れた。

フィルは寝なくても大丈夫なように見えたが、ボビーはホテルに滞在して数時間でも寝るべきだと言った。

「もしパブロとレイチェルを見かけたら、ありがとうとまた言っておいて欲しい」とフィルが言った。

「パブロとレイチェルって誰？」僕は尋ねた。

「CSUN の学生です。その二人が一晩中、僕らと機械加工に付き合ってくれたんです」ブレットは疲れ果てた様子で話した。「レイチェルはピンク色の髪をした女の子で、パブロは.....パブロって名前の男です」

会場のゲートが開くと同時に僕らは会場へ到着した。クリスはドライブトレインを分解し、ハブを交換し、イベントが始まる前に全てを元に戻した。

「プラクティスエリアにマシンを持って行ってテストする必要があるか？」僕は尋ねた。

「スキッドパッドとアクセラに早い段階で出走すればイベント自体をテストにできるし、何か修正が必要になっても時間が取れる」とクリスは言った。

「もしこれが壊れても直せるとは思えないが」とカイルは言った。

「僕らはいつでもこの愛おしい部品を溶接できるよ」と僕は言った。「熱処理が無駄になるけど、何もしないよりはましだ」

リッキーは自信を持って言った。「問題になることはないと思う。前回のハブよりも頑丈になっているし、そのハブだって今週予定しているくらいの走行には十分耐えたんだから」

リッキー、クリス、ボビー、そしてブレットが動的エリアへ車を持って行った。先行する車がコース上のごみを掃き出してくれるのを待ってから、4人は各イベントへ向かった。アクセラのタイムはデトロイトのときより少し速かった。悪くはないが、驚くほどいいわけでもない。ボビーのタイムは全体で13位だった。スキッドパッドのタイムはデトロイトのときと近く、クリスは3位に着けた。彼らは走行の度にスプロケットハブをチェックしたが、全く問題はなかった。

彼らがマシンをピットへと持って帰ってきた。僕らはみんなマシンの周りを

取り囲み、しばらく経つと何もすることが無いことに気付いた。そしてみんなはまたプールの周りに集まって、ゲータレードを飲みながら足を水へとつけた。ブレットとフィルはちょうど昼食前に現れてみんなと合流した。ミッシェルとグロリアは僕らのためにまた昼食を用意してくれた。そして僕らはお互いにサンドイッチを作り合うと、プールの周りに戻って食べた。

「みんな、CSUN の学生さんにお礼をしないと駄目よ」とグロリアが言った。

「もうしましたよ」とフィルが言った。「来年の車には『It's all about Pablo and Rachel』ってステッカーを貼るって言うておきました」

昼食の後、カイルと僕はオートクロス前のコースウォークへと向かった。カイルとも意見が一致したが、トラブルになりそうなエリアが二つあった。一つはかなりタイトなコーナーで、多くのチームがコーナー頂点のコーンを撥ねてしまうだろう。そしてもう一つは徐々に半径の大きくなるコーナーで、途中でアスファルトの路面が切り替わる。路面が変わればグリップも変わり、マシンはひっくり返ってしまうかもしれない。この現象はコンクリートからアスファルトへ切り替わるときによくあるのだが、2種類の異なるアスファルトでも起きる可能性がある。

僕らはパドックへと戻り、他のマシンが何台か出ていくのを待ってから、コースへマシンを押していった。オートクロスでは、デトロイトのときよりもずっとリラックスしていた。プールの周りで談笑することとキャンピングカーを持ってくることはいいアイデアだと確信した。

数台のマシンがコースを周回するのを見た後、僕はマシンへ乗り込み、暖気するためにエンジンをかけた。シートへ座って目を閉じ、頭の中でコースを走った。このコースはデトロイトのコースよりかなりタイトだった。つまり僕らのウイングはそれほど有利では無かった。

深呼吸、すぐに左、小さな右の高速コーナー、スラローム……。

何分か後に僕は言った。「じゃあ行こうか」

「今から？ もう何台か出走してコースがきれいになってから行った方が良くないか？」とカイルが尋ねた。

「いや、僕はリラックスして準備もできてる。コースは十分きれいになっているし、これ以上暑くなるとも思えない」

ブレットとボビーは待機列へと僕を押していった。目の前のマシンが走り出すと、僕はそっとマシンを前へ動かして停止した。そして頭の中でコースの続きを走り出した。目の前の2台のマシンを見て、どのコーナーでも明らかな問題が起きていないかどうかを確認した。グリーンフラッグが振られた。いつでも行ける。

僕は深呼吸をし、マシンを加速させる。すぐ左、右の高速コーナー、スラローム、徐々に大きくなるタイトな右、そして異なるアスファルトへの路面変化。路面が変わるときのグリップ変化は顕著だったが、マシンをひっくり返すほどのものでは無かった。大幅な修正が必要なエリアを見つけることなくコースを走り終えた。その後すぐに走り出し、今度はいくつかのコーナーを速く走るようにした。改善された2周目のラップタイムは1周目よりも1秒以上速くなっていた。

プッシュバーを持って待っているブレットとボビーのところまでマシンを走らせた。エンジンを止めて僕は尋ねた。「何位？」

「今日のファステストだよ」ボビーは淡々と答えた。

コース上でのパフォーマンスはデトロイトのときと匹敵していた。全ての学校が出走し全てのファーストドライバーが走行を終えるまで、僕らはずっと1位だった。セカンドドライバーが走り出すと、ミシガン州立大が僕らを抜き、そしてテキサス A&M 大がさらにそれを抜いた。カイルが出走すると、ほぼ1位に振り返いた。彼のタイムは A&M から 100 分の 4 秒遅れ。文字通り、一瞬の差だった。

パノラマ

「勝利の花は多くの花瓶に属する」——ミハエル・シューマッハ

カイルと僕はエンデュランスイベント向けのドライバーズミーティングに向かった。どのイベントにもドライバーズミーティングがあったが、昨年大会もデトロイト大会も僕らは参加していたので、何が言われるかは分かっていた。彼らはみんな基本的に同じ事を言った。イエローフラッグは注意、レッドフラッグは停止、ホワイトフラッグは前方に遅い車が居ることを意味する、と。彼らはいつも最後の二つについて追加の説明を行った。

「ホワイトフラッグはファイナルラップを意味するものではない。これは周回コースのレースではない。もしホワイトフラッグが見えたら、それは遅い車が前方に居るということだ。ラスト1周のサインを確認しない限り、ホワイトフラッグを見た後にフィニッシュに入らないように」

「レッドフラッグは安全にスローダウンし、コースの脇に出て止まることを意味する。ブレーキを強く踏んで、コースマーシャルの元に滑り込むことは意味しない」

全ての学生が同じ事を考えていた。そしてそのうち1人が言い出した。

「レッドフラッグが出た場合、ラップタイムはどうなりますか？」

オフィシャルは全員の心配を静めた。「その場合、そのラップの最初からリスタートすることができ、レッドフラッグのラップはカウントされない。正直なところ、我々がレッドフラッグを出すことは無いだろう。最後にレッドフラッグを出したのは憶えていない。確か10年前だったか。心配すらしていない」

ミーティングの後、カイルと僕はトレーラーに戻った。ちょうどトレーラーに着いたとき、スピーカーからアナウンサーの声が聞こえた。「出場チームの皆様、次のチームがデザインファイナルに選出されました」

アナウンサーは少しの間沈黙した。熱心に耳を傾けているみんなの方を見ながら、僕は静かにその声を聞いていた。

「42 番、ブリガム・ヤング大学.....、78 番、ミシガン州立大学.....、8 番、オクラ.....」

僕らの学校名を言い終わる前に、僕らはみんな同時に雄たけびを上げた。

「Boomer!」 グロリアが叫んだ。

みんなが大声で返答した。「Sooner!」

僕らはみんなファイナルに進出できるだろうと信じていたが、それでも驚いていた。目標は大会で優勝することだったが、デザインイベントはそれ自体で一つの競技として価値がある。それは最高のチームが集う場所であり、僕らはその招待を受けたのだ。

カイルの母親のミッシェルが僕のところへ来た。「ズボンのサイズはいくつ？」

「えっ、何？」僕は聞き間違えたと思って聞き返した。

「デザインファイナルのチームのために、あなたたち全員にフィットして良く見えるよう、カーキ色のズボンを用意しているの」

「ああ.....、32-32。もしくは 34-32、ズボンに依るんだよ」

彼女は笑った「カイルも同じだから、それぞれ一つずつ用意するわね、貴方たちで決めてちょうだい」

「いいよ」僕は答えた。彼女が立ち去るとき、僕は「ありがとう」と言った。

僕らはみんな、とって付けたようなぎこちない笑顔で、プールの周りに座って午後の休憩を過ごした。オクラホマ大の航空宇宙機械工学部長であるゴラハリ博士は、チームをサポートするために飛行機で来て、僕らとプールを囲んで

カリフォルニアの気候を楽しんでいた。

ブレットは今までの得点を集計しており、それによると僕らが大会で優勝するチャンスは非常に高いように見えた。全ての作業と努力、4年間の眠れない夜と手に負えない障害を乗り越え、僕らはフィニッシュラインまであとたった一日の場所にいた。

夕方近くになると、各チームは写真撮影のためにコースに集まるようにとアナウンスがあった。毎年、全てのチームがマシンと一緒に集まり、パノラマ写真を撮る。千人近くの学生が製作した、それぞれがまったく異なる百台近くのマシンを中心に、全ての競技者が一カ所に集った光景を見るのはとても興奮するものだ。大会の細部に忙殺されると、その規模に気付かなくなる。デザインファイナリストはいつも前方中央に立つが、とうとう僕らはそのチームの一つになった。カイルは僕らの場所を確保するために、他チームの好意に頼るようなことはしたくなかったようだ。

「マシンを用意しろ、行くぞ」彼はマシンの前で手を振りながら言った。「他のチームが俺らの場所をとる前に辿り着かないと。急げ」

ボビーがドライバーズシートに滑り込むと同時に、ウェズとブレットはマシンを押し始めた。カイルは先に向かった、おそらく僕らの場所を押さえるためだろう。全てのイベントはインフィールドコースで行われたが、写真はオーバルコースのスタート・フィニッシュラインで撮影された。スタート・フィニッシュラインに到達するためには、マシンを押してインフィールドの芝生を越えなければならなかった。ボビーはマシンを降り、マシンを押すメンバーを手伝った。

「もし僕らが勝ったら、インフィールドでドーナツターンさせてくれると思う？」リッキーが尋ねた。

「それは無理だろう」僕は笑いながら言った。僕も同じことを考えていた、そして他のみんなもそうだったと確信している。

僕らがマシンを前の方に置くと、ホイールが一つ無くなった状態のマシンを押してのろのろと芝生を横切るチームに気付いた。彼らは不運にも、その日の早いうちにサスペンションに不具合が出て、ホイールを破損してしまっていた。二人がマシンを押して、二人が残された右フロントサスペンションを使ってマシンを持ち上げ、ゆっくりとマシンを引っ張ってインフィールドを横切っていた。彼らが全員から見える場所まで来たとき、声援が始まった。最初はゆっくりだったが、みんなが顔を上げて、大破したマシンを熱心に引っ張り芝生を横切るそのチームを見た後、すぐにみんなが歓声をあげた。マシンのフロントを持ち上げていたそのチームの1人が、勝ち誇ったようにガッツポーズをした後、またマシンを引っ張り始めた。壊滅的な事故の後ではあったが、諦めて帰路につこうとしないこのチームには、依然として小さな成功が残されていた。

パノラマ写真は、全てのチームが同じ場所に一緒に居る唯一の時間だった。疲れ果てた何百人の学生がそれぞれのマシンの周りに集まった。この同じ場所に到達するために、みんながどんな完全に異なる過程を通過してきたかを僕は考えていた。まだ芝生の中に居る、壊れたマシンを持つチームは別として。

彼らがようやくコースに到着し全員が並ぶと、カメラマンはいくつかの写真を撮って、プリント写真の注文を受け付けているとアナウンスし、そして辛抱強く待ってくれたことにお礼を言った。

僕は冗談半分で言った。「僕らはオーバルコースを1周するべきかな？ 全長で2マイルあるが」

ウェズは肩をすくめると、「オーケー」と言った。

具体的に指定されたいくつかのエリアを除き、どこにも行かないように言われたことを鑑みると、コースを走ることは良からぬ考えだと思った。でもウェズはまともな善悪の判断ができるので、彼が準備を始めたとしてもたぶん大丈夫だろうと思った。少なくとも、それほど良くないことでも無いとも思った。僕らはスタート・フィニッシュラインに並んだ後、走り始めた。僕は、オーバ

ルコースの車のタイムと比較できるように、ストップウォッチを使って僕らのタイムを記録できたらと考えた。御存知のように、車は 46 秒に対して僕らは 20 分だ。しばらくして、僕は息が切れた。

「待って、息……させて……」僕は歩き始めると同時に言った。

「今スタートしたばかりでしょう」ウェズは笑いながら言った。

僕は消極的な口調で「分かったよ」と言って、また走り始めた。さらに数分後、息を吐きながら言った。「駄目だ、調子が悪い。このコースは長すぎる」

僕は再び止まる前に、さらに数十メートル進んだ。

「僕……僕は……もう無理だ」僕は一息つくためにもたれかかった。ウェズは立ち止まったが、明らかにまだ走り続ける気にいる。僕はまだスタートラインが見える場所にいた。僕は壁を見上げて、「ターン 1」と書かれた巨大な塗装看板を見た。

「僕は……ターン 1 さえ通過できないのか……」僕は寄りかかったまま一息つきながら言った。「このレースで車を使わせてくれたらいいのに」僕は前方を見て、ゴールするのは本当に難しいと思った。僕はどのやってターン 2、ターン 3、ターン 4、そしてフィニッシュラインまでのショートステントを通過しなければいけないのかと思った。それは長い距離だった、しかし僕はこのバカげたことをすると決めたときでさえ、諦めるという考えを本当に嫌がった。狂気の決断と、確実な失敗がもたらす不本意な降伏との板挟みの中で、トラックが僕らに向かって動き出した。——神よ、ありがとう。僕はあきらめること無く、やめることができる。——

「君たちはコース上に出ることはできません、戻ってください」トラックのドライバーは言った。

僕らは同意すると、彼はトラックで走り去った。

「正直、10 分くらいで走り終わられると思っていたんだけど」僕は笑顔で言った。

「はいはい」とウェズは答えた。

僕らがパドックに戻ると、ボビーが尋ねてきた。「走り切れたか？」

「ターン 1 までは行ったよ、これは走り切れたことになるのかな？」と僕は言った。

「コースの警備員に止められたんです」ウェズは付け加えた。

「あそこ以上は無理だったろうね。走る練習をして、来年戻ってきてもう一度挑戦するよ」

「卒業した後に？」ウェズが尋ねてきた。

「卒業生として戻ってくるよ」

「デトロイトに住んでいても？」

「ウェズ.....」僕は微笑んで頭を振りながら言った、「いつか調子が良くなるって夢を見させてくれよ」

僕は本当に調子が悪かったわけではない。レースウィークエンドは人を疲れさせるものだ。チームメンバーは時々、大会後の不鮮明でもやもやしていることについて話した。この一年を費やした全ての強迫観念が終わりに達したことの実感についても話したが、ほとんどは、この 1 週間ずっと 1 日 20 時間も疲労困憊させるストレスに耐えたことについてだった。この 1 週間はデトロイトに比べればある程度リラックスしたものだったが、それでもまだ疲弊させられていた。みんなほとんど眠っておらず、太陽の下、毎回マシンを 1 マイル押して回り、エナジードリンクと執拗な無慈悲さの中を生き抜いてきた。プールでくつろいでいるときでさえも、焼け付くような太陽の下、エネルギーが流出してしまっていた。振り返ってみると、オーバルを 1 周できなかったことはいいことだった。その次の日は大仕事のエンデュランスイベントが待っていたからだ。

僕らは荷物をまとめてホテルに戻った。翌朝は大事な 1 日の始まりであり、できる限り睡眠をとる必要があったのだ。

限界で踊る

「そして限界に触れた瞬間、何かが起こり、突然ほんの少しだけ前に進むことができる。精神力、決意、本能、そして経験によって、より高く飛ぶことができるのだ」——アイルトン・セナ

僕は暖気のためにエンジンを始動した。クリスは自分のノートパソコンをマシンのコンピューターにつないでいたので、エンジンが十分に温まるタイミングを知ることができた。

「このドライビングスーツ、クソ暑いな」僕は目を閉じ、頭を後ろにそらせながら言った。僕らのドライビングスーツは黒の分厚い耐火服で、アイディタロッド犬ぞりレースで使う方がずっと適していただろう。気温が 80°F (27°C) を超えるときは快適とは言えなかったが、450°F (230°C) を超えるときは逆にものすごく評価されたであろうと確信している。「下着で運転しても許してくれるかな？」

僕は緊張感を解そうと、気を紛らわせるために話しかけてみた。

トレイは肩をすくめた。面白く無さそうだ。

「水をくれ」僕はカートの中にある半分空のボトルを指さした。僕はドライビングスーツのジッパーを半分空けた。

彼は水を僕に手渡して言った。「これ、やらない方がいいって去年言われたけどな。最初は気分がいいけど後で不快になるからって」

猛暑と緊張感からくる汗で既に濡れていたのも、少しのシャワーで快適さが

失われるとは思えなかった。僕はシャツに水を注ぐと、冷たい爽快感に包まれた。上部のファスナーを開けたままにして、水がゆっくりと蒸発してシャツがさらに冷えるようにした。

「ああ、蒸発潜熱……」僕は静かに言った。

「何？」トレイは尋ねた。

「気にしないで。いつスタートできるんだろう？」

このセリフが合図になったかのように、無線機を手にしてクリップボードを脇に抱えた男がこう叫んだ。「いいかみんな。あと 5 分でスタートだぞ！」彼は5本の指を広げて同じことを何度も繰り返しながらマシンの列まで歩いて行った。

僕は深呼吸した。

僕は一瞬静かに座って落ち着こうとした。カイルは僕に話しかけるのを止めた。きっと僕がどれだけ緊張しているかが分かったに違いない。心臓の鼓動でプールを空にできそうなくらいだった。4 年間にわたるマシンの製作、4 年間の執着と最悪の成績、有害な口論、そして深夜のエンジニアリングの果てに、僕らは大詰めまであと 20 周を残すだけとなった。総合優勝のトロフィーまで、あと 20 周。僕らがここ数年でどれくらい進歩したのか良く分かっていなかった。細部に集中しすぎていると、一步下がって全体像を把握するのが難しくなってしまう。しかし今全てが明らかになった。

僕は初めての大会のことを思い返した。デザインファイナリストたちと、誰よりも速くコース上を走り回るチームたちを見ていたときのことだ。彼らはものすごく遠い存在で、オクラホマにある知名度の低い州立大学では届かないようなレベルに見えた。しかし僕らはやってのけた。トップレベルに到達したのだ。コース上で最も速いマシンのひとつであり、デザインも最高のマシンのひとつでもある。僕がやるべきことは、速く走り、かつ、ミスをして台無しにしないことだった。

僕は深呼吸をすると、目を閉じて頭の中でコースを走り始めた。左に出て、1速で加速しすぐ右、ターン1の真ん中にラインを採って、第2エイペックスを過ぎた後に加速。僕は何度もコース全体を走った。僕は1周以上集中することができなかったが、気が散るたびにコースに戻った。練習によって完璧に至ると言うが、完璧な練習のみが完璧に至るのであって、完璧な練習のただひとつの方法は、頭の中でそれをやることだ。残念なことに、コースを見ただけではどう運転すべきか分からない箇所が常にあった。ただ自信と経験を持って運転し、運転の途中でそれを理解する必要がある。右肩の「地獄より速く走れ」と言ってくる小さな悪魔と、左肩の「生命保険に入っていないでしょ」と思い出させてくれる母親がずっと闘っている。

このように、エンデュランスには二面性があった。その一つの面は、オプション付きのスラロームだった。通常スラロームには、最初のコーンに進入方向を示す指示用コーンが横に置かれているが、時にはドライバーに任せるときもある。スラロームコーンが置かれている場所に迷った場合は、どちら側から進入してもかまわない。通常、どちらが速いかは明らかだが、場合によっては前のコーナーからどれだけ速く脱出できるかを把握しておく必要がある。言い換えれば、フルスピードでスラロームを運転している間に、オーディブルをコールする必要がある。

——ブルー42番！　ブルー42番！　左に行け！　セット、ハット！——

エンデュランスのもう一つの確信を持っていなかった面は、2カ所ある基本的なレーンチェンジセクションだった。レーンチェンジセクションにはまずストレートがあり、その後コーンの壁が現れて、すばやく左に切り替えなければならない。するとまた別の壁が現れて今度は右へ切り直さなければならない。このセクションの前には急旋回からのスラローム区間があった。つまり、コーナーを脱出し、スラロームを過ぎると、レーンチェンジだった。どの操作もその前の周回より速くなっていくが、僕は底面から伸びたアクセルペダルだけで

全てこなせると感じていた。僕の計画の唯一の問題は、最期のレーンチェンジセクションに到達した時点で、時速約 70 マイルになってしまうことだった。コースを逸脱すれば、横向きになったマシンが 40 以上のコーンをなぎ倒すことになる。僕はまず気楽に運転し始めて、簡単にできそうだと感じたら数周後にトライしてみようと決めた。

クリスが視界に入り、喉の前で手を振った。エンジンを止める合図だ。彼はノートパソコンを閉じ、マシンからプラグを引き抜いた。

「2 分前！」クリップボードを持つ男が言った。

僕の心臓は再び早く鼓動し始めた。

「よし、スーパーファスト。練習通りやろう。速く走れ。コーンには触るな」とトレイは言った。

僕は吐きそうだった。考えが気になったわけではない。ただ運転がしたかっただけだ。僕は再びコースに集中した。左に出て、1 速で加速したらすぐ右、ターン 1 をなぞったら第 2 エイペックスの後加速……。アウト側からターン 2 に入ってるべくワイドに、可能な限りストレートでスピードをのせる……。ハードブレーキ、そしてブレーキを引きずりながらコーナーに入る……。——あんなに水を飲むんじゃないかった。——なんて暑いんだと僕は思った。——コースに戻ろう。——ブレーキを引きずってコーナーに入って、内側のスラロームに入る。テキサス A&M 大のドライバーがエンジンを始動させ、スタートラインへと動かした。僕はエンジンを始動させ、1 速に入れた。僕は進行方向に何も無いことを確認するため周りを見渡し、A&M が居た場所にマシンを止めた。グリーンフラッグが振られると、彼はコースに飛び出していった。グリーンフラッグを持ったマーシャルが、僕に前に来るように手を振った。僕はゆっくりと前進して止まった。彼はコース上の A&M の方を見た後、僕にグリーンフラッグを振った。僕は深呼吸した。

僕はクラッチを離すと、揺さぶられながらコースに入った。加速後すぐ右、

ターン1を惰性走行する。このターン1の惰性走行は、ターン1のドリフト走行へと変わってしまった。タイヤはまだかなり冷えていて、グリップが低かった。

「オーケー、マット、もう少し慎重に冷静に行こう」僕は自分に言い聞かせた。

ターン2のアウトから進入し、可能な限りスピードを維持する。マシンは若干横滑りしているようだ。まさに危険と隣り合わせだった。コーナーの出口で加速し、ブレーキを少し強く踏み次のコーナーに入った。僕らのようなオープンホイールの車では、タイヤがロックしているかを簡単に見分けることができる。なぜなら、目の前にある二つの黒い丸い物体が回転しなくなるからだ。それがブレーキを少し緩めるための合図となる。僕は次のコーナーをかなり上手く通過し、スラロームに入った。スラロームで加速し、出口でフルスピードになるまでアクセルを段々と開けていった。僕は最初のレーンチェンジセクションのためにアクセルを若干緩め、足を後ろに下げた。僕は2番目のレーンチェンジのためにアクセルを緩め、同じように運転した。

「もっとスピードを上げられる」僕は自分に言い聞かせた。

僕はヘアピンを完璧に通過した、あまりにエイペックスが近かったので、コーンのベース上をタイヤが通ったように感じた。バターゾーンだ。コースの残りを走り続け、タイヤが熱くなるにつれてグリップが増すのを感じていた。気分の悪さはどこかへ消えた。不安感も、周りの人から見られていることも、全部完璧に忘れ去っていた。ここには僕とマシンと400個のコーンしかない。

僕はオプションスラローム前の最後の高速コーナーに来た。コーナーを通過する間、周辺視野で高速コーナーのコーンを捉えつつ、スラロームの最初のコーンを見つめた。

「左か？ いや違う、右.....右？」

決断しなければならない地点まで来て、それは明確になった。僕は左から入

った。僕はスラロームの前の空いている右に行って、最初のコーンを真っ直ぐなぎ倒していくことを考えた。

「レースに戻れ、マット。集中しろ」

スタート・フィニッシュライトを通過し、コースマーシャルが僕にどの旗も出していないことを確認した。僕は最初のコーナーに入った。このときには既にタイヤが温まっていたため、上手く走ることができた。レーンチェンジの操作に入ると、僕はペダルを少し強く押し込んだ。

「よし……まだスピードを上げられる」と僕は自分に言い聞かせた。まるでこの言葉が自分に自信を与えてくれることを期待するかのよう。

この時点でコース上には4台のマシンがあり、それぞれがほぼ等間隔に広がっていたが、僕は自分の前のマシンがだんだん近づいてくるのを感じていた。ひとつの大きなコーナー、高速コーナーを通過する度、他のマシンとの差を広げた。エアロダイナミクスのおかげだ。僕はコーナーをいくつかさらに改善することに集中した。マシンの挙動を感じ取り、どうやってより速く走る方法を考えた。

「ここは1速で脱出」僕は自分のためにメモを残すように言った、「ターン6ではもっとインサイドに近づこう」

スラロームとレーンチェンジの直前のコーナーを攻めながら僕は言った。「よし、行け！」自分の力を信じ、最後までやり抜く決意を固め、ペダルを踏み込んだ。

僕は足をさらに少し強く押し込み、スラロームをできるだけ速く走った。タイヤがトラクションの限界で滑ったとき、肩の悪魔は熱狂的に笑っていた。僕は全てのスラロームコーンのベース部を通過し、それでいてコーンは動かない。ここはバターシティーで、僕は市長だった。ペダルを思いきり踏みながら、僕は最初のレーンチェンジに入った。マシンは少し横滑りしながらストレートに入り、僕は地獄より速く走った。なんて速いスピードで入ってしまったのだと

考えながら、僕は罪を犯してしまっていた。マシンが僕の入力に反応するはずが無いということは頭の中でずっと感じていたが、とにかくやってしまったのだ。僕はステアリングを急遽右に切り、マシンを真っ直ぐに戻した。マシン全体がコースを横に滑り、四つのタイヤはコントロール不能になってしまった。僕は時速 70 マイルで進んでいたが、左タイヤは次々とコーンをなぎ倒していった。

「クソ！ クソ！ クソ！ クソ！ クソ！」

僕はターンに入るときにカウンターステアを切ることができず、コーンを直進した。100 万ドルの宝くじのようにステアリングを握り、自分自身がコーンに当たる危険があったにもかかわらず、右に切った。タイヤはグリップを取り戻し、僕はすぐにコースの真ん中に戻った。

僕はすばやく深呼吸し、次のコーナーのためにブレーキに足を置き、レースに集中した。

「エイペックスを過ぎてダウンシフト、1 速で脱出」

温度警告灯が点いたのが見えたため、僕は温度を確認するためにダッシュボードに目を落とした。——3 周目でもうに 235°F (113°C)？ まあ大丈夫、235°Fならレース可能だ、問題ない。——僕はいくつかの場所で少し妥協することにした。ラップタイムを犠牲にする事無く、エンジンを労わることができる、いくつかのコーナーがあった。ラップ毎に 0.1 秒ずつ失っただろうが、エンジンが熱くなり過ぎないようにする必要があった。

僕は最小限のエンジン負荷とスピードのバランスを取りながら、運転に集中して周回を重ねた。片方の肩に居る悪魔は右足に降りてきて、ピッチフォークで小突きながらもっと速く走るようそそのかしてきた。しかし一方で左肩のホンダエンジニアは、このエンジンはこんな酷使のために設計されているわけではないと言っている。楽観的に考えても、僕はテキサス A&M 大を抜くことができただろう。彼らの最も速いドライバーはオートクロスでカイルより辛うじ

て速い程度だったが、僕は彼らの遅い方のドライバーより断然速かったからだ。二人のドライバーが 20 周する合間に、僕らがエンデュランスタイムで最速になるだろうことは分かっていた。A&M を抜いた後、僕はもう 2 台をなんとか抜くことができた。僕らは順調に 1 位になった。僕らは勝ったんだと、僕は悟った。

4 年間に渡ってマシンを製作し、週に数十時間を費やし、成績と睡眠を犠牲にし、大学での経験についてよく耳にし、そして僕らはありふれた 50 位の学生グループから 1 位のチームへと変貌したのだ。僕らはステージに上がって大きな輝くトロフィーを手に入れ、それから偉大な輝かしい仕事へのインタビューを受ける準備ができていた。

「もう少しだけ走りたい」僕は静かに言った。「もう少しだけ」

しかしまだ終わってなかった。僕は落ち着き、毎週毎に改善しようとしながら集中するように心掛けた。

コーナーから脱出して、3 速に上げるためにシフトアップボタンを押したが、何も起こらない。エンジンはレブリミッターに当たりはじめ、僕はもう 1 回シフトアップボタンを押した。まだ反応が無い。

「クソ！ 反応しろ！ 反応しろ、いい加減にしてくれ！」僕は叫んだ。僕はシフトアップとダウンのボタンを何回か押したが、何も起こらない。シフターが壊れて、2 速に固定されてしまった。高速セクションは 3～4 速の領域であり、レッドゾーンでエンジンを回転させているとあっという間にエンジンがオーバーヒートしてしまう。僕はすぐにクラッチを入れて、全てのストレートを惰性で走った。僕は膨大な時間を失っていたが、長い時間エンジンを 15000rpm で回転させることはできなかった。

「頼む、来い、来い。僕らならできる！ 来い！」マシンが備えているべき加速力を感じることもできただろう。僕が到達すべき速度を感じることもできただろう。でもここには無かった。あるのはゆっくりとした惰性走行だけだっ

た。僕はコース上で最も速いレースカーでスタックし、最も遅いラップタイムを刻んだ。

エンジンの音が徐々に大きくなるのが聞こえた。エンジンオイルの過熱によって内部の部品が暴れ、周りを削っていく音だ。少なくとも 250°F (121°C) だったに違いない。その温度でエンジンを再始動するのがどれだけ大変か考えた。エンジンが止まったらすぐ固着してしまうだろうと確信していた。僕は別のストレートに入って、エンジンを 15000rpm まで上げ、クラッチを入れた。激しい加速の後、開けているコースを目の前にして痛々しくスロー走行を行う。エンジンからの過剰な熱により、シートが熱くなるのを感じた。「来い！ 僕らならできる！ 来い！」僕は声の限り叫び、前後に揺れて少しでも追加のスピードを得ようとした。「行けーーーー！！！」僕は完走できないのではないかと心配し始めた。まだ半分にも到達していなかったし、3 周目からはずっとオーバーヒートしている。2 速に固定された状態で、どうやってカイルはさらに 10 周するんだ？ そもそも再始動できるのか？「頼む。あと数周だ。あと少しだけ。大した距離じゃないだろ？ 大した距離じゃない」僕のフラストレーションは、怒り、そして失望へと変わっていった。僕は悲しみの段階を進んでいたが、まだマシンから降りてはいなかった。

僕は再びレースに集中した。コーナーではスピードを保って進入しスピードを維持する。レッドゾーンまで加速して、クラッチを切る。待つ。待つ。待つ。サンドウィッチを作って、本を読む。「クソ、行け！！！」汚い言葉遣いで叫び、ブレーキを強くかけたが、もはや時速 30 マイルしか出ていなかったのもそれほど強くもなかった。僕はフラッグステーションを通過し、バリアの後ろに居る男がラスト 1 週のシグナルを出した。僕は最期のラップを非常に遅くして、カイルのためにできるだけマシンを冷やそうとした。僕はこの状況をどうやって説明しようかと考えたが、彼はおそらくそのほとんどを既に理解していただろう。

ドライバー交代前の最後のストレートで、僕はクラッチを切り、ドライバーチェンジエリアまで惰性で進んだ。僕はマシンを止め、エンジンを切り、ステアリングホイールを外して叫び始めた。

「2速でスタックしてる！ 7周はオーバーヒートしてる！ ストレートは惰性走行しなきゃいけない、マジでクソだ！」カイルはマシンに乗り込みシートベルトを締めるとき、とてもリラックスしているようだった。彼は冷静さと集中力を保とうとしていたのだと思う。しかし今の僕らはいいドライビングなんてものからは遠く離れていて、「神様どうか僕らを完走まで導いてください」状態だと思った。「聞いているのか？！」僕は尋ねた。彼はうなずいた。クリスは僕の肩に手を置き、引き戻した。僕は後ろに引き下がった。

僕はヘルメットとグローブを脱いでパニックを起こしながら言った。「再始動できる状態じゃない。エンジンをかける方法が無いんだ」

僕らはカイルがシートベルトを締めて準備が整うのを静かに待っていた。エンジンからの熱で、すぐ上の空気が揺れているのが見て取れた。彼の準備が終わると、検査員は彼のシートベルトとレストレイントをチェックして、前進するように合図を出した。彼はクラッチを切り、スタートボタンを押した。数回クランクした後、エンジンがかかった。

「何てことだ」ショックで立ち尽くして言った。「始動しやがった」僕はクリスを見てさらに言った。「信じられない」

カイルはグリーンフラッグを受けると、コースへ出走していった。彼は最初の数コーナーを完璧に通過した。僕らの交代が功を奏した。僕は集中力と感情のコントロールをほとんど失っていたが、彼にはまだ上手くやるだけのモチベーションがあった。

ストレートを直進すると、彼はレッドゾーンまでエンジン回転を上げ、クラッチを切って惰性走行した。僕は彼を見ているだけで、不安を感じていた。彼が僕らのところに戻ってきたとき、僕はエンジンからのノッキング音を聞くこ

とができた。おそらく、コンロッドベアリングが焼きついているのだろう。もちろんその時点までに、いくつかのコンロッドベアリングとクランクシャフトベアリングがおそらく焼きついている。ベアリングの一つが完全に破壊され、クランクシャフトの拘束力が落ちた結果コンロッドがエンジン内で暴れだし、その音は大きくなっていった。エンジンがあと9周も耐えられる可能性はほとんど無かった。カイルはコーナーで彼ができる限りのベストのドライビングをし、辛抱強くコーナーを待ちながらストレートで惰性走行を続けていた。完全にエンジンが壊れれば、ベストを尽くしてフィニッシュしようとする彼の努力が無駄になってしまうことは分かっていた。彼は僕らから見てコースの反対側にあるヘアピンを周回していた。僕はエンジンがすばやく立ち上がる音と同様に、レッドゾーンに差し掛かったとき、エンジンから大きい火の玉の爆発音が聞こえてきた。マシンはスピナウトし、1ダースのコーンをなぎ倒した後、コースの端で停止した。

コースマーシャル全員がレッドフラッグを振り、他の全てのマシンが停止するのを見ながら、僕はショックで呆然と立ち尽くしていた。安全作業員が僕らのマシンに消火器を吹きかけると、燃え上がりかけていた炎はすぐに消えた。カイルはマシンから降りて、歩き去っていった。

全てのマシンのエンジンが停止し、静かになった。僕はヘルメットを落とし、目の前の光景が信じられず、啞然として立っていた。

それは起こってしまった。エンジンが壊れてしまったのだ。全てが終わった。僕らの勝つチャンスは完全に絶たれてしまった。僕らが費やした作業時間、犠牲にした睡眠、出席できなかった授業、マシンを完成させて、車検を通過させるのに使った時間。全部終わったのだ。僕らのチームの1年の集大成は、オイルと消化剤の粉で覆われて、コースの横でくすぶっていた。

コースマーシャルは邪魔にならないように僕らのマシンを押して、僕らが作ったマシンの残骸を丁寧に掃除し、コースの周りに散らばっていたコーンを拾

い上げていた。僕はゆっくりとピットに歩いていき、水のボトルを開けて、日陰に座った。

モータースポーツは限界で踊ることへの挑戦だ。僕らは限界に近づきすぎ、滑り落ちてしまった。ある人はベストを尽くし、多くを学んだことが一番大事だと言うだろう。もしくは、これはただの競技会で、知っている人は少ないし、興味がある人はもっと少ないから問題ではないという人もいるだろう。しかし、それは問題だった。ここ数日で、それは何よりも重要だった。僕らをここに導いたのは、情熱と、できる限りのベストを尽くそうという闘志と、あともう少しだけやろうという気力だった。ウィスコンシン大、ペンシルベニア州立大、テキサス A&M 大のような強豪校を見て、チームのメンバーそれぞれがみんなこう言った。「あのレベルになりたい。最高のマシンを作るチームの一員になりたい。優勝したい」。この瞬間から、僕らは現状を全て投げ出して、勝利のために多くのことを費やした。レース業界での職を得るための一見果てしなく続くパニックと勝利への執着の中で僕らは出会い、成長し、そして最高の友人とエンジニアになった。ここ数年間、僕らは他の何よりも情熱を持って過ごしてきた。この一年は、「全ては楽しむため、重要なことじゃない、できることをやるだけだ」なんて言っている暇は無かった。そんなことを言っているチームは 50 位で終わる。僕らが歩んできた道のりは、最高であることへの執着を必要としていた。僕らは限界のギリギリの所で踊った。予算と、時間と、僕らの長所と、そして短所の限界で。限界から滑り落ちるたびに、僕らは車の、技術の、チームワークの何たるかを学び、僕ら自身についても学んだ。それは僕らがあきらめることなく、その責任を負うことを選んだからだ。幸運というものはときに、大きなトロフィーと、ただ家へと帰る静かで長い旅の違いとなることもある。しかし僕らは幸運というものをそんな風には決して定義せず、その幸運が生み出す機会をどのように利用するかによって常に定義してきた。

エンジンの始動する音が聞こえると、僕は顔を上げ、まだコース上に残っていたマシンがスタート地点に戻っていくのを見つめた。コーンは元の場所に戻され、僕らのマシンはコースから離れた遠くの小さな建物の後ろに押し出されていた。コースの南側に、腕を組んで立っているクロードがこちらを向いているのが見えた。いや、こちらではない、僕を見ている。

「デザインファイナル……」僕は小さく呟いた。

僕は飛び上がると、すぐコースの境界まで歩いていった。ドライバーチェンジエリアにいたオフィシャルの恰好をした人に僕は手を振った。

「デザインファイナルのためにマシンが必要なんです」彼が到着する前に僕は言った。

「何が必要だって？」彼は無線のヘッドセットを外しながら尋ねた。

レースカーが走っている騒音のため、僕は大声で話した。「あと 1 時間でデザインファイナルです。僕らはマシンが……いや、あのくすぶっている残骸が必要です！」僕はくすぶっている残骸を指さした。

彼は笑って言った。「おお！ ……じゃあ……後ろから押して回って来ないといけないな！」

「オフィシャルの誰かが向こう側で待っていてくれたら、何人をコースの後ろまで行かせます！」僕はインフィールドの壁の反対方向を指さしながら言った。

彼はコースの向こう側を振り返ってから、僕を見て言った。「オーケー！」

カンザス大チームのメンバー二人と共に立っていたカイルに僕は走り寄って行った。

僕が何か言う前に彼は言った。「デザインファイナルのためにマシンを持ってこないといけない」

「分かってる」僕は言った。「コースの反対側に居る人たちの中に、僕らのチームの人間を待ってる人が居る」無線機をボビーに渡し、彼に数人をインフ

ィールドの壁の反対側に送るよう伝えた。

彼はヘッドセットの片側を耳に当て、メッセージをボビーに伝えた。

僕はピットカートに走り寄ると、ドライビングスーツを脱いだ。カリフォルニアの夏の暑さの中、T シャツとボクサーパンツだけになって、200 人の学生の中に立って僕は思った。——デザインファイナルに出るんだ。——そしてなんとか半分の笑顔を絞り出すことができた。

ファイナル

「レースで2位になったとしても、それを覚えているのは
嫁とペットの犬だけだ」——デイモン・ヒル

トレーラーに戻る前に、リヤウイングが前に折り曲げられているのが見えた。初め、チームの誰かがエンジンを清掃するために外そうとしたのだろうと思ったが、よく見るとサポートが真っ二つに割れていることに気付いた。

「一体これはどういうことだ？」僕は尋ねた。

リッキーが答えた。「ああ、きっと腹を立てるだろうなと思ってたよ」

「何があったんだ」

「火が収まった後、コースの作業者がリヤウイングを押してマシンをコース外に押し出そうとしたんだ」と、リッキーは人ごとのように言った。

僕はうんざりして、彼が話し終わるのも待たずに腕を投げ出した。

「おい、冗談だろ。一体何なんだよ？」

壊れたウイングを見ていると、そのすぐ後ろにあるエンジンに大きな穴が空いているのに気付く、僕はすぐに我に返った。僕は肩をすくめた。

「まあ、最後に起こるトラブルとしては、最悪なものでも無いか」と僕は言って、トレーラーに向かって歩き始めた。

みんな既にオクラホマ大のシャツとカーキのパンツを着ていた。僕はバックパックから中途半端に畳まれた自分のシャツを取り出した。それを着てから、シワを伸ばそうと裾を引っ張り、そして手を離してシワがまた元に戻るのを少

しがっかりしながら見ていた。ただ周りを見てみると、シャツはそのままの状態の方がみんなと合うことが分かった。メンバーのほとんどは予備デザイン審査とセミファイナルのときからずっとシャツを着っ放しだったため、そのシャツは理想的な状態よりも、少し汗ばんで、くたびれて見えた。実際のところ、僕らがほんの一瞬前に勝利への希望が火の玉となって吹き飛んでいった疲労困憊のチームだと考えれば、汚れたシャツを着ていてもそう悪い恰好では無かっただろう。チームメンバーの何人かは、マシンの見栄えをよくするためにエンジンに付着したオイルや消化剤の粉末の清掃を始めた。一部の上級生メンバーは、さらに数分間掛けて担当のシステムについて詳細に調べていた。僕はもうこれ以上調べることができなかった。それにそんなことはどうでもいいんじゃないかと思った。授業の期末試験ならばともかく、デザインファイナルは土壇場の悪あがきでどうにかなるようなものではない。僕はテープを手にとって、ウイングの修理を始めた。黒のダクトテープをぐるぐる巻きにした添木を当てて、応急的な外観の修理をした。

「ともかく行かないと。誰かポスターとスタンドを取ってくれ」ボビーが毅然と言った。

僕はポスターをつかみ、ブレットにスタンドを持ってくるように頼んだ。僕らは、いい場所を確保しようとデザインエリアに向かった。僕らが会場に着いたとき、いい場所は既に三つ取られてしまっており、他のデザインファイナリスト達が準備を進めていた。僕らは後ろの隅まで歩いて、自分たちのスタンドとポスターを設置した。僕はブレットに、みんなのノートパソコンが乗るようなテーブルを一つ、建物の反対側から持ってくるように頼んだ。重要な情報はほとんどポスターに載せていたが、念のためにノートパソコンを用意しておくことも大事だった。

僕は自分たちのエリアを見渡して、全てのものが揃っているかを確認して、深呼吸をして、そして両腕を背中に回すという、誠実でオープンな姿勢を見せ

るボディランゲージをできる限り試して待った。

「このウイングの形態はどのように決めたんだ？」

「それはつまり、エレメントの間隔といった……」

「そうではない。私が聞きたいのは、分割されたウイングの一つがフロントに、そしてもう一つがリアにある理由だ」

オーケー、考えろマツト。審査員が本当に聞きたいことは何だ？ そして確認しようとしていることは何だ？ 彼らが確認しようとしているのは、他の選択肢も検討したのか、そして検討したならば、今の形態がより良かったことを解析やテストで検証したのか、という内容だ。

「まあ、初め我々は、他のいくつかのチームがやったのとは異なるアイデアを探したのと、複数の新しいアイデアを設計ミーティングでいろいろ検討して……」

「というと？」

「ドライバーの上に一つの大きなウイングを取り付けることを検討したのですが、ドライバーの緊急脱出要件を満たすクリアランスをとると、重心位置が現状のこのセットアップよりも上になる可能性がありました」

「どのくらい？」

この男は容赦しなかった。

「えっと……、詳しくは覚えていませんが、今のこのセットアップよりもかなり高く、ちょうど4分の1インチ強といったところです。私たちはまた、ダウンフォースを増大させるためにアンダートレーの使用を考えましたが、コンピューターシミュレーションによればダウンフォースへの影響は比較的小さく——」

「何と比較して？」

「ウイング単体と比較して、です。そして、それを付けるにはラジエータな

どの部品をより高い位置へと移設する必要がある、またその流路はサスペンションメンバーと交差する可能性がありました。また、最低地上高を上げる必要もあったと思います。そのため、我々は二つの独立したウイングを採用し、一つはフロントに取り付けて地面効果を生じさせるのに使用し、もう一つをリアのちょうど乱れの無い流れが得られる高さに配置しました」と僕は自信を持って説明した。

「他のチームは非常に大きなウイングを採用しているが、君たちは異なるサイズについて何かテストしたのか？」

「いくつかの解析を行いました、それはトレードオフで、システムズアプローチを取らねばなりませんでした.....」審査員たちはこの質問が大好きだ。レースカーはシステムであり、全ての部品が全てのシステムに何らかの形で影響を与える。大きなウイングはより大きなダウンフォースを与えるであろうが、それは他のパフォーマンスに関わる変数を劣化させてのことである。それこそが彼が尋ねている内容だ。空力パッケージの他のシステムへの影響を考慮したか、そしてまた適切なバランスを選択したか、ということである。

僕は続けた。「.....我々は、空力パッケージがマシンの他のシステムに与える影響を考慮する必要がありました.....」。彼はわずかにうなずき始めた。「...そして CFD と車両シミュレーションから得たいくつかのダウンフォースの値を元に、これはゴルディロックスゾーンにあると感じました」

「ゴルディロックスゾーン？」彼は尋ねた。

「そう、大きすぎず、小さすぎず。ちょうどいいところです」

こんな問答が続いた。彼が質問をしようとすれば、僕は彼が本当は何を聞きたいのかを理解しようとした。デザインイベントは大雑把に二つの質問に要約できる。一つめは、「それはマシンの性能を向上させるのか、そしてそれを証明することができるのか？」。僕は審査員が何を求めているのか正確に理解できなかったときは、このように解釈して答えた。二つめは、「マシンの性能が

向上した理由を理解しているか？」。これは僕にとってはあまり面白い質問ではなかった。なぜなら僕は空力担当では無かったためだ。僕は空力の基礎をなす科学を完全には理解しておらず、それがレースカーの性能にどのように影響するかということの一部を知っていたに過ぎなかった。

彼はその2番目の質問を始めたので、僕は不安になり始めた。

「二つのウイングエレメントのギャップを減らしたらどんな影響が考えられる？」

——さて、どうなるだろうか。僕はジェームズがこのギャップについて何らかのシミュレーションを行ったことを知っている。だから選んだものは、僕らの状況に対して最良のものなのだろう。これはつまり、それを変えるということは抵抗が増えるかダウンフォースが減るかのいずれかということだ。——

僕は彼をぼんやりと見つめるのをやめなければならず、そして答えた。

「ウイングの効率が低下すると考えます」

「ほう、しかしどれくらい？」

僕らのウイングは雪かきのようなもので、空気を上にかき上げて上方に投げる。全ての作用は等しい大きさの反作用を持つため、上向きに流れる空気はマシンを下方に押し下げる作用をもたらす。僕はこの考えを基に話を始めた。「その.....ギャップを狭めてもダウンフォースはさほど変わらないと考えます。なぜなら、我々のダウンフォースはほとんどが空気の運動量変化によってもたらされているからです」——そうか、空気抵抗に違いない。——「しかし空気抵抗は増大すると考えます」

僕はじっと立ち、「あってるよな？」という表情を出さないように努めた。

その答えが合ってるか間違っているかを示すことなく、彼はリヤウイングを押し始めた。「ここが大分フニャフニャだが、そう設計したのか？」

僕は少し笑ってこう言った。「いや、まさか。我々はウイングをカメラで撮って、通常の負荷では目立った大きさのたわみが生じないことを確認していま

す。我々には時間がなく……」僕は彼の眉が釣り上がるのを見るや、すぐに言い直すことにした。「……いや、我々は空力システムの別の側面に注目することに時間を割きました。例えば重量とパッケージングというような、全体的により大きい恩恵を得られるものに対してです。

何かをやる時間がなかった、という主張は決していい回答ではない。不明瞭で難解な設計をすることについて、長すぎる時間をかけて決断したマヌケがいるチームというのはよくいるものだ。どの審査員もまた、なぜそのような設計をしなかったのかを知りたがっている。ベストな答え、そしてただの言い訳ではない本当の答えは、僕らは限られた時間を他のリソースをもっと有効に活用できる所に振り分けた、というものだ。それはまた真実で、リソース配分は極めて重要なことだ。Formula SAE は技術競争ではなく、プログラムマネジメントの競争なのだ。それがたまたま多くのエンジニアリングを必要としているだけのことだ。

僕らの議論は審査員長のマイク・オニールに中断させられるまで続いた。

「審査は以上だ、参加された皆さんに感謝したい。全ての審査員はこちらの方に……」

僕はクリスの隣に立っていることに気付き、彼を見ずにこう尋ねた。「どうだろう？」

「いずれ分かるだろうさ」と彼は真剣な顔で答えた。

「それで、次は？」ウェズが尋ねてきた。

「さあね……バーにでも行ってしこたま飲むとするか」と、僕は相変わらず遠くを見つめながら返事をした。

「まあ、表彰式までは待った方がいいですよ」とウェズは言った。

「少し緊張したか、マット？」ボビーが尋ねた。

「分からない」僕はぼんやりと一点を見つめるのをやめて頭を振り払った。

「考えすぎて俺の頭はどうにかなりそうだ。必要なのは、分かるだろ。考えな

いことだ」

「それはつまり、上手くやれたってことですか？」 ウェズが尋ねてきた。

「分からない、彼はそれほど多くのフィードバックはくれなかった」僕はコンロッドが暴れてブチ抜いたエンジンの大穴を見下ろした。それは、戦いの結果に関わらず、僕らが既に戦いに負けたということを思い出させる衝撃的な傷跡だった。「優勝するために来たけど、できなかった。いずれにしてもね。デザインファイナルまで上り詰めたことは悪くはないけど」

「よし、それじゃトレーラーまで戻って荷造りをしよう」ボビーはみんなに言った。

僕は担当した部品を見渡し、そして全てが終わったことを理解し始めた。この1週間、ポスターや空力パーツを個人的に持ち歩き、全てが傷一つない完璧な状態であることを確認していたが、今となっては気にする必要はもう何も無くなった。ウイングは壊れ、デザインのポスターはもはや不要となった。マシンは役目を終え、僕らのシーズンは終わったのだ。

「君のチームのテクニカルリーダーは誰だ？」僕は頭を上げ、マイク・オニールがブレットと話しているのを見た。彼は僕を指さした。

「これからのことを説明しよう」オニールが続けた。「私はこれから四つのチーム全てのテクニカルリーダーにステージに来るように声をかける。そして、デザインファイナル出場チームの順位を読み上げて、さらに君たちのマシンについていくつか質問をするつもりだ」

僕はうなずいた。「どのような質問ですか？」

「なぜこのデザインを選んだのか？ とかどういったテストをしたのか？ といった質問だ。それと、君たちのマシンをみんなから見えるように前に出してほしい」

僕はもう一度うなずいた。

「分かったかね？ よし、それではステージで会おう」

ウェズとボビーがマシンと共に既に移動してしまったに気付いた僕は彼らを追いかけて、マシンを表彰台の方に持っていく必要があると伝えた。残りのメンバーはトレーラーに戻って荷造りを始めていた。道すがら、背後に山があることに気付いた。最初ここに来たときは、都市の中に山が見える光景をなんて奇妙なのだろうと思って見ていた。一度大会に参加してしまうと、それらの存在は消えてしまったかのようにだった。実際、山々は都市からの霧に巻かれて何度か消えた。しかし、たとえそれが見えていたとしても、僕らはマシンとレースに集中しすぎていたので、たとえそれがあまりにも場違いに見えたとしても、街の中から山が見える眺めを見逃してしまっていた。自動車レースとはそういうものだ。

「やったと思うか？」後ろから声が聞こえた。

僕は振り向いて、消火器を運んでいるリーを見た

「うーん.....難しいな。他のチームはみんなすごく良く準備をしていた。ミシガン州立大はでかいディスプレイボードを使っていたし、ブリガム・ヤング大はプロジェクターを使ってビデオを流していた」

「カイルは、審査員は時間の大半を俺らに掛けていたんじゃないか、って言うってたけど」

「まあね。空力の人は確かにそうだったけど、僕らはウイングを付けた唯一のチームだったからね。今に分かる。変な希望は持ちたくない。だって、あのエンジントラブルを見過ごすことは難しいから。つまり、あれがデザイン上の欠陥のせいだと考えるだろうってことだ」

「でも、デザインでトップ4なんだろう」彼は言った。「ものすごく大きな成果じゃないか」

僕らはトレーラーに戻り、表彰式が終わったら出発できるように荷造りをした。僕らはみんな、奇妙な気分だった。デザインイベントの結果発表を楽しみにしていたが、疲れ果てていて、一言二言話すのがやっとだった。

僕は表彰台に戻り、デザインファイナリストのレビューが始まるのをマシンの周りでぶらぶらしながら待った。僕らはいくつかの質問に答え、時折、「みんな、完走できなくてごめんな。あれはとんでもなく壮観な事故だった！」と笑い飛ばした。

「よし、じゃあ始めるぞ」マイク・オニールがスピーカー越しにアナウンスした。「チームのテクニカルリーダーはここへ集まってもらえるか？」

僕はステージに上がり、全体が一番端、オーバーン大のチーフエンジニアの隣に立った。希望的観測だったかもしれないが、僕は3位を期待していた。

「ここにいるほとんどの皆さんは小学生だったと思うが、私がFSAEを始めたころを思い返すと、競技のレベルは現在とは程遠いものだった。今日のチームは全く新しいレベルにあり、皆さんのチームが毎年ここまで成し遂げていることに対して感銘を受けている」

彼は参加チームのいくつかの異なるデザインのうちで、審査員が好んだものと、そうではないものについて話した。僕は緊張しながら立ち続け、ボトルの水を持ってくればよかったと思った。

「4位のチームはみんなを驚かせてくれた。誰も彼らがここまでうまくやるとは思っていなかったと思う……」

確かにそうだ。そのイベントの途中まで誰も僕らを気に留めてさえもいなかった。それまでは、僕らはただの中堅チームに過ぎなかった。

彼は続けて、「ブリガム・ヤング大学は結成初年度のチームで、そのマシンは……」

——はあ……じゃあ僕らは3位だろうな……。——

彼はブリガム・ヤング大のマシンについて話したが、そのマシンは僕も新参のチームとしては驚異的なエンジニアリングの芸術品だと思った。彼はブリガム・ヤング大のテクニカルリーダーにマシンについていくつかの質問をした後、発表を続けた。「さて第三位は、優勝レベルの性能のマシンを持ちながら、今

年は幾つかの不運に見舞われて、エンデュランスを完走できなかったチームだ」

——まあ、大層な誉め言葉だと感じた。優しい言葉をありがとう、オニールさん……。——

彼は続けた。「ミシガン州立大学は……」

——何！ ミシガン州立大に勝ったのか？ ミシガン州立大にだぞ！——
オニールは彼らにデザインとエンデュランス中に起きたエンジントラブルについていくつか質問をした。僕はそれを上の空で聞いていた。なぜなら、僕らがミシガン州立大よりも優れていると、あの審査員たちがなぜ納得できたのかを理解しようと必死だったからだ。

「そして2位は、オーバーン大チームが作り出した素晴らしいマシンだ。繰り返しになるが、君たちのマシンはしっかりと設計されていて、しかも十分にテストされていた。そこでぜひ私に教えて欲しいのだが……」

僕は立ったまま静かに大きな笑みを浮かべ、オーバーン大のいいムードをぶち壊さないように努めた。僕はシャンパンのボトルを持って走り回って、そこら中のものとみんなにかけて回れば格好いいだろうかと考えた。多分そんなことはない。

数分の間オーバーン大のマシンについて話した後、オニールは歩いてきて僕の隣に立った。

「今年のオクラホマ大チームには審査員全員が感銘を受けた。このチームの特筆すべきはその結束力だ。我々審査員は彼らが友人のように一緒に働き、非常にうまくやっているのを見た。彼らはマシンを理解しており、各システムがどのように相互に作用し、干渉するかということも理解し、そして設計を支える十分な試験データと、裏付けがあった。疑いなく、彼らのマシンは最高だった。我々は、あの失敗があったにせよ彼らが最高のチームだと感じている。あれはマシンを限界に近いところで走らせたことによる偶然の結果であり、技術や設計の欠陥ではなかったと考えている。もし、5回この大会を開催したとす

れば、オクラホマ大はそのうち4回は優勝するだろう。彼らは空力の有効性を、審査員と、それに懐疑的な沢山のチームに示してくれた。私は、来年にはもっとたくさんのチームが空力設計を取り入れるものと期待している」彼は僕に向き直って尋ねた。「コース上で起こったトラブルについて話してもらえないか？」

僕はじっと立ち、不安な気持ちで言うべきことを考えた。数秒ほど考えた後、僕は頭に浮かんだ唯一のことを話した。

「うう.....嫌です」

みんなが笑った。

僕らは総合14位で大会を終えた。これは、イベントの総得点のうち40%に相当するエンデュランスイベントで得点ゼロだったことを考えると、見事な結果である。テキサス A&M 大は2年連続で優勝した。授賞式では、僕らは他のほぼ全ての賞を獲得した。コミュニケーション賞で1位、オートクロスで2位、そしてデザインで1位など。僕らが記念の盾とトロフィーをもって授賞式から帰ろうとしたとき、あるグループが僕らの背後から叫んだ。「Boomer！」

それが誰かを確かめることなく、僕らはみんなで「Sooner！」と叫び、それから振り向いてテキサス A&M 大の生徒たちを見た。

僕らは少なくともインパクトのある結果を残せたことを知ることができて良かった。この日はずっとトレーラーに引きこもっていた、総合優勝目前まで行った偉大なチームのことを覚えていたのは僕らだけでは無かったのだ。シンデレラチームのように、僕らはダンスフロアでスポットライトを浴びるためにどこからともなくやって来た。真夜中になっても、おとぎ話みたいなハッピーエンドにはならなかった。しかし少なくとも、僕らは踊ったのだ。

エピローグ

大会の後、何人かは休暇としてカリフォルニアに留まった。さまざまな都市を走り回り、名所を観光し、僕らの FSAE 物語の最後にいくつかの思い出を付け足した。この数日間で、たくさんの「本当にデザインで勝ったのか」と「デザインで 1 位を取ったのがまだ信じられない」があった。優勝を逃したことに對する慰めとまでは言えなかったが、ここまで到達できたことは本当に信じられないことだった。スコアを合計すると、最初のペースでエンデュランスを完走できていれば約 75 ポイント差で優勝できていた計算になる。ほとんどの大会で 1 位から 3 位までのチームが 10 点以内であることを考えると、かなり驚かされる結果だ。僕らはほとんど優勝だった。だが、どれくらいのチームがそれを言えるだろうか？ ミシガン州立大は僕らのすぐ後に起きたエンジントラブルさえなければ優勝していただろう。自分たちが持てる全てを捧げて最終的に優勝したとか、最高の結果になったとか、そういう話をよく耳にするだろう。しかし、あらゆる障害を乗り越えてたどり着いても、勝利に必要とする運に見放されてしまうチームや人もいる。

デザインの審査員たちはみんな、僕らのチームの団結力、そしてみんながうまくやっていることについて話していた。最初は、僕らがみんな仲良しだと審査員を騙しおおせたことに驚いた。チームは半年の間、二つのグループにほぼ分裂されているようだったし、必要以上の争いもしていた。しかし、この 1 年を思い返し、僕ら全員がお互いに向かってどういう行動をとって来たかを振り返ってみた。多くのことを議論し、しょっちゅうお互いを憎み、文句を言い、嫌味なことを言い合った。でも僕らはまた同じ場所へ戻り、次のミーティングに現れ、お互いの宿題を助け合い、自由時間を一緒にバーで過ごしたりした。

みんな兄弟のようだった。多産な家族が5年間にわたって少数のエンジニアを絞り出したようだった。口論やけんかをしていたにもかかわらず、いや、ある意味ではそのせいで、僕が知る限り、クリスと僕は兄弟のような間柄だった。正直に言ってこの4年間に彼と過ごした時間を合計すると、恐らく過去20年間に実兄と過ごした時間とほぼ同じになるだろう。密接なグループで仕事をするとき、僕らのように数十人の人と共に、時には本当に週100時間の継続的なストレスの多い状況が続くと、少なくとも数回はシャベルで人を叩きたくなる。その一方で彼らが家族であるかのように知り合うこともできる。自分自身の姿を見ることはできなかったが、審査員には見えていたのだろう。

ようやく工房へと戻ったとき、僕らはマシンとトロフィーを降ろし、そして別々の道へと旅立った。カイルは地元のゴーカート場で働いた後、レースカーエンジニアリングの修士号を取得するためにイギリスへと向かった。僕らは時々会うこともある。誰かの家の近くでレースイベントをやっていて、誰かがそこに行くためのいい口実を持っているときなんかがそうだ。リッキーはもう1年学校に通っていたが、卒業に集中するためになんとかレースチームの誘惑に抵抗した。まだどちらも堀のある城は持っていない。クリスは結婚し、他3人のオクラホマ大レーシングチームの卒業生と同じ会社の同じ部署で働き始めた。数年が経つと、僕らの道は再び交差し、今では同じ会社で働いている。ボビーはチームへ残り、2期目のチームキャプテンとして再度選ばれた。みんなにとって嬉しい驚きだったのは、彼が最終的に卒業できたことだ。ウェズはボビーと同じ年に卒業し、彼の故郷であるテキサス州にある石油会社で働いた。スーパーデイズは、キャンパスの周りで何度か見かけただけだった。遠目に暗がりの中に見える彼の姿は、コーヒー中毒のサスカッチのようだった。彼には何でも成し遂げる才能と集中力があつた。彼が結局どこで何をしているのか、僕はいつも気にし続けるのだろう。

翌年、チームはいいマシンを作り、両大会の全ての競技を完走し、デトロイ

トでは 21 位、カリフォルニアでは 3 位になった。毎年、卒業していく先輩たちはこう言った。「俺らがいなくなったらこのチームはだんだん悪くなるだろう」。でも、毎年成績は上がっていった。2008 年度のチームはその傾向を引き継いだ。3 位は今までで最高の成績だった。教授陣が深く関与している名門校でもなければ、トップチームになるには多大な努力と幸運が必要だ。さらに適切な時期に適切なメンバーも必要になる。僕はいつもオクラホマ大の活躍に期待している。いつの日か執拗な情熱を持った別の子供らが、勝利のために懸命に努力してくれることを願っている。

僕に関しては、クロードの面接を受け、ついに自動車レースでの刺激的なキャリアを得た。レース、そしてエンジニアリング両方の面からチャレンジなものではあったが、FSAE で僕を駆り立てていた情熱は一部欠けていた。プロのレースは別の世界だ。スポンサーとドライバーの顔色が王様であり、マシンはおまけだ。FSAE は全てマシンのためにある。まるで 50 年前の、金儲けとテレビ放送の無い時代のレースのようだ。今ではプロのレースビジネスによって全て変わってしまった。賞金がわずかで、トロフィーだけが唯一の賞品であるようなレースはもうほとんど残っていない。こういうレースが最高だ。そして FSAE は最高の中の最高だ。

全てのことを考慮すると、勝利に固執し際限なく没頭するのは止めた方がいいだろう。レースには中毒性がある。ギャンブルのように断続的に増幅していく習性だ。通常は負けてしまうが、時には勝って、そして何度も戻ってきてしまう。もしそのまま放っておけば、レースは自身の人生をおざなりにし、全ての物と全ての人間を追いやってしまうだろう。長い人生における一部の点としてこれほどまでに刺激的で面白いものを想像することは難しい。熾烈な競争の熱情の中でも、人生における戦争の学校でも、そこには価値ある友人と家族、そして経験がある。それは幸運やトロフィーに恵まれなかったとしても変わらないものだ。

写真



コンピューターラボでスケジュールを更新する筆者。

星と車のシールが追加されるのはもう少し後だ



工房という名の地下壕で CNC フライスを操作するボビー



工房内の一枚。2006 年のマシンが手前に、2005 年が後ろに、
そして以前のマシンのボディが壁に吊るされている



フレームの製作が始まった。ウェズはエルゴノミクスのテストに夢中だ



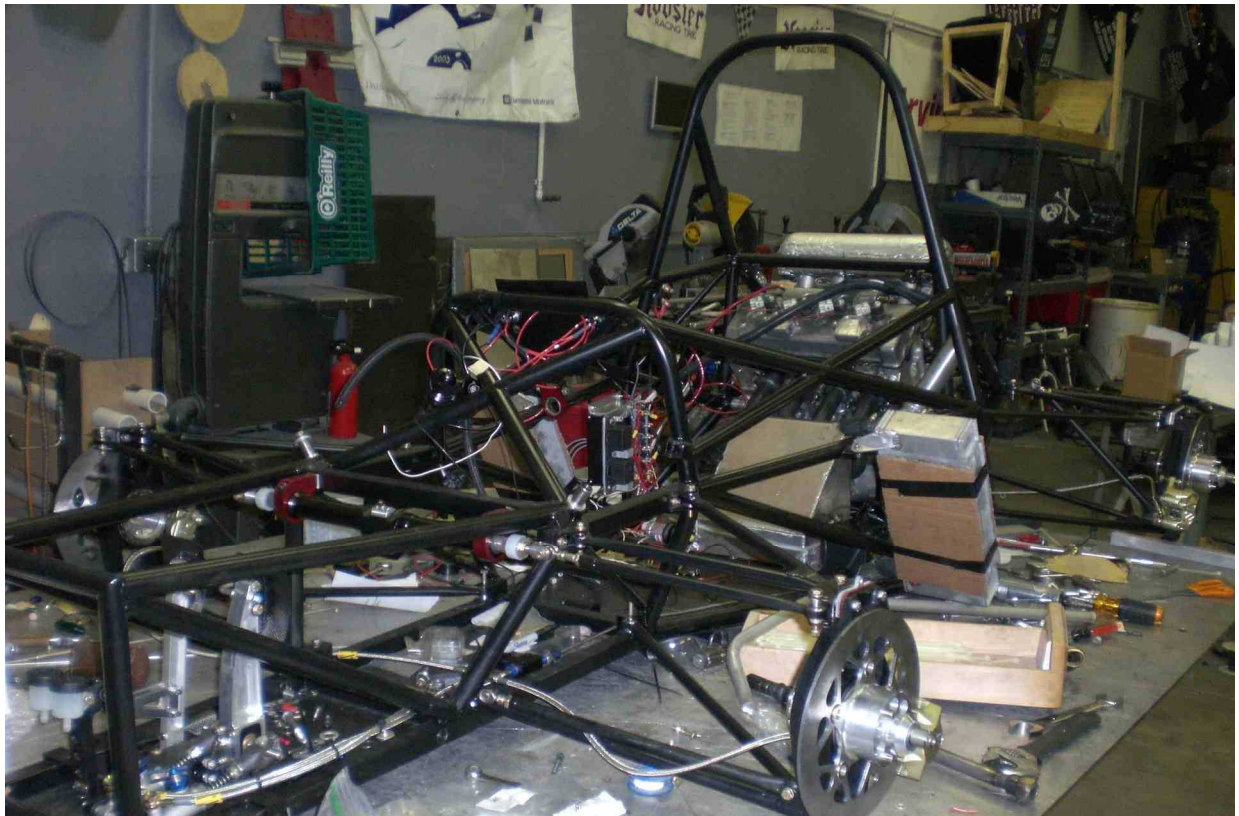
細心の注意を払ってエンジンケースの改造を行うリッキーとアンディ



僕らの車が車らしくなってきた。車の様な何かに



フレームのねじり剛性を測定するアンディ



作業場をきれいにしておくことはどんな時でも重要だ



エンジンを搭載する前に電装系のテストを行うリッキーとクリス



午後 11 : 55 山岳標準時



静かな週末にバスケットボールスタジアムの駐車場で冷却システムのテスト
を行うクリスとボビー



最新鋭のインパクトアッテネーター（別名：ロードコーン）をテストするボビーとクリス



工場の周りにある工業団地でウイングなしのテストを行うカイルとクリス



No Sleep Till……出発してすぐの所まで！



デトロイト大会のオートクロス出走直前、ゾーンに入っている筆者。

カウボーイハットはオクラホマに住む人間の標準装備だ



排気部品を探すために広大なデトロイトを走り回る必要がなくなり、
リーはとても幸せそうだ



エンデュランス出走前。素敵なプッシュバーに注目。

それと It's all about Chuck にも



遠くに消えゆくカリフォルニア山脈



スプロケットハブ。スプロケットが取り付け小さな穴と大きな半円の間に亀裂が見られる



そう、これがパドックに設置した海賊船をテーマにした子供用プールだ

8

University of Oklahoma

Team Name: Sooner Racing Team

Faculty Advisors: Mitch Burrus, Zahed Siddique

Sponsors: University of Oklahoma, 3M, Schlumberger, Napa, Iron Horse Development, Stone Canyon Exploration, Compressco, Burrus Family



BODYWORK: Rich Mahogany
BRAKES: The Midas Touch
COLORS: Rich Mahogany & Bird
COOLING SYSTEM: Water
DRIVE: Hope and Inspiration
ENGINE: Yes
FRAME: Bamboo strapped w/Vines
FRONT SUSPENSION: Single Axle
FRONT TRACK: Rich Mahogany

FUEL SYSTEM: TMI (Tuned Monkey Injection)
FUEL TYPE: Sunoco
INDUCTION: Air
OVERALL HEIGHT: 5
OVERALL LENGTH: ask your mom
OVERALL WIDTH: 34"
REAR SUSPENSION: Posi
REAR TRACK: Rich Mahogany
SHIFTER: Minty Fresh

TIRES: Round
UNIQUE FEATURES: Many Leather bound books, Cup Holders, Innovative Innovations, and of course- Rich Mahogany
WEIGHT: We weight for no one
WHEELBASE: At the "Wheel-Lair"

オクラホマ大学 2007 年度マシンの知っておくべき重要事項一覧



パノラマ写真のために全チームが集まった



デザインセミファイナルでのチームとマシン



イベント前にエンデュランスのコースを歩くカイルと筆者、そしてカンザス大の友人のニック



速く走るために細かい部分まで話し合うカイルと筆者



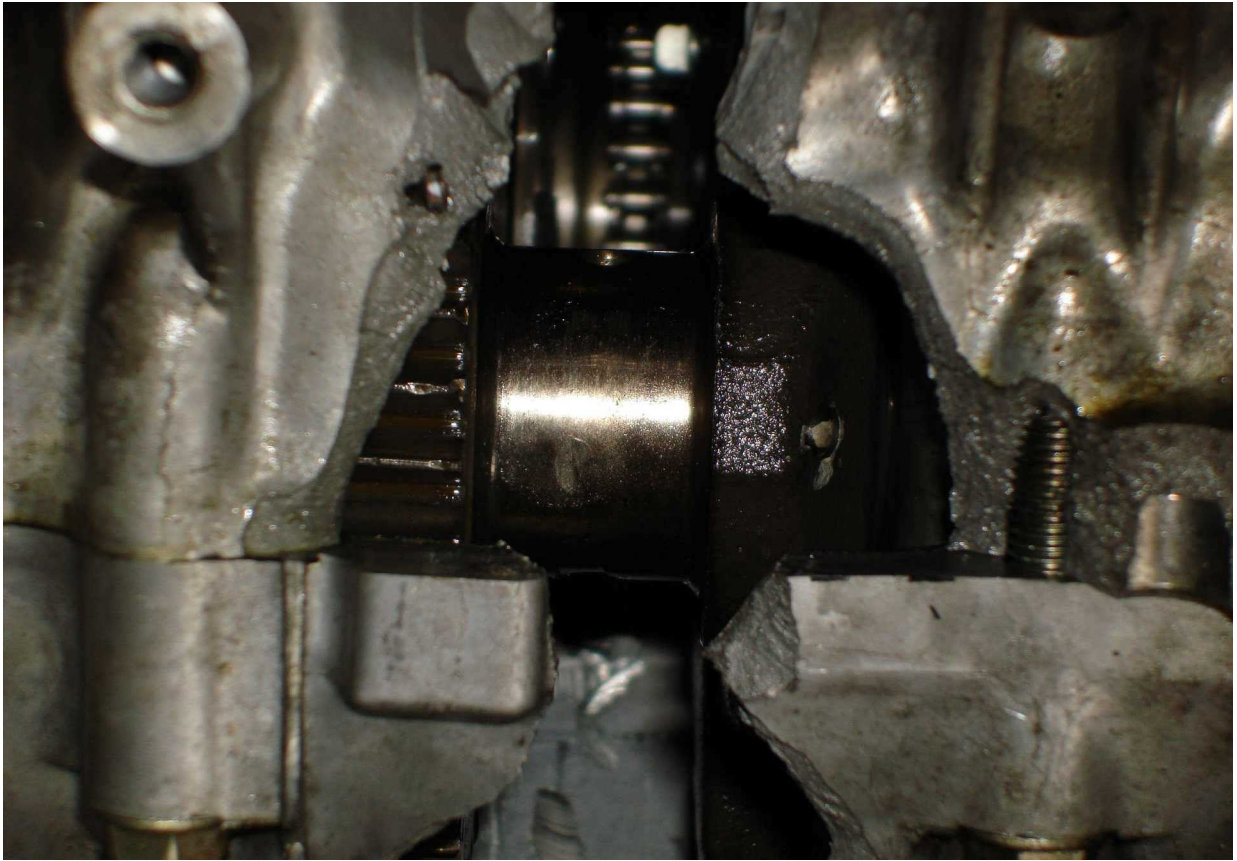
運転に没頭するスーパーファスト・マット



タイヤを有効に使うカイル。オクラホマ大は横Gを授ける



くすぶった残骸



コンロッドがブチ抜いたエンジン底面の巨大な穴



後列左から：ローレン、ウェズ、リッキー、ジョシュ、筆者、クリス、カイル、
フィル、シディー博士、ミッチ、ゴラハリ博士
前列左から：ブレット、ボビー、トレイ

著者について

www.superfastmatt.com

奥付

Racecar: Searching For the Limit in Formula SAE

Copyright © 2011 Matt Brown

Photographs © 2006-2007 Dan Gielas, Bobby Alley, James Waltman,
Gloria Burris, Wesley Blackman

ISBN (原書電子書籍版): 978-0-9847193-2-7

Seven Car Publishing

<http://www.SevenCarPublishing.com>

本書のいかなる部分も、適切な短い引用の場合を除き、著者の書面による許可なく、いかなる形式または手段によっても複製することはできません。

本書の日本語版は原作者の許諾を得たもので、著作権は原作者に帰属します。

RACECAR: Formula SAE の限界を探して

著者：Matt Brown

翻訳：内藤 良介 / 田中 和宏 / 市川 玄人

ISBN：978-0-9847193-5-8

2020 年 7 月発行